

生活文化

生活文化同人会報

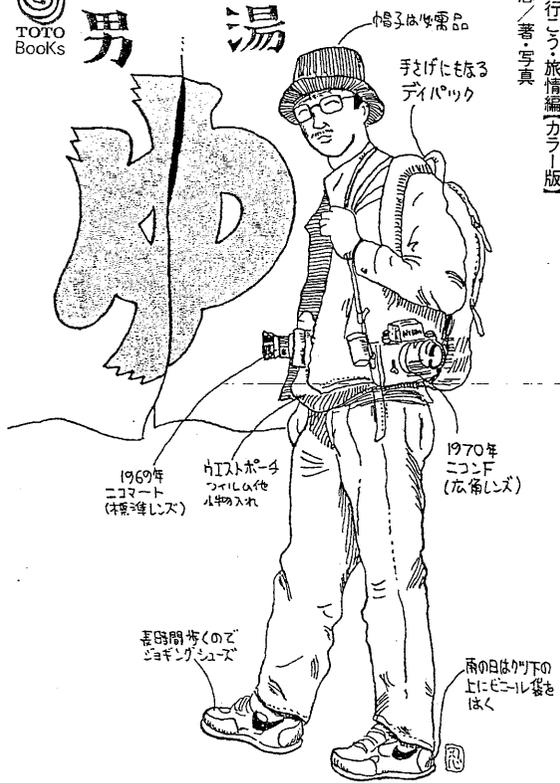
1999 (平成11) 年02月号 No.35

	表紙・目次 01
Ⓜ	濟州島日記／飛山龍一 02
	石川正子さん追悼 06
	夢屋ものがたり⑬ 08
Ⓚ	ミーハー建築探偵Ⅱ 清泉女子大／岡部知子 10
	第6回大平建築宿のお知らせ 12
	掲示板 13
Ⓛ	98年度総会報告 15
	事務局挨拶 17
	世話人会報告・事務局より 18

■ 定例会 99/2/19 (金) 6:30~8:30 PM
 於：東京芸術劇場 (池袋西口) 小会議室1 5階

009
 TOTO Books

男湯



銭湯へ行こう・旅情編「カラー版」
 町田忍／著・写真

テーマ 「のれんの先は極楽浄土」
 銭湯と霊柩車は何つながり?

講師 町田 忍 (庶民文化探求家)

藤森照信さんに「銭湯のことなら町田さんに聞け」?!と言わせるほどの銭湯通が、霊柩車の不思議を求めてフィールドワーク。ところが、意外や意外、銭湯との思わぬつながりが・・・

世話人 江原 幸彦

主な著書

- 『銭湯へ行こう』TOTO出版
- 『銭湯MAP』TOTO出版
- 『マッカーサーと征露丸』芸文社
- 『納豆大全!』小学館

展示会

- 「吉兆にっぽん“福だらけ”1999展」
 銀座ポケットパークギャラリー1F 2/7まで
- 「チョコ博」
 銀座TOTO食の情報館5F 2/28まで

濟州島日記 (98.11.20~24)

濟州島は、北九州と同じ緯度にある韓国最南端の島。火山島で中央に漢拏（はんら）山が母なる山として鎮座しています。南西部には椰子も生え、韓国の新婚旅行のメッカです。特異な自然、歴史に洗われた生活文化は訪れた者を暖かく迎えてくれました。

市街地を出るとまず石垣が目に入ります。日本の棚田とは異なり低い土壁のように石（溶岩）を積み上げたものです。灰黒色の石垣は延々と続き、道路と周囲の畑を、また畑と畑を遮断します。石垣は防風樹と一緒にあって畑を細胞壁のように囲み、小空間を形成しています。平地には果樹園が多く、防風樹のマツやスギのくすんだ枝葉の向こうでミカンが輝いています。

濟州島は、標高が高くなるにつれ荒野が多くなり、牛や馬の放牧地の周りでススキがたなびいています。牧草地もまた石垣が取り囲みます。牧草地のいたるところにお墓があります。お墓の場所は風水師（占い師）が決めたものです。濟州島のお墓は数坪程度で、四角く囲んだ低い石垣の中に小さな円墳があります。

濟州島人は、畑を耕すのに邪魔な石をひとつひとつ石垣に積んでゆきました。邪魔だった石も石垣に姿を変え、島特有の強風から島民や島民の祖先を守っています。今では手垢もとれて、石垣は濟州島の風景そのものになっています。

最初に訪れたのは、島の西部、濟州島民族村です。広大な敷地に19世紀の農家、漁家、官吏の館などを移築しています。民家の敷地の入り口には、2つの低い石柱が立っています。3本の丸太を通す穴があいており、3本ともはずれているときは在宅の印だそうです。敷地の右手に石組みの台があります。女性が大きな水瓶担いだり降したりする所です。濟州島は水の便が悪く、水瓶は生活の必需品です。重い水瓶を担いだ姿は濟州島の母親の象徴となっています。

濟州島の民家はこじんまりとしています。

饅頭型の屋根と石の外壁が特徴です。屋根が茅と竹、壁が石と土、骨組と床板が木でできています。

民家はオンドル部屋、板間、土間、縁側からなっています。オンドル部屋が寝室、板間が居間、土間が台所です。それに中庭、屋外トイレがあります。

屋根は、茅葺き寄せ棟づくりで、小竹の上に土、その上に茅を被せ、縄で荒い網目状に押さえます。縄の端は竹に縛り軒下でその竹を固定します。

細い柱は、太鼓落として曲がりくねって梁を支えています。柱材はカシとかエンジュとか堅木（広葉樹）を削ったもので、基石の上にそのまま立っています。梁は二重梁で板状の束が棟木を支えます。

外壁の石は軒の高さまで積み上げ、隙間を土で埋めています。

オンドル部屋は2～3畳で、おじぎをしないと頭が着くくらい天井が低い部屋です。オンドル部屋は五右衛門風呂のように床下で火を焚き部屋を暖めます。室内の気密性を高めるために床、壁、天井全てに白い紙が張っており、穴蔵のような感じがします。済州島では、家族みんながここで寝るのだそうです。

ガイドの高京姫さんは日本語も達者な利発な女性です。彼女の家もオンドル部屋があり、子供の頃は家族6人が狭いオンドル部屋で足を重ねて寝たそうです。旅行中、南北離散家族の再会のニュースが大々的に取り上げられ、京姫さんも声を詰まらせていました。韓国では日本人が想像する以上に故郷や家族との別離に対する感情が強いようです。儒教の国だからと言われていますが、オンドルの胎内のような空間が惹きつけるのかもしれませんがね。

オンドル部屋の開口部は縁側への出入り口ではなく窓だそうです。観音開きの障子がついていて、水戸納豆が吊してありました。水戸納豆だと思ったものは、実は、観音開きの障子が風で閉まらないようにするための重石で、中は石だそうです。藁の編み方もいくつかあって綺麗で風流。

済州島のオンドルには、煙突がありません。焚き口こそ部屋と仕切られていますが、煙は壁、柱、梁、屋根をいぶします。この煙が、シロアリや潮風や腐蝕の害から家を守るのだそうです。燃料は小枝、松ぼっくり、牛糞などだそうです。



高京姫 画

オンドル部屋の隣は板の間です。幅広の大引きが露出しており、これに、長さ50センチくらいの堅木の板をはめ込み床としています。ちょうど削られた床板は、拭き込まれて黒光りしています。ここは居間で、小さな家具や石をくりぬいた四角の火鉢が置いてあります。

その隣は土間で、簡単な作りの竈が3～4個あります。釜が乗せてあり厚手の蓋はフライパンにもなるそうで、チヂミを焼きます。

戸も堅木です。戸板の柱側の上下に棒がついていて、鴨居と敷居の穴に挿して観音開きにします。板と棒はくっつけたものではなくて、一枚の板を右(左)側上下の5センチくらい棒状に残して加工したものです。針葉樹の板なら棒の部分が簡単に折れてしまいそうですが、堅木の板なので平気。

トイレは、家の裏手にあります。2段3段の石の階段を上った所は踊り場状になっていて、足下に小さな隙間があります。ここにしゃがんで用をたします。踊り場の下は小さな空間で、黒豚が食事をするところでもあります。豚小屋は石垣で囲っており、その端がトイレ(食事場)です。お尻を舐められるのがいやな人は細長い竹で追い払いながら用をたします。

濟州島では素材の使い方に感心しました。背負子は枝持ちの2本の木を使って、枝の部分で荷物を支えるように工夫しています。大きな戸の蝶番に曲げわっぱを使っているものもありました。民家の柱や梁も曲がっているなりに上手な使い方をしていました。水戸納豆、石の火鉢そうですが、土地にある茅や石を用に応じて工夫して使っています。

成邑民族村は、村全体が民族資料保護区域に指定されており、実際に人が住んでいます。博物館的な濟州民族村の見学の後だったので、生活の営みが伝わってくるような気持ちがありました。

濟州島では、日本の田舎のような孤立民家はほとんど見られません。成邑民族村も高い城壁に囲まれています。ちょうど官庁の復元工事が行われていました。現場では4人の方が働いており、鉋ですさを切る人、木枠を解体している人、土壁を塗る人がいました。盛土に水とすさを入れ土壁用の土を寝かせていました。

ご一緒させて頂いた加藤さんは左官の第一人者。現場を見るなり走り出しました。すさの量が少ないこと。土の寝かせが足りないこと、すぐにひび割れが生じるであろうということに参加者に説明されました。加藤さんの発言には重みがあります。

翌日は、大静郷校という儒教の道場を見学しました。濟州島最南部の平地に山房山(ツバツバ)という奇岩がそそり立ち、隣になだらかで女性的な姿のテウンサンという丘が横たわっています。大静郷校はテウンサンを背にして、平地の畑に面して建っています。16世紀ころ建てられたそうで、周囲を塀で取り囲み、山手に金堂、下に講堂のような建物があり、二つの建物は中央に門のある塀で仕切られています。

金堂は、基壇の上に太い柱立てで、壁は途中まで石積み、その上は板壁になっています。柱は大節だらけの地マツですが、朱色に彩色が施してあります。反りのある屋根は瓦葺きで龍にも鳳凰にも見える軒瓦で飾っています。タルキは扇タルキで、肘木には小さな斗がかえる股の中央部には更に小さな斗があり、木部の全てに朱、青、黒など色彩豊かな模様が描かれています。

一方、講堂は金堂より低い平屋で、肘木も小さく斗もない建物で、金堂とは明らかに差がつけられています。

テウンサンは、一面マツの疎林です。下草や雑木もなく、頂上付近のマツの幹さえ識別できます。山壁のないならかな斜面を西風が駆け抜けます。頂上には、放牧された赤牛が遙か彼方を観ています。

樹木は、濟州島の平地ではあまり育ちそうにありません。エンジュ、カシに加え、防風樹にマツ、スギ、ヒノキを植えています。樹高はせいぜい10m程度です。気候的には、標高1,000mくらいの所にかかなりの大木がありそうです。宮殿、官庁、儒教の道場などに限って大木が使われたのでしょうか。

大陸文化はもともと肉食のようですが、濟州島も元の統治下時代、山林の焼き払いと放牧がかなり行われたようです。現在でも放牧が盛んに行われており、濟州島の大陸的景観はその影響でしょうか。

濟州島には、海女がたくさんいます。二日目に訪れた西帰浦市の近郊、正房瀑布（高さ23m、幅8mの滝で、太平洋に直接落水する。）では、海女が、タコ、サザエ、ホヤを潜って採り、活け作りにして食べさせてくれます。真露を片手に飲ンベが舌鼓を拍っているあいだに、吉田先生は正房瀑布のスケッチを描き終えていました。漁村民家を保存している中文民族博物館では、みんながコーヒーを飲んでいる間に大静郷校のスケッチのを、ホテルでビールを飲んでいる間に小町さんの似顔絵を描き終えていました。吉田先生のスケッチは、見た人がその場所、時間に戻ったような気持ちになり、風や日差しまで感じられ、とても不思議です。

似顔絵のモデルになった小町さんは数寄屋建築の大家です。

最終日、濟州島の市に行きました。アンコウ、タコ、イカ、タイ、ヒラメ、太刀魚、サザエなどの魚介類、キムチや野菜など見ただけで楽しくなります。小町さんは、濟州島の海苔を大量に買い込み、大きな袋を片手に前のめりになって品定めをします。ベレー帽をかぶったその姿はプロの仲買人そのもので、プロはどこで何をしても決まるものだと感心させられました。

私も、2度ほど韓国の人に道を尋ねられ、韓国が身近になったような気がします。

(同人 飛山龍一)

●『住宅建築』編集員で同人の石川正子さんが昨年11月亡くなりました。同人の活動では、韓国研修ツアーをはじめたくさんの企画に関わっていただきました。追悼の意味を含め、ここに同人紹介に登場いただいたときの文と、岡部知子さんによるお別れの言葉を掲載します。謹んでご冥福をお祈りいたします。

会報 26 号より－同人紹介＊石川正子

去年の同人の建築文化研修ツアーの計画をすることになった時のこと。

何に的を絞ればいいのかしら、何処がいいかしら、と考えているうちに、私だったら何処へ行きたいか、これが計画のはじまりでした。ここと、ここと、それからここもいきたい。だめだめここまで広げるとこの日数では無理、じゃあここと、ここをこのルートを使うと、これが次の段階。そして大まかな計画を立てる。再度桂二さんに見てもらおう。それから仕上げ、ルートを決定する。後はよく知っている人の意見を素直に取り入れて、これがまた次の段階、そして飛行機の時間が決まると最終決定。こんな経過で去年の旅行は決まりましたが、私が旅行に行く時にコースを決める方法とほとんど同じ。時間がなく、とりあえず飛行機を予約して、ホテルを決めてでかけることも。その日の気分、天気によって、それと空港に置いてあるインフォメーションで着いてから計画します。大枠だけ決めて、後は成り行きにしています。それは知らない情報が多いからです。意外な発見があるからです。でもこれができるのは、一都市滞在か二都市で旅行をする時です。地図と路線図それにガイドブックを持って電車バスに乗って移動します。逆方向へいってしまうこともしばしば。

ウィーンで、ホフマンの住宅を見て歩いていた時のこと、現在は某国の公使館かなにかになっている家の角にポリスポックスがあり、ガイドブック片手の私たちはジロジロ見られて、さすがにカメラを向けられなかったり、一軒の家の前を、あそこに市松模様が使っている、とかいいながらウロウロしていたら、散歩をしている人にうさん臭げにジロジロ見られたり、住宅街の中ですから当然ですけど。でも道に迷いながら、目的の建物を見つけた時は嬉しいものです。ホイリゲでワインで乾杯したり、おしゃべりをしたり、これも旅の楽しみの一つです。

またバルセロナでのこと、ガウディの住宅を地図を頼りに探していたら、あまりの寒さで行き倒れになってしまった人がいて救急車で運ばれて行くのを見えたり、大雨の中を歩いていて靴の中で水が踊るのが気持ち悪かったり、アンダルシア地方を旅していて、50年振りの異常気象の時は道路が陥没してしまい大回りをしなければいけなかったり、崖崩れの現場では応急修理の脇をソーと通ったりと大変な思いもしています。

貧乏旅行しかできないけれど、たまにはオペラも見に行きます。オペラ座では、安い席でも豪華な気分になります。食べ物は、田舎へ行くほどおいしい。旅は楽しいものです。



仕事は、月刊誌の編集をしているので、時間に追いかけてられどし、だから旅に出たら時間を気にしない。追い付かれても気にしないことにしています。アクシデントも気にしないことにしています。1日は24時間なのです。外を見て内のことが見えてくることがあります。だから数多く見ることにしています。そして、その背景を、歴史を、風土を考えることが大切なのだと思います。今はそう思っています。



「初めまして」と名刺交換をしたのは、青森で行なわれた木造フォーラムでの会場でのこと。確か同人会員の鈴木久子さんと一緒でしたね、7年前の事でした。その後仲良くして頂くようになったのは、同人にお誘いしたのがきっかけだったでしょうか。

それからは、同人を含め色々なところで一緒に企画をしたり楽しい時間が持てました。見学会などがあると、お互い誘いあって沢山の現場を見に行きましたね。私の知らない見学会も「私と一緒にいれば大丈夫だから」と楽しませていただきました。

そして、同人のメンバーと行ったセルベタでのスキーでは、優雅で華麗で石川さんそのままが出ているような、滑り方を披露してくれました。そんな滑り方を吉田先生は「お嬢様のフォームだ」と言われていましたね。建築も遊びも一杯いっぱい教わりましたよ。

石川さんはお世辞を言ったり、お愛想したりしませんでした。が、気持ちに2面性が全くなく、お付き合いの中で人に嫌な思いをさせる事のない方でした。

なーんてずっと書くつもりだったのですが、そんなのきつと好きじゃないよね。石川さんの話が出るたび、家でも外でもすぐに泣きたくなる私でしたが、もう泣くのもやめました。

同人で韓国旅行に2度一緒に行きましたね、すべて石川さんのお膳立てでした。私は世話人といながら、勉強させてもらっていたように思います。3度目も同じように行くつもりでした。そしてその後1ヶ月というところで、「私体調悪いから後頼むね」という電話が入りました。国内旅行ならお世話できない事はないけれど、外国旅行は、と思っていた。のですが、コースも予算もすでに決まっていたので「後は最終メンバーを伝える等・・・難しい事は残っていないよ」という言葉にやるっきゃありません。そんな経験もさせてくれたお陰で、次に外国に行くという機会があったとき何だかできそうな気がしてきました。

「ほら、もう一人でも出来るでしょう」という声が聞こえてきそうです。建築も芸術も知識の広い石川さんだったけど、その知識をひけらかす事なく、人を卑下する事なく、必要な時に必要な事を教えてくれた事は、私にとって、いえ石川さんと接した人にとって、どれだけの財産になっている事でしょうか。

でも心残りは、沢山の貴重なモノを頂いたのに、まだ何のお返しも出来ていないと言う事、あつという間のことで、お見舞にも行けなかった事、皮肉にも3度目の韓国旅行中の事だったので、お別れも言えなかった事・・・。

いつもき然としていてカッコ良かったけど、グチグチしないでさつと去って行く、石川さんの亡くなり方「よっ!江戸っ子」て声を掛けたくなるほど 決め過ぎです。

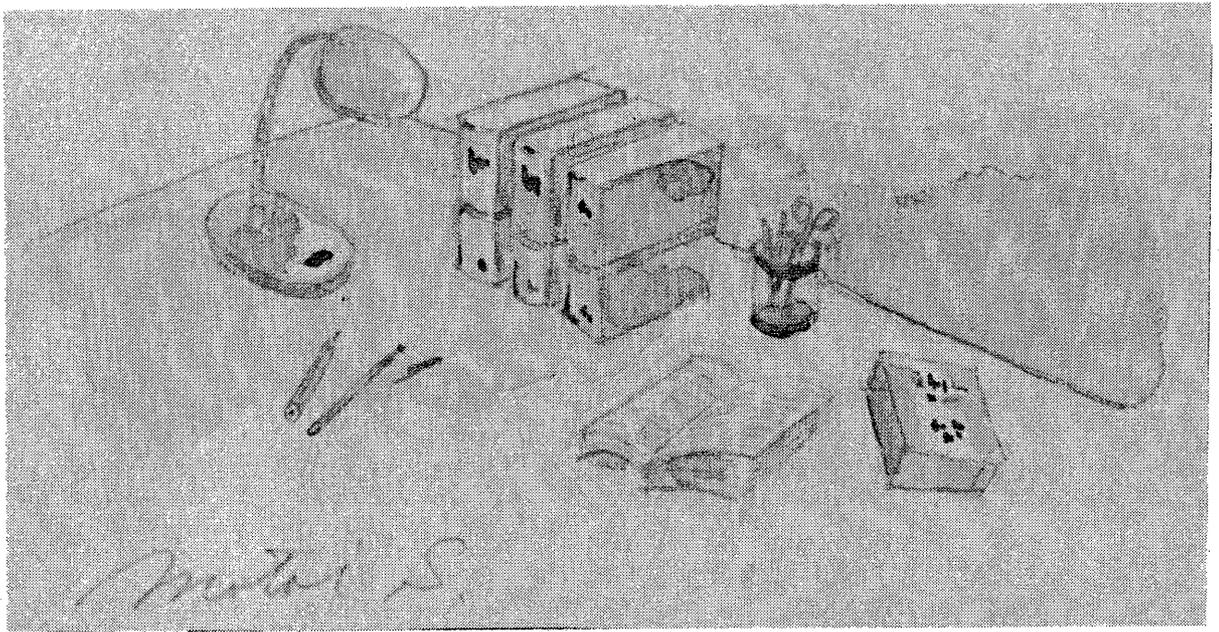
どなたかが「人は二度死ぬ」と言われました。一度目は肉体が死ぬ時、そして二度目は人の記憶の中から消え去った時。

私たちが、建築と何らかのかかわりを持っている間、石川さんの事はずっと心の中に生き続けると思います。

石川さんに教わった沢山の事、厳しい言葉の中にも優しさをいつも持って接してくれた事、その言葉で元気な気持ちにさせてくれた事、そんな沢山の思い出を心に、それを活かして実行し、前向きに物事に取り組んでいくつもりです。

本当にありがとうございました。
安らかにやすみ下さい。





情を消していく様子を、ぼくは初めて見た。

おばあの家がなくなる日、机に頬づえをついて、あたりが闇一色になるまで、ぼくは山を見ていた。

七時半をまわった頃、母さんが夕食だと呼びに来た。ぼくは、いつものようにテーブルについた。父さんも母さんもぼくも、あまりしゃべらなかつた。ひっそりと食べ、そっと席を立て片付けた。おばあの家のごとは、だれも一言も口にしなかつた。

三日もたたないうち、おばあの家は、跡形もなく消えて、みょうに広々とした黒い土の地面になっていた。ひとつの風景が消えた。あつけないものだった。そしてこのぼく自身の中で、日がたつにつれて、おばあと共におばあの家が、遠い過去の記憶になりうすらいでゆくのがあった。

ぼくは、それに気づいていた。気づいていたけれど、気づくまいとしていた。

十一月半ば過ぎ、雪になった。今年母さんは、ぼくに大根漬けを漬けてくれた。

「おばあちゃんのようにはいかないけどね。」

母さんはそう言って、ぼくの顔をのぞき込んだ。ぼくも期待していなかった。けれど、母さんの気持ちがうれしかった。母さんがじっと見ているので、食べないわけにはいかなくて、二つ三つ口に入れて食べてみる。ぼくは、思わず目を閉じた。口にひるがったのは、まさにおばあの大根漬けの味だったからだ。

「何かへん？」

母さんは、あわてて言う。ぼくは黙ったまま首を左右に振った。少しづつでしまった目を、母さんに見られないように、ちょっと下を向いて言った。

「母さん、うまいよ。いい線いってるんじゃない。」

涙がひっこんだところで、母さんの顔を見て笑って見せた。

目から目へ、手から手へ、そして口から口へということとは、ほんとうにあるんだ。ぼくは、大根の漬物が、その不思議の秘密を教えてくれるわけでもないのにな。ずっとかみ続けた。

夢屋ものがたり

大庭 柱

(13)

ぎよろりの声は、おだやかだった。そして不思議な説得力があったのだ。ぼくは、もう泣いていなかった。涙と鼻水でグシャグシャの頬は、すぐに乾いてばりばりにこわばってしまった。返事をする代わりに、『ん』と上目づかいにぎよろりをにらみつけた。ぎよろりの目は、自信にあふれていた。

そこへ、作業服を着てヘルメットをかぶった、がっしりとした体格の男がやってきた。ヘルメットの陰で顔はよくわからなかったけれど、きりっとした口元をした男だ。

「師匠」

男は、言った。ぎよろりは男を見て、

「や、益子君。何？」

てきばきとした口調で尋ねる。

「屋根は、あらかた完了しました。骨組みの方は、手作業で進めます。柱の腐食を見て

ただけないでしょうか？それから『くめぞう』のことですが・・・」

男は、はつきりとした大きな声でそう言うと、上着の左ポケットから黒い手帳を取り出した。急にぼくの耳に、解体の騒々しい音が聞こえてきた。あちらでもこちらでも、もうもうとほこりが舞い上がっている。どんだん身をはがれていくおぼあの家で、ぼくは何もできなかった。ただの子供でしかなかった。ぼくは黙ってとぼとぼと外にでると、たまらなくなって走って家へ帰った。家へ帰ると、おやつを用意してある台所のテーブルの脇をすどろりして、いつもより荒っぽくぼくの部屋のドアを開け、ランドセルをほつり出してベッドにころがった。クロス張りの白い天井をぼんやりと眺めながら、『師匠』と呼ばれていたぎよろりのことばを思い出していた。ふと思いつくと、起き上がり、机のかたわらにある本棚の前に行った。本棚の一番下に並べてある百科事典の、一番大きくて分厚いのを引き出して『い

ちく』ということばを探した。『いちかわだんじゅうろう』から『いちじく』の項を見つけたが、『いちく』ということばは見当たらない。今度は小さい国語辞典を開いてみる。『イチク』『移築』。ある、ある。ほんの一行。『建築物をほかの場所へ建てかえること。』辞書を閉じると、ぼくはほうっと溜め息をついた。そして閉じた辞書を、もう一度開いた。今度は、『くめぞう』ということばを探す。『くめうた』というのはあるけれど、『くめぞう』はない。大きな百科事典にも見当たらない。人の名前かもしれない。

『くめぞう』はきつと『いちかわだんじゅうろう』ほど有名じゃないんだ。そう思ってぼくは、辞典を閉じた。『移築するんだ。』というぎよろりのことばを信じるしかない。

窓に目をやると、おぼあを家の裏山の杉木立ちの緑に、西に傾きかけた陽の光が当たっている。裏山のとそがれの景色が、コマ送りのように刻々と色を変え、淡く暗く、その表

岡部知子

「はい、三井家住宅に続き、今度のコンドルは清泉女子大です。」 昔々の江戸時代、仙台伊達藩の九ヶ所あった下屋敷の中で別荘として使われていたものが、明治に入って島津家が使用、しかし老朽化が激しくなり、来日していたコンドルに設計を依頼したという。とりあえずの竣工は大正四年だ。

横浜や鎌倉でのウォッチングでもそうだったが、日本人が洋館を建てる時、和館を住まいに洋館は応接室という具合に、和洋混合で建てられることが多い。しかし、この島津家の人達は、イギリスに留学していたハイカラさん。洋風の生活にも慣れていているということらしく、和の部分まるっきり作っていない。

この館も石と白タイルで鉄骨造り。壁の厚さは 45cm 位はあるように見える、地震が多い日本のことを考えてのことなのだろうか、震災でもびくともしなかったということだ。タイルは、すでに日本でも使用されていたが、トイレや風呂場の床等ぐらいで、外張りに日本で流行らせたのはコンドルだという。外観から見た目には三井家とよく似ているが、あちらは直線的でこちらはベランダの柱を丸くしたり全体的に線の流れも曲線的。そのベランダは両方ともイタリアのルネッサンス的で左右対称になっているが、三井は右、こちらは左に建物が飛び出しているので動きのあるゴシック様式。ゴシックを学んだ人のルネッサンス様式ということになるそう。 (何だか、ややこしいいぞ) コンドルは、施主の言うことを忠実に形にする人だったらしい。ベランダについても岩崎邸や三井邸を島津さんは見学しているということだから、施主側からの要求を入れていったのかも知れない。この建物は、通りからでは石で組んだ階段と木の茂みしか見えない。五反田の高台にあり「島津山」と言われていたそうだが、今一般の人は見学出来ない。(高校生の娘がいる人は入学を口実に見に行く手がある) その階段を登りつくと東側から正面玄関を見る事が出来る。南面とは違い直線的な車寄せがある。そばに寄ると玄関ドアと横壁の両側のステンドグラスが訪問者を迎えてくれる。中へ入ると迎賓館として建てられた三井家と比べるとかなり質素だがなかなか落ち着いたきのある建物だ。やはり一階ホールから二階を望むと、階段の真ん中の壁の大きなステンドグラスから、美しく光が差し込んでくる。そして、踊り場からは左右に階段は別れ二階に昇っていく。ホールから階段に入っていくところの両脇には柱が立っている。これがあることによってホールと階段室の間仕切りになるそう。その階段の対面には洋館には付き物のダンロがある。その暖かいダンロを背にステンドグラスを見るの



が一番美しい場所とされ上席だそうだ。日本では主客は見所でもある床の間を背に座るつまりその人のバックにきれいな物を持っていく、あちらでは「主客にきれいな物を見せる」というのがおもてなしなのかと考え方の違いを感じる。

庭に出て南面を見ると三井家に比べ少々控え目。これは島津家の予算の関係で二度、三度と計画が縮小されたからなのか？ 本当ならイギリスの大邸宅並の物を建てたかったらしいが、予算あっての家づくり、それはそれで仕方のないこと。そうは言っても普段、目にする洋館とはスケールが違う、たまたま前回すごすぎる物を見すぎたせいだ。

コンドルの設計は家具の置く位置まで図面に書き、その後の家具のデザインや壁紙は画家の黒田清輝が決めたという。つまり、大正4年の竣工は家具が入る前のことらしい、学校となった今その家具は取り除かれ見ることはできない。壁は無地の布クロスが貼ってあるが、平成三年に手を入れたというので壁紙の色やデザインがどう変わったかはわからない。解説によると当時のままであるカーテンボックスのデザインからすると、きつともっと派手な色の花柄ではないかというお話し。察して見る事も必要だ。

この洋館で島津家の人達は、空や景色を眺めながら、お茶を飲んだりワイングラスを傾け会話を楽しんでいたんだろうな、と設計に細やかささえ感じさせる場所もあった。それは考えすぎかな？

残されている数少ない幾つかを見学できたことは嬉しく思うし、又その一件一件にすんでいた人の価値観や感性の違いが設計のなかから、漠然とではあるが感じられる。

そしてコンドルは西洋建築を日本で教えながら、日本文化そのものに関心を持ち続け、その弟子達はひたすら西洋の建築のみに突き進んでいった。互いに求めるものが違いながらもそれぞれに得るものがあり、建築と関わっていったのは面白い。コンドルは要求があれば和の部分も取り入れていた。駒込の古河邸は、壁の部分から建具の関係が日本人として見るとえ？と思う部分もあるが、外国の人がこれだけよくできるなと思える仕上げがある。言葉が足りなくてよく分からないと思うので興味のある方は是非古河邸へ。幾つかのコンドルの設計した物を見て一番残念なのは、鹿鳴館がないということ。もし実在していたとしたら、舞踏会の一つも企画をしてみたかったし、ロングドレスにブーツを履いて、踊ってみたかったなー。

第六回 大平建築宿のお知らせ

今年も例年通り大平建築宿を開催いたしますので、皆様御予定に入れておいて頂きたく少し早いのですが、決定している事をお知らせしておきます。

■テーマ

『町づくりの詩』^{うた}

■日程

99.8.13(金)～15(日) 二泊三日

■プログラム

13日 14:00 現地集合・開宿式・清掃・草刈り
19:00 大人と子供の大平演芸会・ジャズコンサート(予定)

懇親会

◎演芸会は皆様の参加をお待ちしております

14日 09:00 基調講演
森まゆみ先生

13:00 作業 見学会など
20:00 懇親会

15日 09:00 分科会
15:00 閉宿式 解散

■分科会

- | | | |
|---------------|----------|-------|
| ○ 町づくりと技術者の役割 | レポーター | 吉田桂二 |
| ○ 模型づくり | レポーター | 寺本雅男 |
| ○ 母性と建築 | レポーター | 豊崎洋子 |
| ○ ピンホール写真 | レポーター | 畑 亮 |
| ○ 自然と遊ぶ | インストラクター | 羽場崎清人 |

参加費・申し込み方法等につきましては、次回の会報でお知らせします。
お知り合いの方等お誘い合わせの上、予定に入れておいて下さい。
またお手伝いをお願いできる方、ご連絡下さい、お待ちしております。

99年度大平建築宿事務局 岡部知子・豊崎洋子

妻人独演『リュックサック』 五月公演の御案内

景気の好い風未だ吹く兆しなく、あまり明るい話しを聞かぬ今日この頃でございます。
しかしこれが未来の生活レベルであり、日本国中、実体の怪しい投機的経済のバブル景気に踊らされた。
あの過去は虚飾に満ちた幻想と考へ、「自分にとって真に価値あるものが何か」
この機会に見つめなおそうと、その気になって多少踊った自らを殊勝に一寸反省しつつ、新作の独演『リュックサック』に取り組みました。

およそ十三年、草野心平・作「ごびらつふの死」の独演活動を、さまざまな団体・グループの方々のお力添えをいただき、おぼつかない足取りではございましたが何とか今日まで続けてまいりました。

もちろんこの作品は、今後も機会あれば上演して参ります。

本来、小生のような不器用な役者にとっては、もうこの一本だけでも身に余る大仕事。

遙かなる項上に向かい、この一本にこだわって歩きつづけたほうがよいのかも知れませんが・・・

五年ほど前、面白がりやの表現の神が現われて、この頭に、ひょいと親子三人を舞台にした、大まかなストーリーだけを置いて立ち去ったのであります。

それはこの淡泊な脳に澱のようにこびりつき、日増しに固く接着し剥れなくなってしまいました。

ええいママヨッ！ このおおまかなストーリーをどのように芝居にすればよいのか、

それはまるで深い霧の中でしたが、とにもかくにも思いつくままワープロと格闘しながら、少しずつ文字にしていきました。

そしてもう数えきれぬほど書き上げては書き換え、その間多くの友人や芝居仲間に読んで頂き、
為になる批判、知恵を授かり、尻タタカレ、励まされ、何とか去年の暮れ稽古に入れそうな台本にまでなりました。

その稽古に入った現在、「これを観て頂く方の観賞に何とか耐えられる台本になる」と、

次第に自信を深めておりますが、それは小生が勝手に一人そう思っているだけでして、

この手前味噌な思いこみがとんでもないか、まあまあか・・・

真の評価はご観劇していただくお客様によつて決まります。

小生、まな板の上の鯉の心境で、皆様が劇場に足を運んで下さるのをひたすら心待ちにしております。

またこの独演では、文学座期待の若手演出家・霧田俊哉氏が、共同演出を二つ返事で受けて下さり、まことに心強く、刺激的な稽古場となりました。

ゴールドデンウイーク明け、皆様せわしない週かとも存じますが、

どうぞ小生の拙作『リュックサック』初演がどのような舞台なのか・・・

皆様の優しく恐い両方の目で、是非のぞいてやって観て下さい！

尚、**チケットは 日時指定の全自由席** となっておりますが、

購入後、御都合が悪くなった方は前日迄に遠慮なくご連絡下さい。

可能な限御都合のよろしい日時に変更させていただきます。

1999年 妻人独演『リュックサック』の初演を控えて・・・

独 歩 妻 人

公演日程：**5月7日～11日**

会場：東京・三鷹武蔵野芸能劇場（JR、地下鉄東西線・三鷹駅北口前徒歩1分）

観劇料：前売3000円、当日3500円、学割2600円

チケット申し込み先・問い合わせ

【受付時間】月～金 午前11時～夕5時 安澤事務所

Tel 03-5379-6698 Fax 03-5379-4226

【受付時間】 午前10時～夜7時 独 歩

Tel 0422-53-3594 Fax 0422-53-3594

劇団 風の街

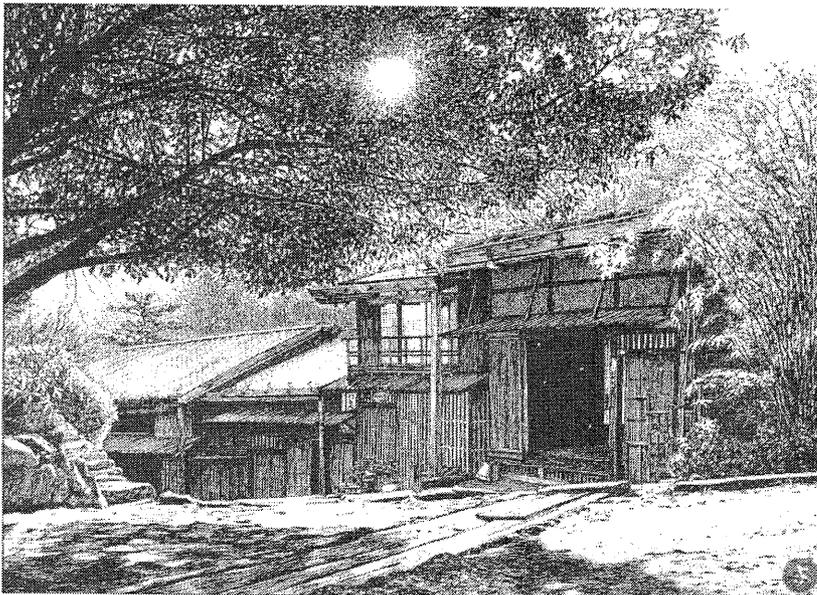
民家芝居：『風のレジェンド』 ～宮沢賢治スケッチ～

妻籠宿公演決定！

- ・ 出演：江良潤、佐藤次郎
- ・ 日時：1999年2月21日（日）19：00～
- ・ 会場：妻籠宿 脇本陣
- ・ 主催：財団法人 妻籠を愛する会
- ・ 観覧希望の方は「妻籠を愛する会」事務局まで（Tel 0264-57-3513）

●劇団「風の街」プロフィール

1988年の結成以来、東京を中心に数多くのオリジナル舞台作品を上演。今回の作品「風のレジェンド～宮沢賢治スケッチ～」には、劇団の代表である江良潤と中心メンバーである佐藤二郎が出演。「どこでも、どんなところでも、芝居できる」をモットーに“出前芝居”を全国的に展開中。



長野県木曾郡南木曾町妻籠宿

絵／吉田桂二

生活文化同人総会報告

(1998. 12. 19 於：レストラン蔵／北品川 出席者 22 名)

■総会

1. 98 年度事務局報告

・ 98 年度活動報告

定例会 2/27 山と人との関わりについて 飛山龍一さん
5/07 町並みと緑 赤坂 信さん
10/01 面白架構 高橋伸一さん
10/31 湊の話 大西長利さん

第 21 回全国町並みゼミ東京大会参加

9/18～9/20 分科会 G 「民家町並みの保存と再生」を主催

第 5 回大平建築宿 8/14～8/16 テーマ「今、環境は」

事務局 小林一元

韓国文化研修ツアー 11/20～11/23 濟州島訪問

機関誌「生活文化 vol. 3」発行

会報No.29～No.34 発行



2. 会計報告

97 年度繰越金	108, 407 円	
98 年度入金 (年会費・聴講費)	565, 809 円	(未納者 26 名)
98 年度支出	573, 754 円	
<hr/>		
12 月 19 日現在	100, 462 円	

・ 98 年度支出内容

同人会報

1～12 月 (29～34 号) 印刷・発送費 220, 552 円

定例会

第 1 回 山と人との関わりについて -----
第 2 回 町並みと緑 講師料 20, 000 円
第 3 回 面白架構 講師料 20, 000 円
(大平建築宿) -----
策 4 回 ～漆 明日を創る 講師料 20, 000 円

98 機関誌

300, 000 円 内 150, 000 円支払

その他／備品・通信費等

122, 625 円

3. 99年度世話人の選出

吉田桂二（代表） 江原幸老（事務局） 岸未希垂（会計） 新井聡 勝見紀子（会報） 益子昇・
日影良孝（機関誌） 松本昌義 斎藤彰 戎居連太 岡部知子 金田正夫 小林一元 佐々木貴章
鈴木久子 豊崎洋子 内藤敬介 長答川順持 吉塚幸雄 伊藤秀夫 飛山龍一



左-斎藤氏 中央-新事務局 江原氏 右-松本氏

4. 99年度活動方針

- ・ 定例会の年間テーマ 『町の生活文化』
定例会スケジュール予定-町田忍氏・小川三夫氏・小町和義氏・寺田一枝氏
- ・ 「第6回大平建築宿」について
実行委員良 岡部知子 豊崎洋子
基調講演-森まゆみ氏
ジャズコンサート予定
- ・ 機関誌
「生活文化 vol. 4」
- ・ 会報
リレー連載予定
- ・ 99年度会費について
年会費 8,000円/年 年会費には会員証を発行
会報購読会員 3,000円/年 定例会の聴講 2,000/回

98年12月19日

5. 忘年会

■事務局挨拶

99年の年頭にあたり、松本氏から事務局を引き継ぎましたので、一言ご挨拶を申しあげます。

「生活文化同人」が新体制で始めてから今年で7年目を迎えます。皆さんの献身的な協力により各イベントと会報・機関誌の発行など、順調に継続できていることを誇りに思います。今年のテーマは「町の生活文化」です。夏の大平建築宿の基調講演では森まゆみ氏を迎え、生活者から見たまちづくりについて話を伺います。また、定例会では、庶民文化探求家の町田忍氏、宮大工の小川三夫氏、数寄屋建築の小町和義氏、小川和紙の柳氏、染色の寺田一枝氏を迎え、出張講演や実践講座の形式で行う予定でいます。いずれも今、注目されている方々ですのでどの講演もお見逃しのないように。

ご存じのように生活文化同人は会員の自主的な活動の上に成り立っています。そこで各々の活動や告知を会報や機関誌を通して積極的に発表していただき、会員相互の情報を共有し、活動の場を広げたいと思います。さらに、近い将来、大平宿改修工事に続く、生活文化同人の仲間によるプロジェクトができるように仕掛けていきたいと思っています。皆さんには、近くの友人に生活文化同人の活動内容をご紹介いただき、趣旨にご賛同の上、仲間になっていただけるようお誘いください。学生や修行中の職人など、これから何かをやってみようと考えている人も大いに歓迎します。点が線となり、やがて面となって、近い将来、私たちの活動が具体的な形に結実するのを願って止みません。豊かな日本の文化を知り、新たな文化を創造しましょう。

事務局 江原 幸菴(木の建築設計)

■世話人会報告

(99.01.20 於：飯田橋／もてなし 出席者 11 名)

1. 次回定例会予定

第1回定例会内容は今号表紙にて案内。

2. 今年度定例会講師予定

小川三夫・小町和義・寺田一枝・豊崎洋子各氏

3. 第6回大平建築宿の準備について。

予定スケジュールを今号で案内。

4. 『語る会』をはじめます。

同人発足の頃、中野の飲屋で行われていた自分の仕事などを仲間に報告する気軽な会を、またやろうではないかという声が上がりました。第一回は吉田桂二氏のお話です。

日時：3/3 (水) 18:30、場所：無垢里 (渋谷区猿楽町 20-4 TEL03-5458-6991)

参加者自由 (お酒持込み歓迎)

* 問合せは新事務局まで

■同人活動

- ・吉田桂二 (住宅建築1月号)
- ・小林一元 (新しい住まいの設計1月号)
- ・小林一元、宮越義彦、松井郁夫 (私家版仕様書一架構編 建築知識スーパームック)

■事務局より

・次回世話人会 3月5日 18:30より 場所：飯田橋／もてなし

※世話人会は開かれた会です、興味のある方は誰でも参加してください。

・会費の納入は2月末日とします。期日までにご入金のない方は次号からの会報の発送を停止いたします。(定例会の時にも受け付けます。99年度会計：連合設計社 岸まで)

・次回定例会時、年会員の方には Vol.3 榎原昌言志をお渡し致しますので、参加希望者はかならず事務局まで連絡下さい。

- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月20日

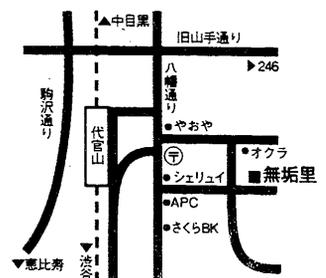
◆ 編集後期

・長野県伊那市で吉田桂二氏設計のモデルハウスが完成しました。私が現場を担当しました。構造材・床材には、一般的にはあばれが多いと嫌われがちな唐松を使用しています。一本一本の選択にかなり時間をかけたので今のところ問題は出ていません。が、油断できない材料なので今後の経年変化を見ていきたいと思っています。興味のある方は大平宿に行く途中にでも、寄って見てください。(A)

・風邪がはやってますねー。うちでは年末から娘と私が交互にひいており、風邪のキャッチボールをしているようです。熱・セキ・鼻づまり・くしゃみ・嘔吐・下痢・頭痛と一通りやりました。次はインフルエンザかと恐れています。皆様もお気をつけあそばせ。(K)

会報編集局：〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-13-7

連合設計社市谷建築事務所 新井 聡



● 東急東横線代官山駅より徒歩3分
OPEN/11:00▶19:00(月曜日)

無垢里案内図

99年度事務局：〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-10-1-606 Tel/Fax 03-3204-9373
生活文化同人事務局 木の建築設計 江原幸彦



	表紙・目次	01
⑤	第1回定例会報告／八代茂子	02
	第6回大平建築宿お知らせ	05
	第3回定例会のお知らせ	06
④	濟州島日記／益子昇	08
	ミーハー建築探偵Ⅲ 由布院／岡部知子	10
	海外研修員講習会報告 その2／盛口尚子	12
③	掲示板	15
	夢屋ものがたり⑭	18
	世話人会報告・事務局より	20

4月の定例会 墓場巡り + 撮影会

桜は散ってしまった後ということ、五重の塔が工事中であることは残念ではありますが、たまにはカメラ片手に東京のお寺巡りをしてみましょう。

日時 4月29日(木) 13:30
集合場所 池上線 池上駅 改札
持ち物 カメラ

(コンテスト用の写真を撮りますのでカメラを御持参の上参加して下さい)

長栄山 池上本門寺 墓場巡り

東京が江戸と言われた以前から、池上には長栄山本門寺 という寺がありました遺構としては江戸時代のものがほとんどですが、加藤清政の石段、関東最古の五重の塔(現在修復中)、宝塔、書堂、本阿弥光悦題字の山門(安藤広重の錦絵)、などの建物が往時のまま現存しております、ですが、この寺はなんと言っても墓場です。肥後加藤家の墓所から肥後細川家、紀州徳川家(徳川吉宗関連)の墓場をめぐりながら徳川初期から現代までの時代めぐりをしましょう。墓場の案内人も予約する予定ですので、蘇我兄弟(敵打ち)や日蓮の首を落とそうとした人の(鎌倉時代) 話も聴けると思います。

(歴史と大田区を愛する高橋伸一氏)

墓場の有名人

(絵画) 狩野探幽 (文学) 幸田露伴 (俳優) 市川雷蔵 (プロレス) 力道山

必ず参加者は連絡してください。

世話人 岡部知子 宛 TEL 0429-77-0101
FAX 0429-77-2491

名前
連絡先

平成11年2月19日
於 東京芸術劇場

講師 町田 忍
記録：八代茂子

(庶民文化探求家)

のれんの先は極楽浄土

町田氏の銭湯行脚は、18年前、長年庶民の文化として落し込んできた銭湯が十分な調査もされないまま壊されていく現場を見て、何とか記録として残して置かなければならないという思いからでした。地元目黒から全国へ…その数は1300を超えるといえます。氏が出会った銭湯は……。

東京型とは

唐破風

屋根。銭湯を専門に手掛ける大工棟梁飯高氏に拠れば、大正12年の関東大震災復興期に自邸である三津本町が墨田区東向島に「カケキ湯」入口の屋根飾りに唐破風様式を取り入れた豪華な銭湯を建てたのが、宮造り風銭湯の始まりだといふ。

煙突

の高さは175尺。(23m)
単気筒は銭湯の管轄は管轄のため、細かい煙突がいろいろあったらしい。なかの掃掃除をする時は体に麻袋の様なものを体にぐるぐる巻きつけ、背中と足をふんばり、キにホウキをもて上から下へ降りてくる。

吹抜天井

の浴室部分はトタン屋根。開窓は2Fから住居になっている場合が多い。

銭湯のステイタス
懸魚
鶴と松の組み合せが90。

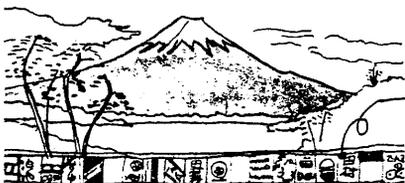


東京都
大黒湯

昭和4年築

ペンキ絵

は、何といても富士山。大正元年、神田猿樂町にあった料亭湯が浴室の壁が球状いと、画家・川走松田四郎に描いてもらったのが、背景画の始まりで、これが女子評で広まったといわれている。

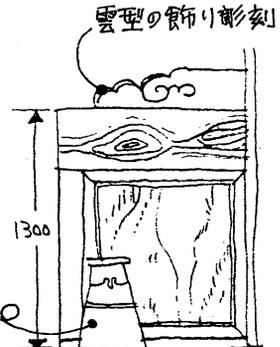


背景画の
スモーカー

東京型銭湯は月夜湯場が広い。全体をよ見渡せる様歯台は高い。平均130cm。地方は120cmくらい。

番台

踏み台



地方型は??

北海道

帯広湯

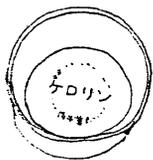
北海道はしゃれた洋風スタイルがタかい。
燃料は石炭。
背景画はあまり見かけない。

寒さ対策として入口が独立。
雪除けのスペースがある。



軟石を主として
部分的に修繕石
を使用している。

昭和2年築



桶

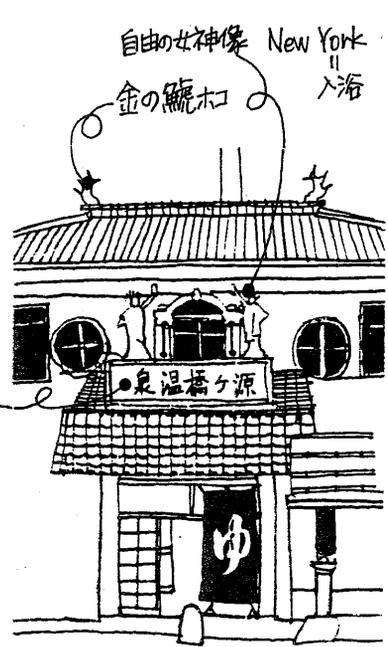
でもやはり桶が良いですね。
安価に納したものです。
睦和商事という会社がPR甲として
ケロリンは内外兼用の鎮痛剤

のつながり?? 銭湯と霊柩車

湯石区域のか宗る造なのだ
に湯り 銭・陸地く良真じのち土け
中銭が 山北な大の士ん車。海だ
調査な。... 東が者盛蓋収。を霊で極こ
調車つす。な 割身がの時た界やのはは
湯極はでんばり出宗し当し世湯う色色
銭霊架うどれのの真らてまの銭いのの
ががはそ体依人湯士べしれ後 と車こ
氏ののにだーに川浄口と流死が!! 柩も
町た車の 調で川県で ぎに。観る霊で
極るの 直働・は せ業土死すの国。に飾総一哀も
か湯浄生通山全す車装・下、に
出銭業の共富、で極も型スでの
かた極特に色う霊ア西のまるの
人の独特に色う霊ア西のまるの
ド関黒アある

かご

の型。東京は丸型。
京都では、舟型が多く、髷子さんの名が
入っているつづらが置かれていたりする。



昭和12年築

でも温泉の名がつく。
大阪では温泉をなく

大阪府 源ヶ橋温泉

第六回大平建築宿開催のお知らせ

主催 生活文化同人

テーマ 「町づくりの詩」^{うた}

大平では参加者の一人一人が主役です。今年はどんなドラマが展開されることになるのでしょうか。新たな出会いにも期待して、大勢の皆さんの参加をお待ちしております。

8月13日(金)～15日(日) 二泊三日

■プログラムの予定

13日	14:00	現地集合 開宿式 清掃 草刈り
	19:00	ジャズコンサート 懇親会
14日	09:00	基調講演 森まゆみ先生
	13:00	作業 見学会など
	19:00	大人と子供の大平演芸会 ◎飛び入り参加大歓迎 & 懇親会
15日	09:00	分科会
	15:00	閉宿式 解散

※まだ予定ですので変更があるかも知れませんが、次回に正式なスケジュールと申し込み用紙をお届けします。

■分科会

第一分科会 「町づくりと技術者の役割」
レポーター 吉田桂二
サポーター 柴田純夫

第二分科会 「模型づくり」
レポーター 寺本雅男
サポーター 石引浩子

第三分科会 「母性と建築」
レポーター 豊崎洋子
サポーター 高橋

第四分科会 「ピンホール写真」
レポーター 畑 亮
サポーター 日影良孝

第五分科会 「自然と遊ぶ」
指導 羽場崎清人
サポーター 岡部祐子

■第六回大平建築宿実行委員会のスタッフ

<input type="checkbox"/>	代表	吉田桂二
<input type="checkbox"/>	委員長	岡部知子
<input type="checkbox"/>	副委員長	豊崎洋子
<input type="checkbox"/>	会計事務	岡部知子・桧山文江
<input type="checkbox"/>	食事	綾部孝司・八代茂子
<input type="checkbox"/>	広報	鈴木久子
<input type="checkbox"/>	写真	伊藤秀夫
<input type="checkbox"/>	交通	飛山龍一
<input type="checkbox"/>	分科会	豊崎洋子
<input type="checkbox"/>	連絡	新井 聡
<input type="checkbox"/>	懇親会	内籐敬介・佐々伸子
<input type="checkbox"/>	修理	藤間秀夫
<input type="checkbox"/>	機材	戎居連太

■問い合わせ先

〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238
岡部材木店 岡部知子
TEL 0429-77-0101
FAX 0429-77-2491

第3回定例会のお知らせ

日時：6月12日(土) 13:30～17:30

於：埼玉県羽生市・すずき藍工房

講師：鈴木道天(藍工房作家)

藍染めへのお誘い

てらだかずえ

皆様、藍染めをしてみませんか。自分なりのデザインで、自分のオリジナルでこの世にたったひとつしかない作品をつくってみませんか。また、古い洋服がねむってませんか。褪せた洋服・布はありませんか、それ等に色をかけて生き返らせてみませんか。絹・綿・ウールのマフラー、Tシャツ、ハンカチ、ブラウス、スカート、タペストリー、のれん等々、絞り、板じめ、かご染、(今回型染めは無理)思い思いのままに、楽しく。

染め料金

布・手漉き和紙	2,500 円/㎡
半袖Tシャツ	2,500 円/㎡
七分長袖Tシャツ	3,000 円/㎡
半袖襟付シャツ	3,000 円/㎡
長袖	3,500 円/㎡
長ズボン・ジーンズ・スカート	3,800 円/㎡
ワンピース・ブルゾン	4,500 円/㎡
糸	12,000 円/㎡

(染め代 各自負担)

参加ご希望の方は、生活文化事務局又はてらだまでご連絡ください。

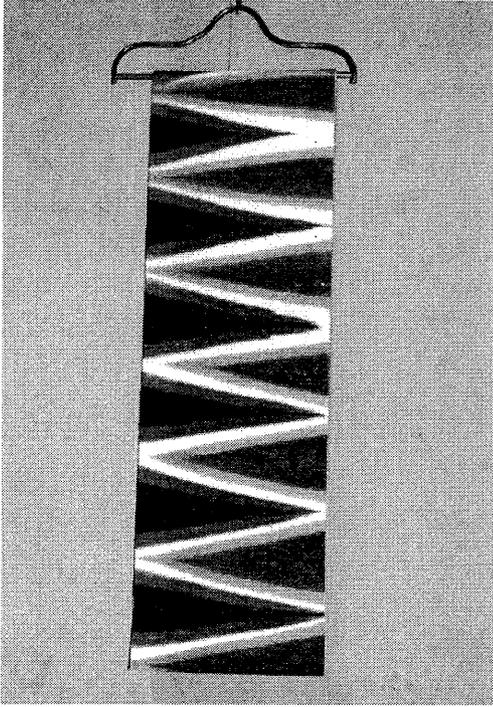
参加締切： 5月31日

問合せ先： てらだ Tel 0422-53-3594

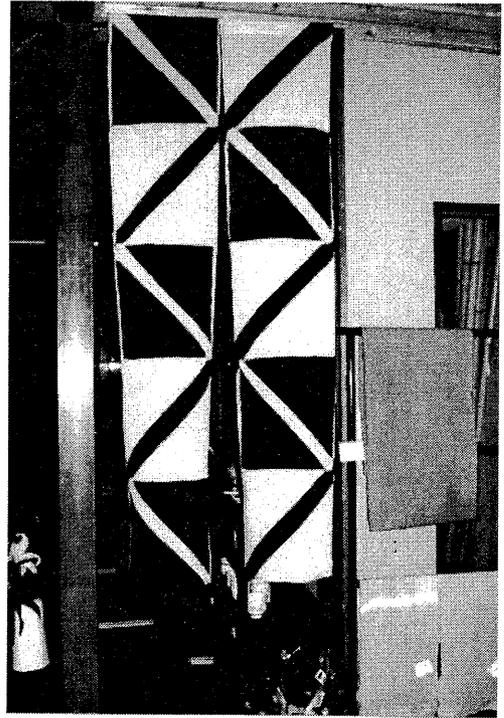
Fax 0422-53-3597

※ 5月12日以降にお願いいたします。

案内図等は次回の会報でお知らせします。



帯



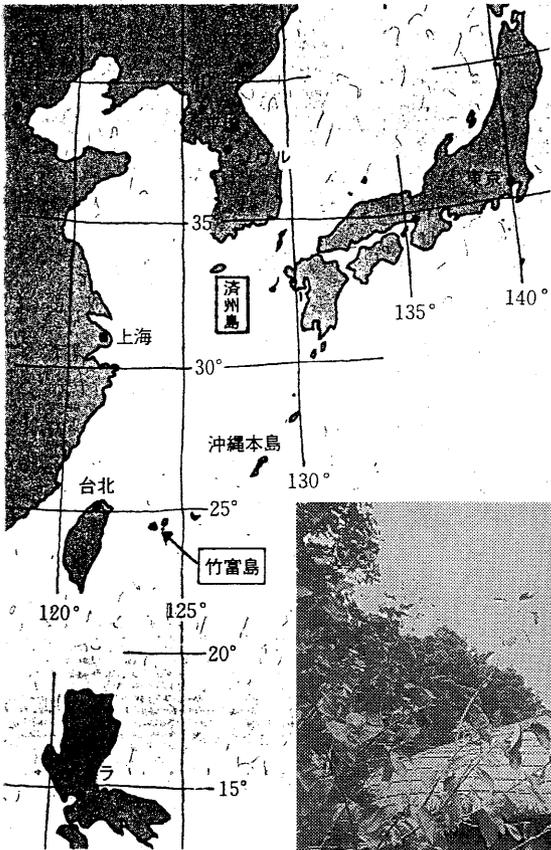
のれん

鈴木道天氏プロフィール

- 1950年 埼玉県羽生市に生まれる
- 76年 友禅工房石田デザインに入る
- 80年 武州藍染保存会（藍栽培事業）に参加
- 82年 武州中島紺屋にて藍染修業
- 87年 羽生市東地区に独立

鈴木道天藍染展

日時：1999年5月22日～31日 AM 10:00～PM 7:00（最終日 5:00まで）
場所：埼玉県岩槻市原町7-25 ひよし



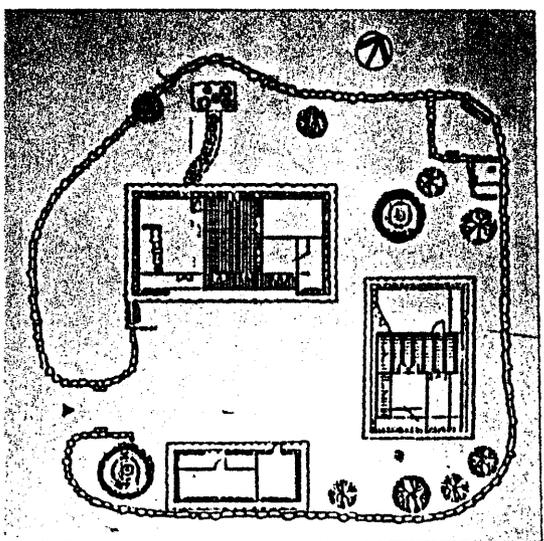
济州民家用語解説(住居編)

- ①サンバン 住棟の中央に位置し、住生活の中心となる板間。団樂・接客などの機能を担う。
- ②クドル 睡眠・学習・育児などの個人的な生活を行う部屋で、冬はサンバンの機能も担う。
- ③クンクドル クルモクに焼き口をもつオンドル室で、一般的に他のクドルより大きい室。
- ④チャグンクドル チョンジに接する一般に小さいほうのクドル。
- ⑤コパン(庫裏) 穀物、主・副食糧、台所用品、食器などを主に保管する収納空間。
- ⑥チョンジ 調理・配膳・食器洗いなどを行う土間空間。竈とオンドルの焼き口とは別になっていた。
- ⑦チャンバン(テツパン) チョンジとサンバンの間に位置するマル房(板間)として主に食事を行う空間。
- ⑧クルモク オンドルの焼き口として確保された空間で、出入りはナンガンから行う。石積に開口部を設け、出入りをする場合もある。
- ⑨ナンガン サンバンとクドルの外側でマダンに面して配置された縁側状の空間。
- ⑩チョンジパン チョンジのなかに位置するクドル。



济州島日記 (98.11.20~24) ・ 乙
 〈同人・益子昇〉

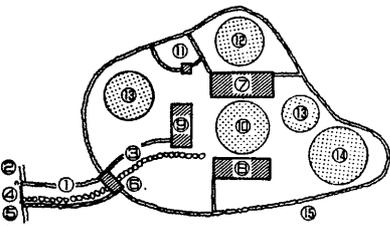
济州島にきたよろこびの一つは、古い草葺きの民家
 である。——「石垣は、火の保温のためです。
 は、せんぶ詰めて積みかえって寝るために倒れる
 を通すことで、虫おけに毛がります」 —— 街道



石垣で屋敷地を囲い、主屋が長い付添屋が
 島の風情に考えながら私は竹富島の民家と思
 正面にヒンパンがある竹富と区別がつかない。
 トア-クをへて初代事務局長に立候補しよう

濟州民家用語解説(屋敷編)

- ① オルレ 通りから屋敷への導入路で、長さ10〜15m、幅2.6m程度。
- ② モルバンドル オルレの入り口にある、主人が馬に乗るための踏台。
- ③ タリバンドル オルレからマダンへいたるまでの導入路に敷かれた平たい踏石。
- ④ チョンナン オルレの入り口部分に家人の在・不在を表示し、牛や馬の出入りを防ぐために用いる丸太。
- ⑤ シュモドル・チョンジュモク オルレ入り口の両側に設置される、チョンナンをかけるための穴のあいた石杭または木杭。
- ⑥ イムコリ 屋敷に入る門に居室や畜舎が併設された建物。規模の大きな建物に限られ、この場合オルレはないものが多い。ある場合でも短い。
- ⑦ アンゴリ 民家の中心部に相当し、入り口から見て奥に位置する棟(主様)。
- ⑧ パッコリ 多くは入り口近くにある棟で、規模はアンゴリより小さい副棟。
- ⑨ モッコリ アンゴリとパッコリの角に配置される脇屋。
- ⑩ マダン アンゴリ、パッコリ、モッコリなどによって囲まれた作業庭。
- ⑪ トンシ(豚舎) 便所とその下に併設された豚舎の総称。
- ⑫ アンティ アンゴリの裏庭で、チャンドクテ(醬菜台)味噌・醬油を漬け込む裏の置き場)が設けられた静かな囲われた領域。
- ⑬ アル 脱穀前や後に糞を山積みにして保存したもの。脱穀後は燃料・飼料・堆肥として使用。
- ⑭ ワヨン 屋敷内の空いた土地に野菜などを自給するためにつくられる畑。
- ⑮ トルタン 屋敷や畑などの境界に設けられた石垣。

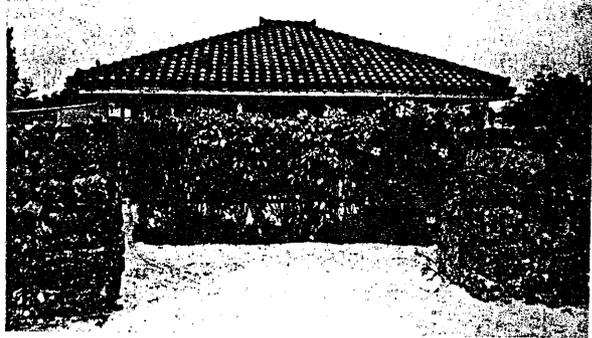
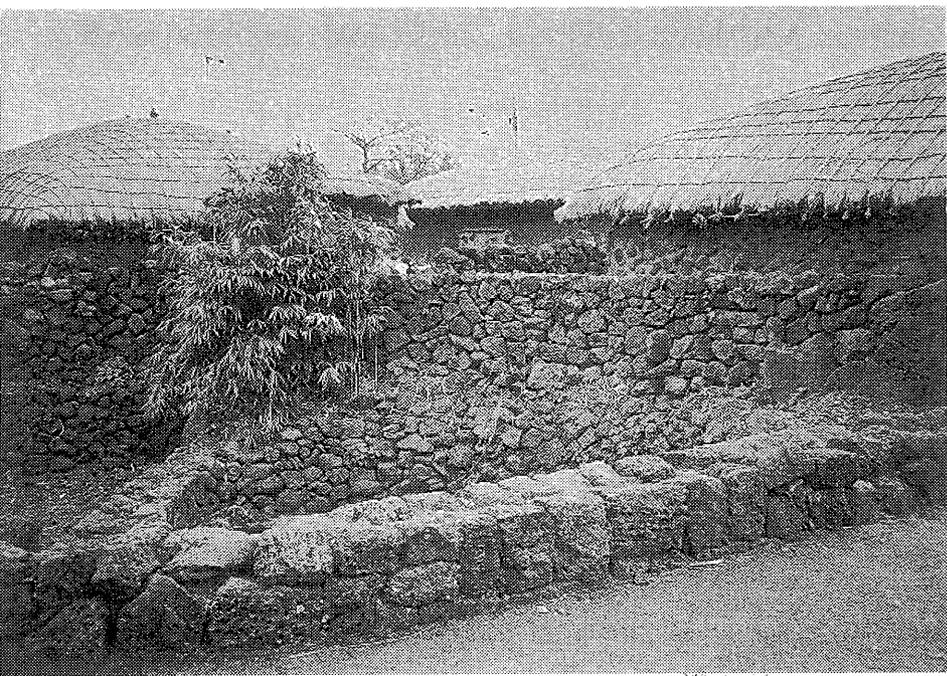


図版引用

建築知識 1989.7
 普請研究 No.22
 1987.11
 日刊・文化財
 1986.2

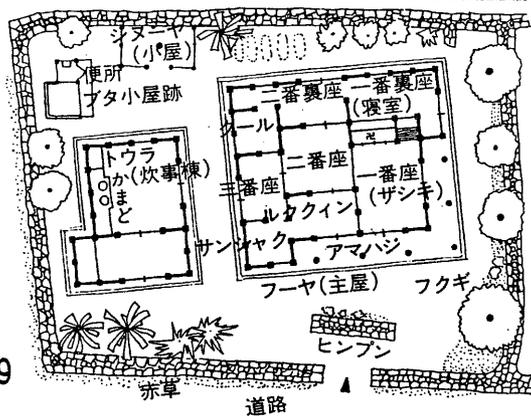
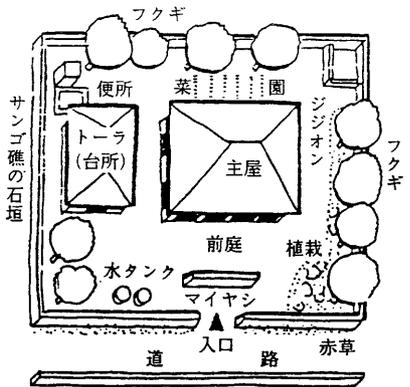
写真(二葉と七)

城邑民俗村の民家



木が散見できる
 奥庭を設計している
 です。隙間から風
 が吹く。耽羅銀行
 司馬造太郎
 さんで……独特な
 出しいた。入口
 集ヤシ町並み不
 見え。

竹窟屋の民家



岡部知子

吉田先生にお願いして、小国の坂本善三美術館で木造フォーラムを開催して頂いてからいつの間にか数年たってしまったが、その時にエクスカージョンで訪れるはずだった由布院の駅。12月だというのに初雪に見舞われ、峠越えが不可能となって見ず終いになってしまったのだ。そんな由布院に行く機会を得た。

磯崎新氏が設計したという駅舎を見るだけのはずだったのだが、偶然その存在を知る。由布院駅から大分川に沿って約10分。細い道を入れていくと由布院美術館はあった。

車を止めて目に入った建物は小さな学校のようにも、住宅か店舗にも見えたが美術館とは思えなかった。

美術館だから木造だとは思っていなかったが。(全部が木造ではないのだが)中へ入るとふんだんな木と土が目に飛び込み、ゆったりと私たちを受け入れてくれた。

坂本善三美術館も言われなければ移築というよりその土地に昔からあったようで「お邪魔しま〜す」的感觉で、肩が凝らずに親しませていただけるような美術館だったが……。よく大地から抜きでてきたようなとか、その土地と一体化している建物だ、というような評価をされているようだが、由布院美術館もまさにその通りで廻りの古い建物よりも、その土地と、そしてそこから見える山々を意識し協調しようとしている建物に見えた。

手作りの要素をふんだんに含み、それでいてなかなか見られない斬新さと懐かしさを印象に残してくれた。そしてそこでしか味わえないものを与えてくれた。設計者を見て納得。独特のデザインと素材の使い方の上手い象設計集団だった。

その中に入ると時間が止まっているようだ。窓から外を見ながらぼーっとしている人、絵を書いている人、コーヒーを飲んでいる人、ただ散歩しているようにしか見えない人、美術館というより憩いの場所だ。せこせこと歩き回り、カメラのシャッターを切りまくっている私たちはとっても気持ちの貧しい訪問者。

見ていると色々なものをかなり再利用しているのも目につく、建具の再利用もある、気がつかなかったが庇になって蘇っているものもあったらしい。古い瓦を土壁に塗り込んである



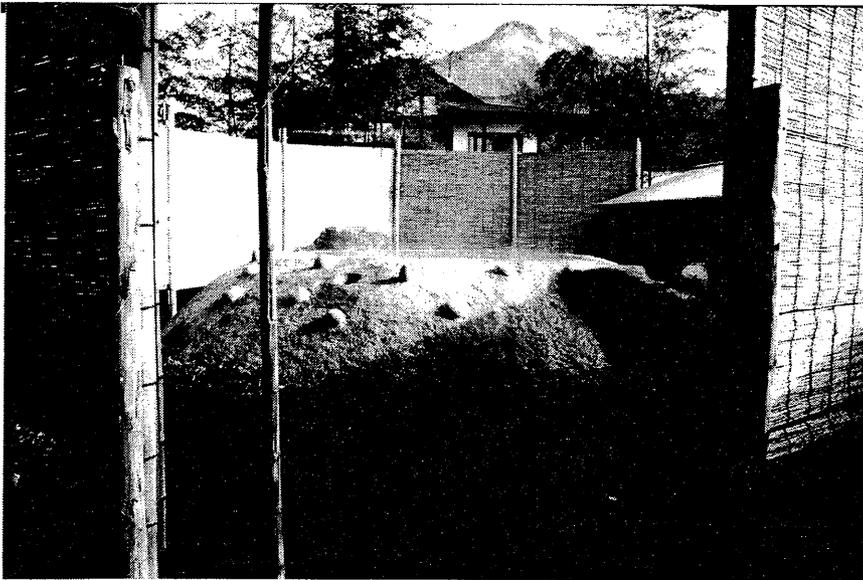
由布院美術館

もの(韓国の土壁みた〜い・・)、そして色鮮やかなタイル? の様なものは以前なんだったんだろう。

全部がそうだとは言えないが美術館というと奇抜なデザインに新しい素材、そして今迄にないものになっているかどうかの評価の基準みたいで、緊張して入って静かに見て・・そおっと帰って行く事が多かった。古いものを使いながら、古さを強調しない自然なままの再利用は私の心を和ませてくれた。

喫茶の部屋は無人君。コーヒーやクッキーが用意されているがお金を入れる箱が1つ置いてあるだけですべてセルフサービス。本を読んでいる先客のアベックと少し席を離して、コーヒー200円、クッキー100円、なんだか嬉しい気持ちで頂きました。

一番気に入ったのは壁が四角くくり貫かれ、中庭や向い側の建物が臨める椅子の置いてあるの部屋。映画館のスクリーンか大きな絵を見ているように、その椅子に座って外を見ているだけで一時間くらいはそのまま座っていられそうな空間。



三和土の風呂

楽しそうというか印象に残ったのは、予約すると入れるという二つのお風呂。1つは家庭用位の大きさの桧風呂で、もう1つはタタキに石の埋め込みがあり露天になっている円形風呂。手をそっと入れてみるとちょっとぬるい。冬には少し寒いだろうが、夏にはビールを持って入ると絶対最高。

中に展示してある説明と写真を見ると仲間が総動員での手作りらしい。沢山のお金ではなく、沢山の人の手をかけて出来上がったらしい由布院美術館。建物に入った時よそよそしさがないのは、そのせいかもしれない。

そこは美術館だというのに展示してあるものをよく見ないで帰ってきてしまった。常設してある絵は、放浪の詩人画家といわれている佐藤溪。無名のまま湯布院で生涯を終えた人らしい。展示してある部屋を撮影禁止の看板がなかったので一枚だけ撮った、部屋の写真から後で絵をよく見てみると、上手いとか下手とかわからないが、素敵な絵だった。美術館に行って絵も見ないで帰ってくる私たち集団。もっと欲張らないで見て歩く余裕をもっていかなないと、見えるはずのもの、感じるはずのもの、皆んな中途半端になってしまう、というのが今回の反省でした。

約1年前、この会報にて御報告した講習会の第2弾を御報告いたします。

今回の来日メンバーは、下記の方々でした。

タンザニア —— (ニャマボンド/ダルエスサラーム国立博物館)

パキスタン —— (ハサン/ジビ博物館)

パキスタン —— (ゲフルル/タシラ博物館)

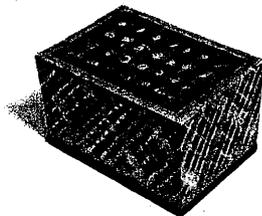
チリ —— (クラウディア/キョタ市考古学博物館)

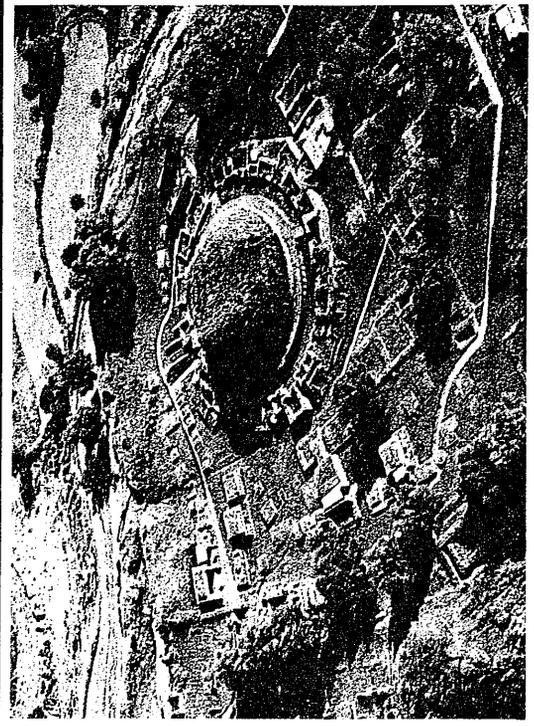
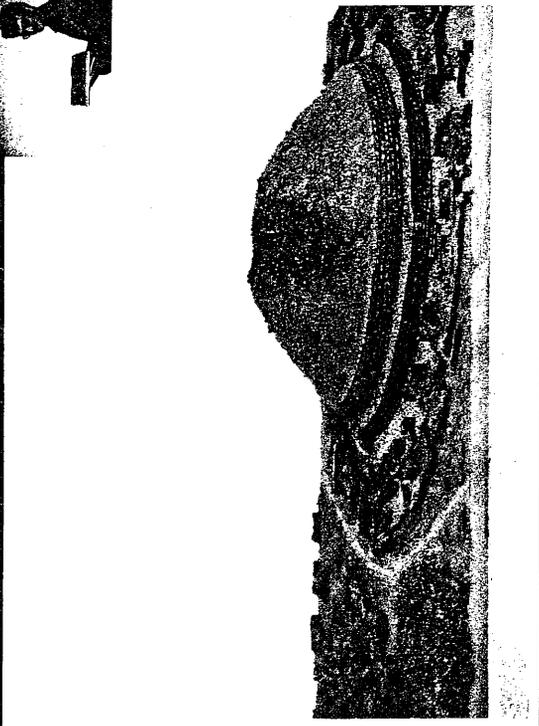
3回目の受入れということもあり、JICAの講義室でおこなった製作実習は、スライドあり、民俗音楽あり、踊りあり、コーヒーありの、賑やかで、楽しく充実したひとときでした。

数回のレクチャーのあと、景観、風土を念頭においた各国の製作テーマは、タンザニア(セレンゲティ自然公園)、パキスタン(ダルマラージカ遺跡)パキスタン(タクラマカン砂漠と遊牧民)、チリ(アタカマ砂漠と白い教会)といたしました。今回も全員が熱心に取り組んで頂き、作品はおみやげとして自国に持ち帰って頂きました。

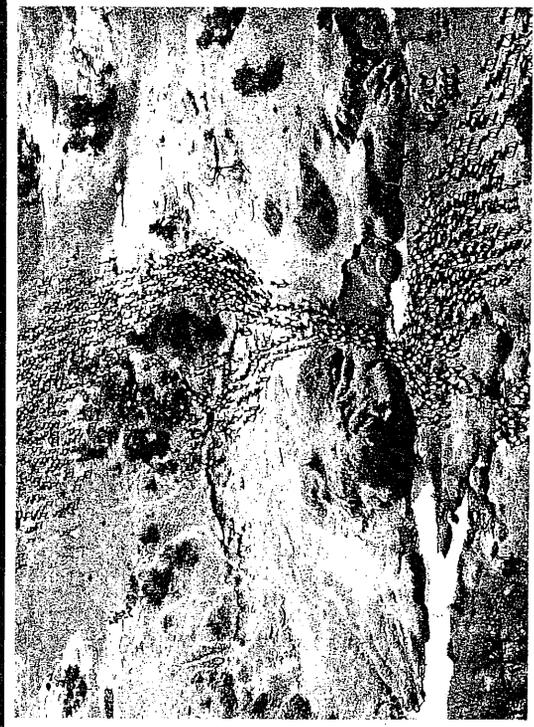
各国とも博物館運営の経済事情は非常に苦しいらしく、少しでもお役に立てればと、タンザニアの研修員と共に試作したサバンナグッズ「バオバブ」は、今夏、現地にて発売予定とのことでした。

私たちにできることは、きっかけ作りでしかありません。そして彼らと過ごせた貴重な時間のなかで私たちの得た大きな収穫とは、「風土とは、生活文化の延長線上にある」という確信でした。





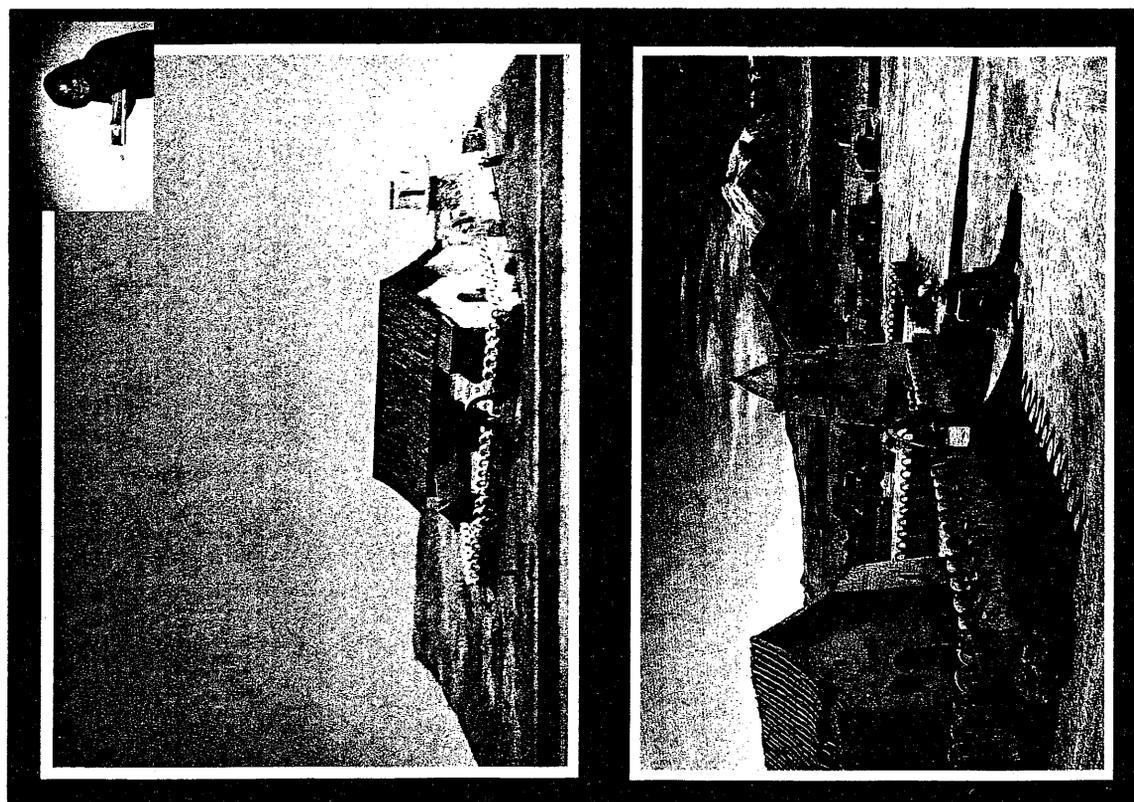
パキスタン（ダルマラーラ遺跡）



タンザニア（セレングゲティ自然公園）



パキスタン（タクラマカン砂漠と遊牧民）



チリ（アタカマ砂漠と白い教会）

掲示板

生活文化同人の皆様

てらだかずえ

インフルエンザの猛威もどこかへ旅立ち湿度も上がって来た今日この頃、如何お過ごしでしょうか。私は元気しております。

芝居や声の仕事をする人と生活を共にして10年が過ぎようとしております。私が生きてきた世界とはまったく違った世界の人と一緒に、手打公演をする度に戸惑いが多々あります。

彼がひとり事務所「独歩」を開設して一年、今そのデスクとしてが私の仕事になりました。その合間に織り、染めもしております。

この度、麦人が独り芝居「リュックサック」を上演するのに当り、勝手ではございますがチラシを同封させていただきます。もし興味とお時間がありましたら、ぜひ劇場までいらして下さいね。そして観た後、何かを感じて下されば嬉しいです。

桜の季節までもうすぐ、どうぞ皆様お身体大切にお過ごし下さいますように。お会い出来るのを楽しみにお待ちしております。乱筆乱文にてごめんなさい。

99年 春。

麦人独演
リュックサック

1999年5月7日(金)8日(土)9日(日)10日(月)11日(火)

武蔵野芸術劇場
TEL:0422-55-3500
(JR中央線・松武線・地下鉄東西線 三鷹駅北口徒歩1分)
駐車場はありません

チケット
(販売開始3月1日)

前売	3,000円
当日	3,500円
学割	2,600円

(日時限定・全席自由)

チケット申し込み・お問い合わせ
TEL:03-5379-6696 FAX:03-5379-4226 安事事務所
(受付時間/月~金 11:00~17:00)

オモイだします
オトメジミン...

ムテキのおとを
きこしなから

生活文化同人会の会員でもあり、「夢屋ものがたり」作者の大庭桂こと平泉和美さんが「毎日児童小説コンクール」の最優秀賞に選ばれました。

毎日児童小説コンクール

最優秀賞に平泉さん (勝山市)



平泉 和美さん

毎日児童小説コンクールは児童文学の登壇場ともいわれ、これまで直木賞作家ら多数の優秀作家を輩出してきている。平泉さんは一昨年に夢をテーマにした「夢屋ものがたり」で小学生部門の最優秀賞を受賞。またこの年、明治の代表的歌人、長塚節(1879-1918)の

小学生
向き部門

竜の谷のひみつ

第48回「毎日児童小説コンクール」の選考結果が4日発表され、勝山市平泉寺の神職、平泉和美(ペンネーム・大庭桂)さん(11)の作品「竜の谷のひみつ」が、小学生向き部門の最高の賞である最優秀賞に選ばれた。平泉さんは一昨年の同優秀賞に輝く受賞。「締め切り間際にあわてて書いた作品。肩の力を抜いて一気に書き上げたのが良かったのかしら。これからも、心に光を灯す小説を書き続けたい」と、受賞をステップに新たな創作意欲を燃やしている。表彰式は今日(3日)に毎日新聞東京本社で。同作品は毎日小学生新聞で連載される。
【佐藤 孝治】

の生誕地・茨城県石下町が創設した「長塚節文学賞」小説部門でも「作品多数」で最高の大賞に選ばれた。最優秀賞作品「竜の谷のひみつ」は、都合に住むじゅん君がどのどのあやのぢゃんの預きで、ダム建設で水没してしまつた竜の谷村を助け、村の神託伝説を探るストーリー。自然の雄大さを描く中で、恐竜化石の発掘や白山火山帯などが登場し、北陸地方や地元勝山市の情景が登場する。

「スピーディーに事が進む。盛り上がり過ぎてきついわかひみつ」となる。前回の生誕地、茨城県石下町が創設した「長塚節文学賞」小説部門でも「作品多数」で最高の大賞に選ばれた。最優秀賞作品「竜の谷のひみつ」は、都合に住むじゅん君がどのどのあやのぢゃんの預きで、ダム建設で水没してしまつた竜の谷村を助け、村の神託伝説を探るストーリー。自然の雄大さを描く中で、恐竜化石の発掘や白山火山帯などが登場し、北陸地方や地元勝山市の情景が登場する。

受賞の時に思ったんだけれど授賞式は「大人の感覚で書いている」とか審査員から色々しられる怖い場所。でも、その助賞が創作の糧になっている。また、しがられに行つてきます」と笑った。

釣魚検察
A B判 本体1900円+税別
06-8395-8038

リレー連載次回より必ずはじめます。
 テーマは『日本』です。第1回目は
 日影良孝さん、2回目の書き手は日影
 さんが紙面にて指名します。同様に3
 回目は2回目の書き手が指名していく
 というのが、リレー連載と銘打った所
 以です。どうぞお楽しみに。



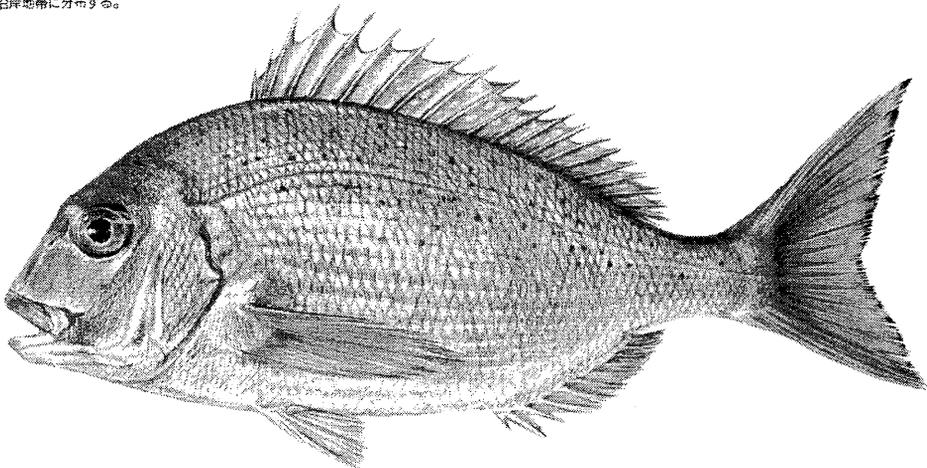
申し訳れずが、いません

今が旬！ 春のさかな **真鯛**

タイという名が付く魚は数多いが、日本近海に生息する由緒正しいタイ科の仲間は 10 種類にすぎない。それはさておき、すべてのタイ一族を代表するのが、姿・色・味と三拍子そろった真鯛であり、縄文遺跡からも骨が出土するほど日本人とは長い付き合いである。産卵期をひかえた春先の体色が特に美しく、昔の人は季節感豊かに「桜鯛」と読んだ。

『おさかな食材図鑑』より

まだい【真鯛】 ●別名：オオタイ、ホンダイなど
 ●分類：タイ科 ●体長：最大1.4m
 ●分布：日本各地から東シナ海、東南アジアの沿岸地帯に分布する。



「あっ」

と、息をのんで立ち止まった。

「よう、坊や。」

ぎよろりが、手に持っている携^{けな}帯用の灰皿に、たばこの火を消しながらぼくに話しかけて来た。

「約束だ。おばあの家に来て行ってやるよ。

うちの人には話をしといた。

今すぐ出発だ」

ぼくは、思いがけない事態にことばを失っていた。

「へえ、この子ですか。お父さん」

ひよろりが、人のよさそうな笑顔を浮かべた。

ぎよろりは、にっと笑ってうなづく^{うなづく}くと、ぼくに向かつて言った。

「おばあの家に移築が、完成した。

見たいだろ。さあ、車に乗って」

そう言うなり、車のドアを開く。

ぼくは、信じられなかった。あの日の約束を、ぎよろりは守ってくれたのだ。ぼくは、うれしさと不安をのみこんで、ぎよろりを『ん』

とにらみ返すと、うながされるままジープの後部座席に、ランドセルごと乗り込んだ。

ぎよろりが助手席に乗り、ひよろりが運転席に乗る。ひよろりは、エンジンをかけた。

車が走り出すと、ぎよろりは、ぼくのことなんかおかまいなし、といったようすで、ひよろりに話しかけた。

「どうだい、住み心地は？」

「いやー。広いので寒いだろうなと心配した

んですが、あったかいんですよ。古い民家

というのは、2Kで『暗い』『汚い』、2

Fで『冬寒い』『不便』だ、と言われるで

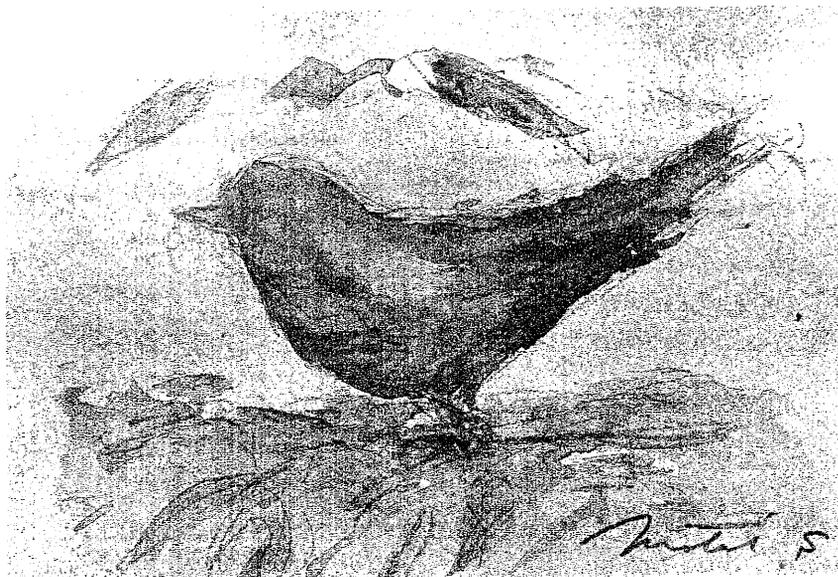
しょ。あれは、お父さんのような設計にす

れば、この上なく快適になるんだと納得し

ましたよ。天窓のおかげで、明るいし・・・」

ひよろりは、運転しながらうれしそうに話す。

「うん、そりゃあ良かった」



夢ものがたり

大庭

桂

⑭

十二月、正月、二月と雪の中の生活で、おとなたちは、大儀そうだった。今年は五年ぶりの大雪と言われたが、ぼくたち子供は、そんなこと関係なく、実に愉快に過ごした。朝早く道をつける雪踏みや、雪下ろしの手伝いだって楽しめた。雪遊びは尽きることなく、特にこの冬父さんが買ってくれた、クロスカントリー用のスキーに、ぼくは夢中になった。細めのスキーをはいて、友達と裏山に入り、いろんなコースを作って遊んだ。雪は、おぼあのこともおぼあの家のこと、すっかり忘れさせてくれたかに思えた。山で遊んでいると、ときおりウグイスの音が、聞こえて来る。二月も下旬の頃だ。ゲッゲッ、ケキョケキョと初めのうちはウグイスとは思えないほど下手くそだ。思わず笑ってしまう。心の中で、『がんばれよ』とつぶやいて、またスキーに

没頭する。ぼくも、下手くそだった。なかなか友達に追いつけない。ウグイスは、下手なものともせず、毎日のどがつまったようなゲキョケキョをくりかえす。そのうちホーホケキョ、ホーホケキョと、朗々と気持ち良さそうに、さえずることができるようになる。あの小さな鳥のからだのどこに、こんな声を出す秘密が隠されているのだろう。なんとか、友達についていけるようになったぼくの走りは、まだぎこちなかった。ウグイスには、負けられない。ぼくは、がむしゃらに山の杉木立ちの中を走り、滑^スった。

三月。桃の節句も終わり、春の気配におとなたちの表情は明るくなっていった。雪解け水がごぼごぼ流れる川べりに、ふきのとうが顔を出している。ふきのとうを見ると一年前のあの日思い出してしまうのだった。

「うららかな春」という響きにふさわしい昼下がり、ぼくは甘い春の空気を吸い込んで、ゆっくり学校帰りの道を楽しんでいた。畑では、雪の下から水菜を掘り出し始めている。

雪の下に、よくまあ、あんな真っ青な青菜が三十センチも伸びてくるものだ。雪から掘り出した水菜は、おひたしにしても、胡麻油^{ごまあぶら}で炒めてもおいしくて、丼^{どん}一杯でも食べてしまう。水菜を食べ過ぎてはいけないと、おばあにいつもとがめられた。雪を割るほど生命力の強い水菜は、あくも強いのだという。

おばあの家があったあたりの雪も、とけ始めていた。雪がとけると、公民館の基礎工事が始まるらしい。そんな話を耳にしても、胸が、ほんの少しちくちくするだけだった。

おばあの家があったことも、遠い昔に見た夢のように思えた。『ぬけがらは土に、心は空気に』おばあが言ったことばを、おまじないにつぶやくと、いつもなんとなく落ち着いて、胸のちくちくもおさまるのだった。

「あれ？だれの車だろう。」

ぼくは、歩きながら首をかしげた。おばあ所の前に、見慣れない一台の黒っぽいジープが止まっている。ぼくがジープをながめながら通り過ぎようとすると、ジープの横にぎょろりとひよろりが立って居た。ぼくは、

■世話人会報告

(99.03.05 於：飯田橋／もてなし 出席者 18 名)

1. 次回定例会予定

第1回定例会内容は今号表紙にて案内。

2. 今後の定例会について

小川氏に益子さんが連絡する。水戸の現場出張講演会（交渉中）。

小町氏に岡部さんが連絡。9月以降予定（後日連絡の結果）。

第3回定例会について

6月12日（土） 「藍染めの実演」 寺田一枝氏

3. 機関誌について

現在の形式で継続する。次世話人会のときにスケジュールと書式を益子さんから提示。vol.3を今年の会員に送付。

4. 大平建築宿の準備について

実行委員選出。岡部さんが実行委員リストと広報原稿を作成。各紙に要項を送付。

5. その他

生活文化同人の記録をCD-ROM化準備中。販売価格は制作者と相談。

■同人活動

- ・日影良孝一 中古住宅を半セルビルトで改修する（チルチンびと）
- ・高橋昌巳一 自然素材でリフォームしてマンションに住み続ける（チルチンびと）
- ・高橋俊和、岡部馨一 大樹の下に暮らす（チルチンびと）

■事務局より

・次回世話人会 5月上旬予定 18:30より 場所：飯田橋／もてなし

※世話人会は開かれた会です、興味のある方は誰でも参加してください。

・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。

・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

・毎号原稿締切：奇数月 20日

◆ 編集後期

・毎日の仕事や生活でパソコンを使う頻度がどんどん増えてきています。それに伴いアプリケーションソフトのバージョンアップが必要となります。バージョンアップ情報に沿って次々と手を入れ続けなければならないのは、まるで子供の成長を追い続けているようで、本当に手が掛かります。パソコンも放っておいてはダメで、お金も手間も愛情(?)もかけねばね!。(A)

・東京中央郵便局がやっているサービスで、随時発行されるふるさと切手や特殊切手を1シートづつ郵送してくれる「新通販システム」というのがあります。これまで郵便局の窓口では、売り切れたり忘れたりして買い損ねていた目当ての切手を、居ながら手にすることが出来ます。最近のものでは「十日町雪祭り」がお気に入りです。(K)

会報編集局：〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-13-7

連合設計社市谷建築事務所 新井 聡



99年度事務局：〒169-0072

東京都新宿区大久保 3-10-1-606

Tel/Fax 03-3204-9373

生活文化同人事務局 木の建築設計 江原幸壱

生活文化

生活文化同人会報

1999(平成11)年06月号 No.37

	表紙・目次	01
④	語る会より/戒居連太	03
	第2回定例会報告/伊藤秀夫	04
	ミーハー建築探偵IV/岡部知子	08
⑤	リレー連載/日影良孝	10
	第6回大平建築宿参加者申込み	14
	機関誌編集長より/益子昇	17
⑥	掲示板	18
	夢屋ものがたり⑮	20
	世話人会報告・事務局より	22

6月の定例会

藍染め



日時：6月12日(土) 13:30~17:30

於：埼玉県羽生市東7-3-4 ☎ 0485-62-1718

講師：鈴木道夫氏(藍工房作家)

古来より世界中で染められてきた色・藍は天然染料の代表といえます。中でも日本の天然藍の色は木・漆喰・和紙で造られた空間に点ずることにより、一層清らかな美しさを感じます。また住まいのみならず昔から陶工や棟梁の身支度として愛用されてきたのも精神性までたたえている藍色のもつ魅力かもしれないと思っています。

とにかく、自ら染めて体験することから始めてみませんか？

案内図等

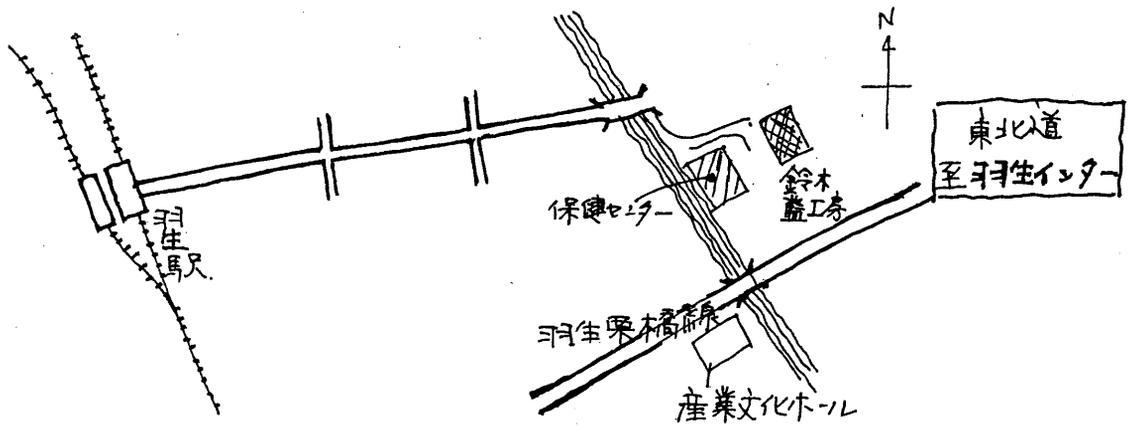
1、電車アクセスの場合

・東武伊勢崎線、羽生駅を背に東の方向へ川を目指し進む。川(用水路)の橋を渡っすぐ土手沿いに右に入って2本目の道を左に折れて50m位の左です。目的建物保健センター(駐車場有り)工房は保健センターの前です。

2、車アクセスの場合

・東北道、羽生インターで下りて羽生栗橋線を市街地方向へ進み産業文化ホール手前の信号を右に折れて土手沿い進む。(地図は次ページ)

・ 当日連絡先 豊崎 洋子携帯 ☎ 090-8878-0905

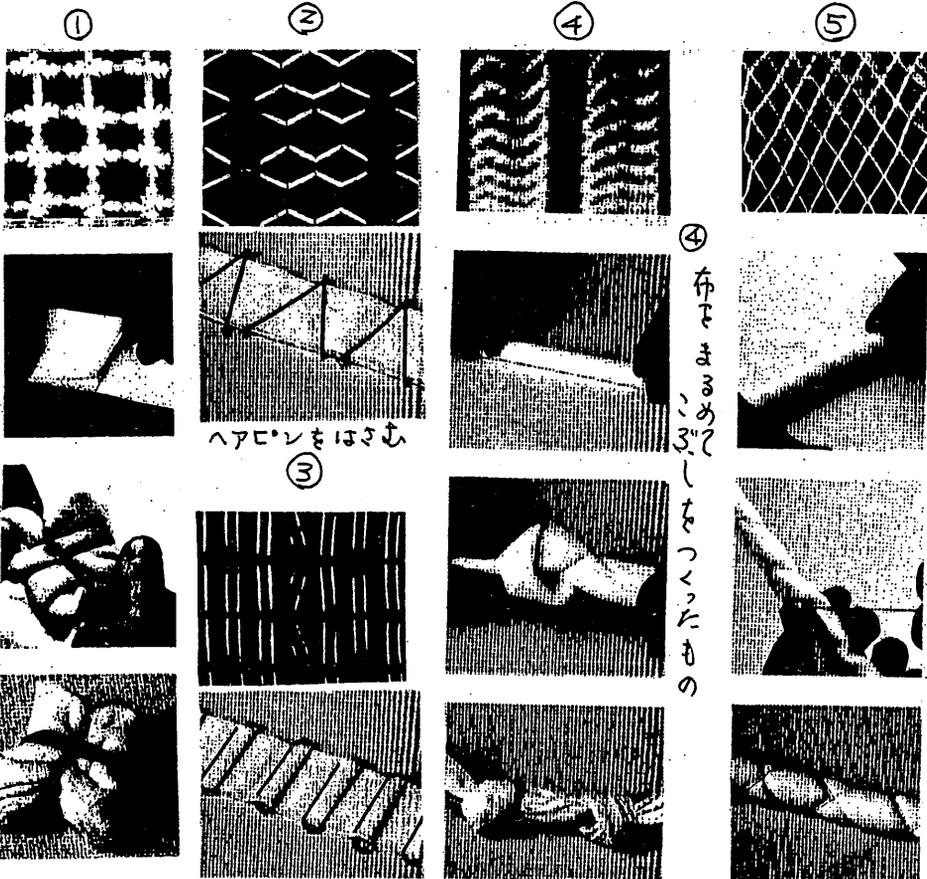


てらだかえプロフィール

- 1972~1978 設計事務所にて建築設計
- 1992 和の住まいにこだわりマンションの自邸をリフォーム
- 1981~ 染織を始める
- 1995 世田谷美術館・「経と緯の会」 出展
- 1996 手仕事展
- 1998・11月 陶・磁・織3人展

染める前の下準備

※ ①②③④⑤は手近なもののできる染めの面白さ



① 折りたえで
きつくかけた
X、Yに輪ゴムを

ヘアピンをはさむ

③

ゼムクリップで
止める

④ 布をまるめて
こめて
しをつけたもの

⑤ 細いロープを
まきつけたもの

同人世話人である松本昌義氏と飲みに行くこと必ず話に出る、同人発足の頃、夜な夜な中野の飲み屋にて繰り広げられた伝説的な語る会。

自分の仕事、旅報告などを酒でも飲みながら気軽に近況を語り合おう！！、そんな松本、益子両氏の思いが会が始まるきっかけになりました。場所は同人世話人金田正夫氏の肝いりで代官山にある無垢里にて行われました。

4月7日に行われた第一回目は、益子昇氏と吉田桂二氏による、近況報告。

益子氏は解体した古材を利用したの数寄屋住宅づくりの取り組みを、横浜市内の仕事を紹介しながら設計管理者と現場代理人という双方の立場から語られた。

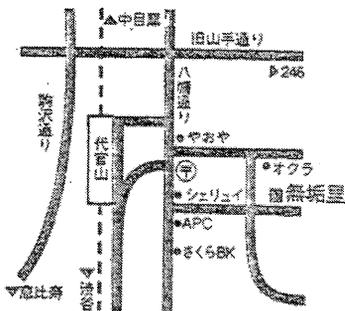
また吉田氏は愛知県一色町の離島に計画されたコミュニティー施設“弁天サロン”を事例に、民家再生を軸に、どのように地域の核として展開したかを語られました。

5月12日に行われた第2回目は松本昌義氏による近況報告。茨城県古河市の佐々木邸を作品紹介されました。

第3回はまだ未定ですが、昨年の大平建築塾では環境は今・・・が主たるテーマでした。同人それぞれの環境は今・・・、気軽に近況を語りましょう！！

参加希望は事務局まで御連絡ください。

(戎居連太)

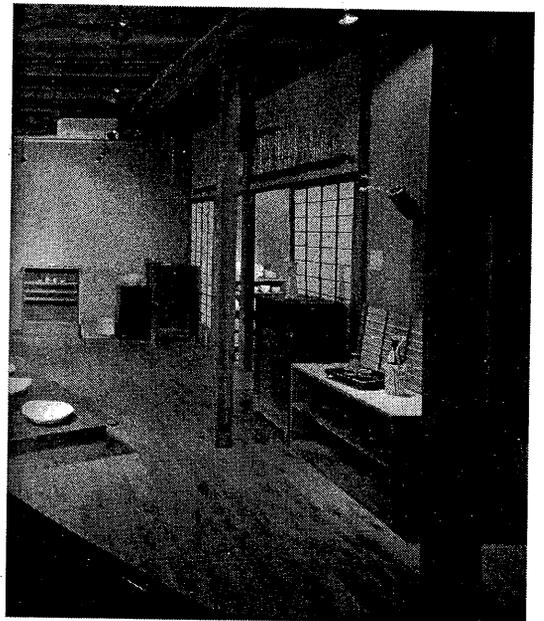


●東急東横線代官山駅より徒歩3分
OPEN/11:00▶19:00(月曜休)

無垢里案内図



畳の部屋にて膝をつけ合い、盃をかわし、作品発表のスライドの時間ともなればそこらへんにある物で映写機の台をつくる、ざっくばらんな雰囲気。



技術・文化の伝承の場

暮らしの工房&ぎやらりー無垢里
(住宅建築1999.5月号写真抜粋。詳しくは住宅建築を参照されたい)



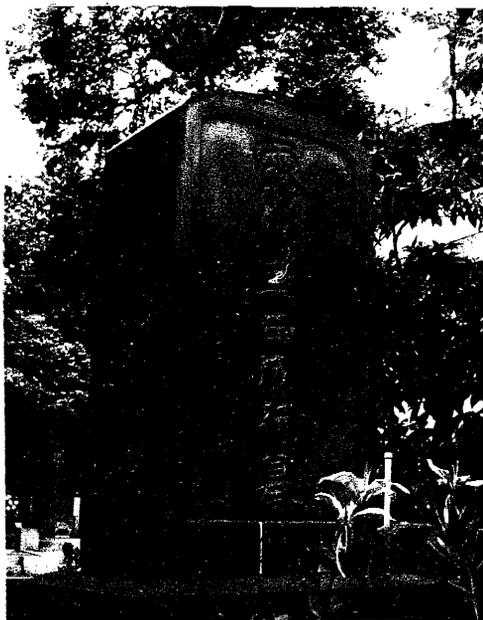
「池上本門寺」墓場巡り

日時：4月29日(木)

案内人：佐藤氏(郷土史家)

東急線池上駅下車、駅前から北に300Mほど行くと日蓮宗大本山池上本門寺がある。この寺は鎌倉幕府の工匠池上宗仲が屋敷を寄進し寺院を建て、建治2年(1276)日蓮が本門寺と命名、日蓮の死後本格的に発展し江戸随一の伽藍となった。桜やお会式(10月)そして五重塔などで有名であるが今回、同人初めてのウォッチング大田区の郷土史家佐藤氏の案内で本門寺にあるたぐさんの墓場を巡りました。文化財を見、墓場に眠る歴史上の様々な人物に出会い、造塔の精神をつかむことができたかと佐藤氏は言います。

●本門寺の墓場再発見!



幸田露伴は漱石、鷗外とならんで明治、大正、昭和にわたる文豪であり国文学者でもある。

墓は五重塔の近くにあつて、幾美子夫人やふたりの子の墓も並んでいる。本来ならバックに五重塔が見えるのですが、現在解体修理工事中のため素屋根のみが見える。

幸田露伴の墓

鍵屋の墓

「タマヤ、カギヤ」の掛け声が聞こえてきそう。江戸時代から花火の製造元として玉屋と鍵屋は有名である。これは鍵屋の墓という、形が大変おもしろく球形は花火の薬玉そっくりである。しかし、花火の鍵屋さんと断定するのに若干疑問が残るそうである。





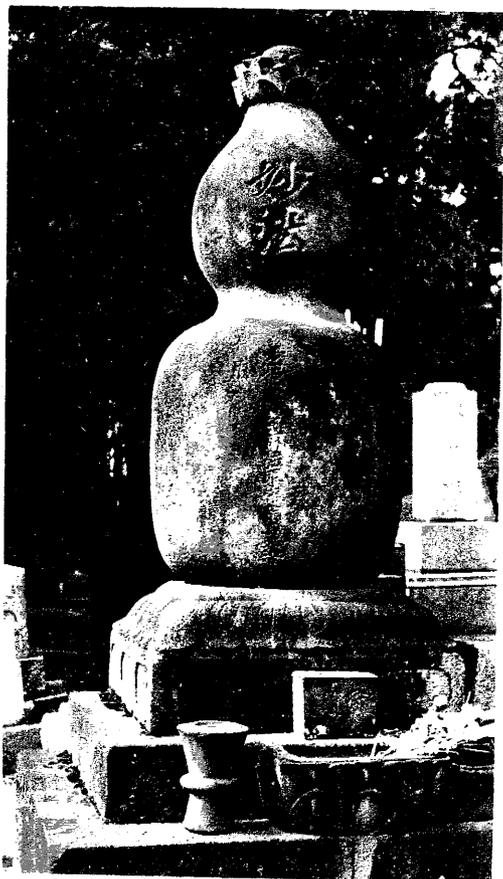
元和8年（1622）建立の前田利常の母寿福院殿日栄の供養墓で、利常の母は加賀百万石の初代利家の妻にあたる。当初は11層であったが、いまでは5層を残すのみである。そのかざらない美しさは、石塔の伝統美が伝わってくる。

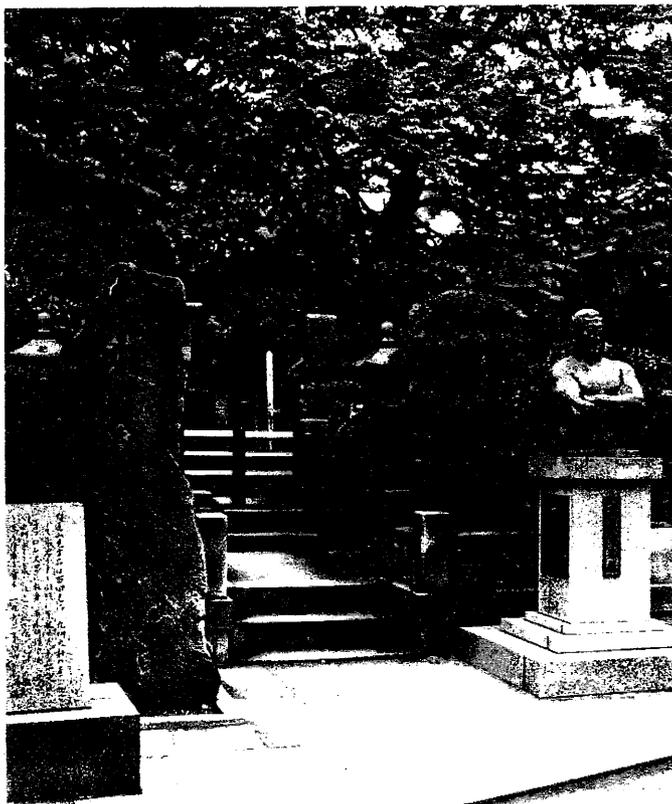
前田利家夫人の墓



狩野派（絵師）で有名な探幽は、多宝塔西側の一角に眠っていた。瓢形をしているが、これは生前お酒が好きで、描いては呑み、呑んでは筆をはこんだ人柄からきているらしい。同人の数名の方はこういうお墓が建つでしょう。

狩野探幽の墓





力道山は、相撲界からプロレスラーに転向、日本にプロレスのブームをもたらした人です。（若い人は知らないかも知念のため）本門寺には数多くの著名人の墓がありますが、道しるべが建てられているのは、力道山の墓だけです。

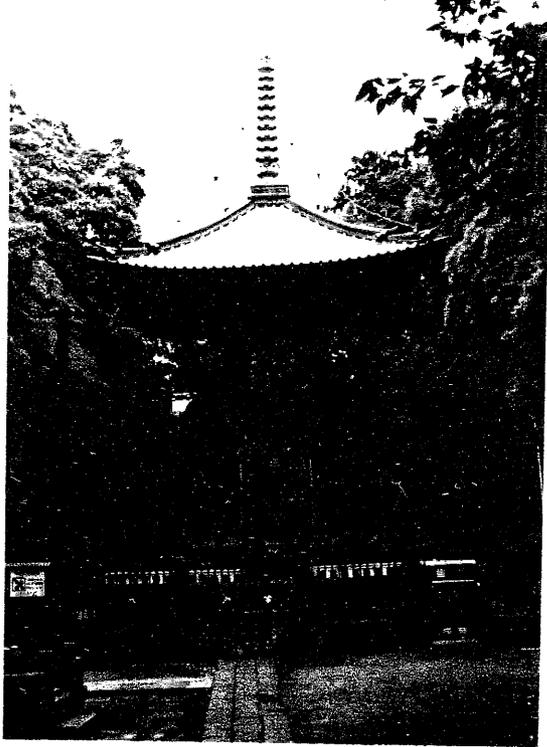
力道山の墓

●本門寺の文化財

経蔵



天明4年（1784）の建物で、寺の図書館としてお経五千巻が収められている。内部は回転する六角形の大きなコマのような構造になっていて、正面に立ってこれをまわし、経巻を自由に取り出せるようになっている。関東には珍しい輪蔵である。



文政11年(1828)日蓮の550遠忌を記念して再建されたのが、この宝塔である。正方形の基壇の上に円形の蓮華座をつくり、その上に直径5Mあまりの円形宝塔をたて、さらに円形軸部において方形の屋根をのせるという変わった構造である。(都文化財)

多宝塔

●本門寺の墓場を巡ってみて

昭和20年4月の大空襲で本堂、釈迦堂、仁王門などが焼失し、江戸以前の建物は総門、経蔵、多宝塔、そして今は解体修理中で重文の五重塔ですが、戦災をのり越え何百年と変わらないのがお墓ではないでしょうか。江戸初期から現代までさまざまな著名人(大名、側室、小説家、政治家、芸術家、俳優、ヤクザ等)の墓が並んでいる、しかもその「形」が多種多様である。墓場は終焉の地とともに人間にとって最も永く住みつづける「家」なのかもしれない。又、400年の歳月を経ても墓石の形も文字も風化することなく、美しくしっかりと建っていた。石塔は、木造建築と同様に日本の伝統美である。墓場を歩きながら死者との語りかけの中から、(少し怖い気がするが?)江戸や明治、大正の人や町が見えてくるといいですね。



岡部知子

4月の雨の中でしたが、目白散策の計画があったので仲間に入れてもらいました。目白というと学習院、元総理大臣の田中邸、椿山荘となんとなくのイメージはあったものの、今の目白通りからは特別な印象を感じられません。しかし、本道から少し入っていくと本当にここは目白？ というような歴史を感じさせてくれた沢山の家に出会えました。

徳川家など古いお屋敷の表札を見ながら、「今この人たちはどんな生活をしているのだろうね」等想像の付かないまま、お喋りをしながら歩いていました。

降りしきる雨の中での移動に、時間がどんどん過ぎていきました。予定していた幾つかを端折り、最後の目的地を目指しました。

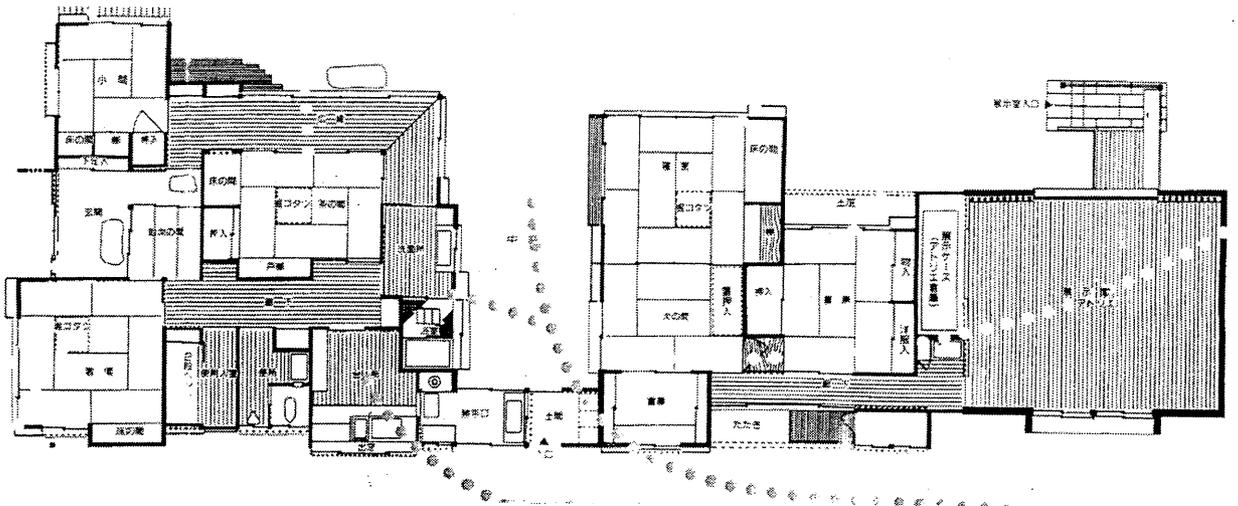
「こんなところに、こんな家が・・・」階段を下ると右手に記念館の入り口が見えてきました。生まれてから放浪生活を続け、土地に根をおろすはずのなさそうな林芙美子の作った旧住宅でした。雨の中傘を差しながらの散策は、参加者全員の靴の中までもぐちゃぐちゃ状態にしました。これで上に上がるのは少し迷惑見学。幸いあったビニールのスリッパの存在に皆んな安心して靴を脱ぐ事が出来ました。本来なら案内の人が付いて下さるらしいのですが閉館時間に近かったので、次回のお楽しみという事でビデオとパンフレットで我慢しました。

住宅の前と後ろにある庭が、各部屋からそれぞれの見え方で視界に入ってきます。先ほどまでは恨めしく思っていた雨の中の見学は、草木にしつとりと趣を与え、見るものにくつろぎと満足感を与えてくれました。各部屋とも風に対しては開放的で、それでいて住む者同士の視線は程よく遮られています。少ない家族で住んでいた家だから、そこまで気を使わなくてもと思うのに・・・。

田の字の田舎家に住んでいる私は、全く羨ましくなっていました。居心地の良さを感じてしまうのです。『私この家がいいな!』と心から思っていました。思ってしまったら、この家を設計した山口文象氏がどんな人なのか気になりましたが、それはまだ調査は済んでいません。誰か知っている人がいたらどうぞ教えて下さい。

なによりも気に入ったのは、年に何度も使う事のない客人の部屋は北側に、そこに住む人の部屋はお日さまの入る南側へ。台所はちょっと寒そうでこれは少し別の所へもって行って欲しい、私にはアトリエはいらないからその位のやりくりはできるはず。家に





帰って「お父さん、私こんな家だったらいいな～」とパンフをひろげ間取り図を見せました。「ずいぶん贅沢な家だな～」素っ気無くその会話は、終わらされてしまいました。現在の家がある以上自分で家を建てるなんてことは、まずはあり得ない話です。しかし想像は自由です。家を見せて頂く機会も沢山あります、そこでまずは自分がその家に住んでみたとしての、居心地の具合を想像します。そしてその次にどの部屋が欲しいか、という事を知らず知らずのうちに考えてしまうような気がします。林芙美子は「愛らしく美しい家が欲しかった」言っていますが、愛することのできるわけも解る様な気がします。もちろんちゃんとした素材、きちんとした施工方法のもとで作ってあるからと言う事が大前提ですが……。

NHKの朝ドラで放映された「うず潮」で林芙美子の存在を知ったわけですが、小説も読んだ事はありませんし、どんな人なのかあまり知らない状態でしたが、記念館にある年表を見た時に急に親しみを感じました。それは同じ福岡県生まれである事。亡くなった年に私が生まれた事。そしてその亡くなった歳が私が記念館を訪れた歳であること。只の偶然で大した事ではないのですが、何だかとても不思議な気がしました。そうは言っても、この世を去った今の私の歳には、今も残る素晴らしい小説を書き、自力で土地を購入し、素晴らしい家を建ててしまった林芙美子はすごい人。家を建てるにも木材や瓦や大工について等二百冊からの参考書を読んで勉強し、山口氏と京都の歴史的な住宅と民家を歩き回り希望する家を伝えたというから半端ではありません。出口にいたおじさんの話では数寄屋ですべてを仕上げずに好きな民家の部分を沢山取り入れたと言われましたが、素人の私にはよく解りませんでした。昔、金持ちの旦那は建築を勉強し、それぞれの職人とやり合い普請道楽をしたといいますから、それに匹敵する人だと思います。健康住宅だの設備等、うわべのものにばかり気を取られずに家を見つめるこだわりには脱帽しました。

もう一度、解説を聞きながらゆっくりと見てみたい家です。一緒に誰か行きませんか？ 同行者、解説者求む……。な～んてね。

リレー連載
テーマ
日本の

第1回

日本の空

写真・文 日影良孝



岩手



奈良

日本の空

僕らが「伝統」「風土」「生活」「まち」「建築」などを語り合い、そしてなにかを造る場合、その言葉の下には常に「日本の・・・」という曖昧なイメージが横たわっている。

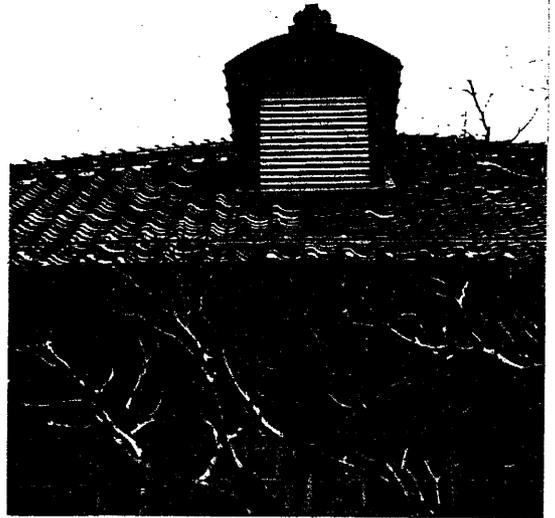
この曖昧なイメージに疑問を持つ作業は、まるで雲を抱くように極めて実感のないものになってしまう。

でも、あえてこの難問奇問に取り組んでみたいと思った。なぜかという、なんとなく今がその時だと感じたから・・・

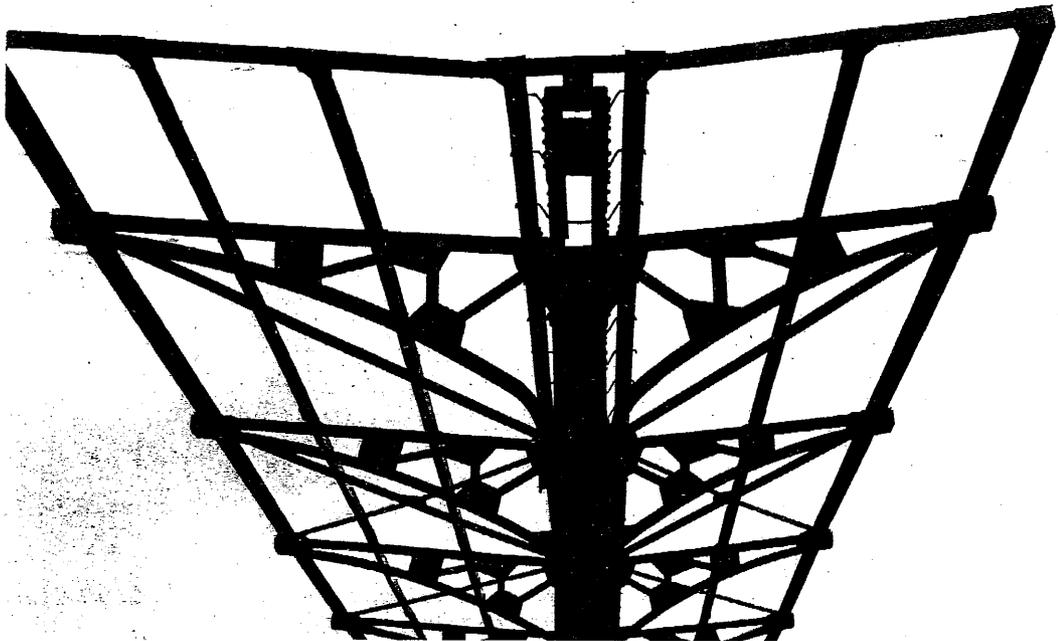
正直に言うと、リレー連載のテーマを「日本」とした自分に後悔した。いっこうに焦点が絞られず、ただ時間だけが過ぎていった。

締め切りの当日をむかえ、ついに思考の体力がつきそうである。そしてこの思考の状態は、まるで今の日本のようだとも思った。

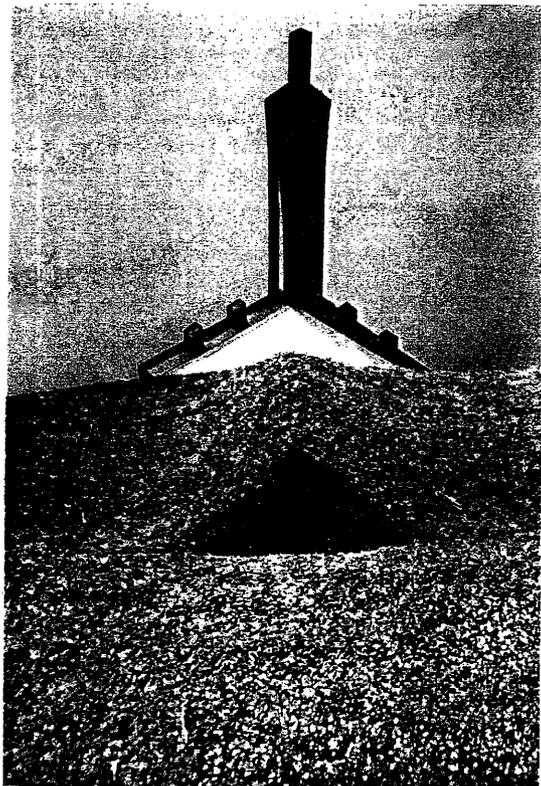
しょうがない。こうなったら空でも見上げて、空想にふけてみようと思う。



箱根



横浜



新潟

建築は空を切る。

建築は大地に根ざすと同時に、空も切りとる。
建築にかぎらず、大地に存在するものすべて
空を切りとる。

だから切りとられた空の風景は、同時に風土
となる。

日本の風土を知るには、切りとられた空を見
るがいい。

空は、屋根によって切りとられているだろう。

昨日、路地裏を歩いた。古い安普請の家の路
地裏を歩いた。そして僕は、わずかな屋根と
屋根の隙間から空を見上げた。

その隙間から見上げた空には、超高層ビルが
高くそびえ立っていた・・・尺度のズレ。

これが「日本の空」なのである。

建築は空を切りとっている。



恵比寿ガーデンプレイス以前



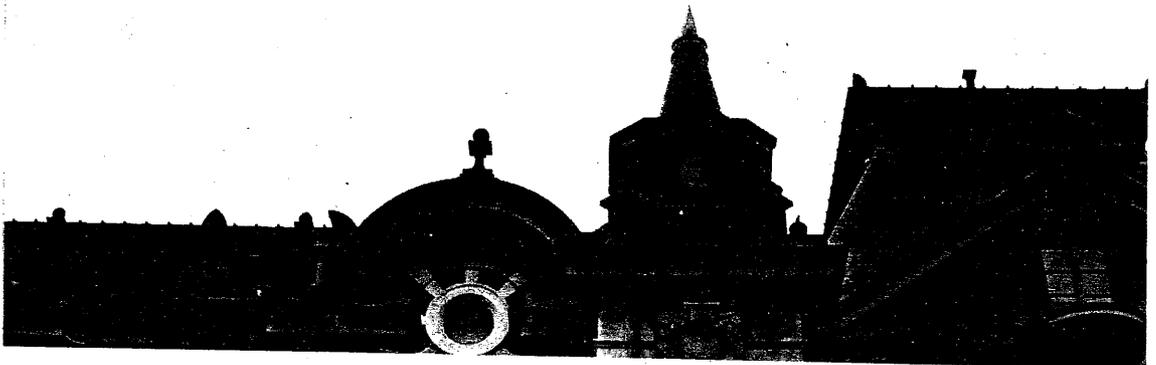
新潟

いよいよ、待ちに待ったリレー連載が始まりました。テーマは「日本の〇〇〇」です。このテーマを選んだ意図は、歪んでしまった日本という概念。あるいは消滅してしまいそうな「場所」の概念。もしくは「手の感覚」などを、今あらためて考え直してみたくなったからです。

でも思想的にとか、哲学的にとか、建築学的にとか、考え始めるとドツボにはまりそうなので、興味のあることや、勉強になることや、楽しめることを連載できればと思います。

さてリレー連載第2回目の筆者は、田島美沙子さんです。読者の皆様楽しみにしてください。

(ひかげよしたか)



横浜

町のりえの詩

大平

第六回
建築宿



町づくりの詩

Program

- 13日 13:00 現地集合 開宿式 塾をしつらえる (清掃 草刈り等)
15:00 きこりの体験 — 木を切る・山の話 —
19:00 ジャズコンサート 懇親会
14日 09:00 基調講演 講師・森まゆみ先生
11:00 作業 見学会
15:00 分科会
19:00 懇親会 — かつてにパフォーマンス —
15日 09:00 分科会
15:00 閉宿式 解散

Department

- 第1分科会 — 町づくりと技術者の役割 —
レポーター 吉田桂二 サブレポーター 柴田純夫
第2分科会 — 模型づくり —
レポーター 寺本雅男 サブレポーター 石引浩子
第3分科会 — 母性と建築 —
レポーター 豊崎洋子 サブレポーター 高橋愛子
第4分科会 — ピンホール写真 —
レポーター 畑 亮 サブレポーター 日影良孝
第5分科会 — 自然と遊ぶ —
指導 羽場崎清人 サブレポーター 岡部祐子
★第2,4分科会は材料費が若干かかります。

写真展覧会開催

建築宿参加者各自、自信作をお持ちください。作品内容は自由です。
投票により一等賞には豪華商品プレゼント。

Staff

- 代表 — 吉田桂二
委員長 — 岡部知子
副委員長 — 豊崎洋子
会計事務 — 岡部知子 桧山文江
食事 — 綾部孝司 八代茂子
広報 — 鈴木久子
写真 — 伊藤秀雄
交通 — 飛山龍一
分科会 — 豊崎洋子
連絡 — 新井聡
懇親会 — 内藤敬介 佐々伸子
修理 — 藤間秀夫 岡部真人
機材 — 戒居連太
受付 — 岡部知子 石引浩子 内藤敬介 佐々木貴彬

Information

〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238 岡部材木店 岡部知子
TEL0429-77-0101 FAX0429-77-2491 (できればFAXで)

Sponsorsip

生活文化同人

Joint Sponsorsip

歴史環境設計会議

Support

飯田市役所 建築思潮研究所 建築知識 日本ナショナルトラスト

第6回大平建築宿参加申込について

この申込用紙に必要事項を記入の上、下記の送付先へ郵便またはFAXにて送付ください
 また、参加費用は申込時に下記口座へ振込みをお願い致します
 申込された方には後日、建築宿のオリジナル・パンフレットを郵送致します

■振込先 —— 郵便貯金総合口座 10360-53222191 大平建築宿事務局 岡部知子
 ■応募締切 —— 7月31日
 ■キャンセル — 8月6日迄の場合は参加費用は返金されます

■申込書送付先 —— 岡部材木店 岡部知子
 〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢238 TEL0429-77-0101 FAX0429-77-2491

参加申込書

氏名 年齢 性別

住所 〒

TEL

FAX

勤務先・学校名

住所 〒

TEL

FAX

家族参加者氏名 年齢 性別

家族参加者氏名 年齢 性別

●参加日程（いずれかに○ B日程の方は参加日程に○）

・A日程（全日程参加）

・B日程 — 8月13日～14日 8月14日～15日

●参加費用（食事代金は含みます・幼稚園児以下は参加費無料です）

・A日程 大人 15000円 子供 6000円

・B日程 大人 10000円 子供 4000円

●参加希望分科会（いずれかに○）

・第1分科会 「町づくりと技術者の役割」 吉田桂二 + 柴田純雄

・第2分科会 「模型づくり」 寺本雅男 + 石引浩子

・第3分科会 「母性と建築」 豊崎洋子 + 高橋愛子

・第4分科会 「ピンホール写真」 畑亮 + 日影良孝

・第5分科会 「自然と遊ぶ」 羽場崎清人 + 岡部祐子

●寝袋（いずれかに○）

・持参します

・レンタルします（1泊 1000円 2泊 2000円 支払いは現地です）

●交通手段（いずれかに○）

・自家用車利用（・席に余裕あり誰かを便乗出来ます ・席に余裕ありません）

・高速バス利用（・飯田からマイクロバス希望 ・飯田から自力で行きます）

・電車利用（・飯田からマイクロバス希望 ・飯田から自力で行きます）

南会津古材バンク（仮称）発足

福島県南西部に位置しながら気候風土は新潟県に属するという南会津地域の茅葺き民家集落。それらの中でやむなく解体される運命に至る民家を、現地での保存活用が困難なのであれば私たちの手で実測調査等をふまえた上で、主要な骨組み（架構体）、内法材、建具などについては解体時に取得し、保管場所にストックする試みを始めました。

生活文化同人の会員で民家再生というテーマと取組む方々に、優先的に情報や資材を提供します。

詳細な活動内容については今夏の大平建築宿にて報告します。当面の連絡先は下記まで。

- 那須高原「夢屋」 0287-78-3272
- アカンサス建築工房 0287-22-2288

大田原市新宮町 2-3-34
まいエア店

.....機関誌編集局から.....

同人機関誌広告公募！

年一度刊行されて好評の我等が同人機関誌「生活文化」を堅持すべく、広告・スポンサーを急募します。他者に大口の依頼をする前に、まず会員相互で（とくに世話人会員は積極的に）名刺大口5000円に御協力ください。

スポンサー特典については、広告掲載誌の送付、同人企画行事への優先案内、「夢屋」特製ハンディタオルのプレゼント等あります。

「生活文化同人の活動がCD-ROMになる」の巻

先ず何から伝えるべきかと言いますと、岐阜県多治見市に吉田桂二先生の個人的なファンの方がいらっしゃいます。この会報を手にしている同人の方々の中にも、吉田桂二先生のファンは多いと思います。名もない私こと「岸未希亜」にすらファンは付いているのですから、一口にファンと言っても様々です。しかしここに紹介する方は、ご自身のホームページ上に「吉田桂二さん」を紹介してしまうほどのファンであります。名前を横田文孝さんと云います。その横田さんのホームページ「個人新聞“たじみより”」の中には、横田さんご自身の活動記録などとともに吉田桂二先生に関する様々な情報が掲載されているのです。

それらは横田さんご自身の趣味によってまとめられたものですが、今回、氏個人の私家版 CD-ROM が製作されるにあたり、《吉田桂二》及び《大平建築宿》という章立てがなされました。

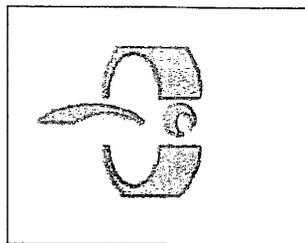
《吉田桂二》の章では、著作の一部や絵・個展について紹介しているほか、大平宿紙芝居「峠の村のものがたり」が全て収録されています。今年の大平建築宿で基調講演をされる森まゆみさんとの「町並み」についての対談も収録されており、当にタイムリーです。また《大平建築宿》の章では、副題に ～大平宿と生活文化同人～ とありますように、大平宿設計会議宣言などの「大平宿」に関する情報と、生活文化同人の会則や機関紙・会報の表紙と目次などが紹介されています。

この他には大庭桂さんの特集として、会報で連載中の『夢屋ものがたり』がノーカットで収録されていますし、それ以外の小説や詩集も収録されています。

これらは横田さんの個人新聞をベースとした作品ですが、生活文化同人の活動内容や吉田桂二先生の仕事の一端を知る、まとまった資料として面白いモノになっていますので、興味のある方・購入を希望される方は今夏の大平建築宿において限定 20 枚の販売を致しますので、この機会にお求め下さい。気になる販売価格は 1000 円です。

“たじみより”

大平建築宿'99



HYBRID CD-ROM

製作：個人新聞“たじみより”
監修：生活文化同人・吉田桂二

(き みあ 連合設計社市谷建築事務所)

CAD できる CAD

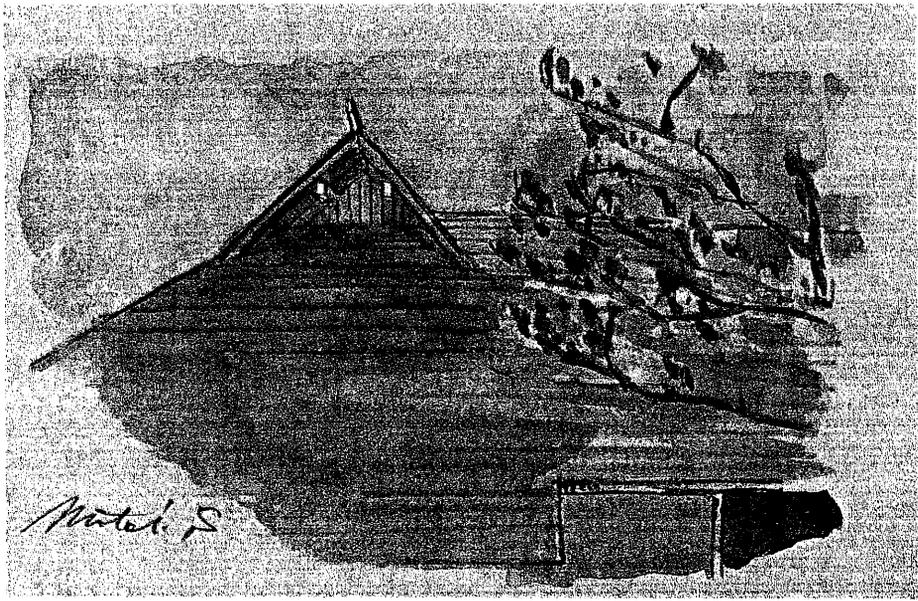
CAD でお悩みの方、ソフトが十分に使いこなせない方、全く初心者という方、技術を身につけたい方、CAD の現状を知りたい方、PC台数が残り12台なので12名限定募集です。丸々4日間連続で講習会を持ちます。

- 期間 8月10日より13日までの午前10時から午後4時まで
場所 都立品川高等職業技術専門学校2階、CAD室
講師 坂本和弘氏、一級建築士。CAD歴4年。
費用 4日通しで会員10,000円(超お得!)会員外20,000円(お得!)
定員 講師を含む15名
テキスト 建築知識CAD徹底解説シリーズ『試せる autoCADLT』
¥3,600。各自で入手の上、事前に少し目を通してください。
入手しにくい方、当日用意可。
担当 鈴木(二葉) 048-281-8720、松崎(納雅子) 042-379-5123

会場PC環境 17インチモニター、ハードNEC98。OSはwindowsNT JW、MINICAD、DRACAD等のソフト設置済。ソフト全体のさわりをやると、すぐにAUTOCADR13JA(講習で使用するソフト)での実践となります。求人内容・市場では、AUTOCADが主流になりつつあるそうです。講習会参加希望者は、担当までFAX願います。追って、アンケートと詳細のお返事しますので、連絡先、会員、非会員を必ず明記ください。

AUTOCAD ← R.....3次元モデル(講習) ...高価
LT.....2次元モデル(テキスト) ...廉価(8~9万くらい)

*操作性は殆ど同じだそうです。



ほら、あの家だ」

ぼくは、ぎよろりが指さす方を見つめた。

雑木林の中に家が建っている。

見るなりぼくは、がっかりした。

やっぱり、ぎよろりにだまされたと思った。

少し、腹も立ってきた。

『あれは、おばあの家じゃない』

ぼくは、確信した。

茅葺き屋根とかべんべん草までそっくりに建

てるのは、無理かと思っていたけれど、その

家は、まったくおばあの家とは似ても似つか

ない。

すごくきれいな家なのだ。

灰色の堂々とした鉄板の大屋根に、桃色の

(べんがらと言うらしい)壁がしゃれた感じ

だ。

入り口は、ガラスの入った大きな木の格子の

引き違い戸になっている。

ぎよろりとひよろりが、その家に向かって

歩き出す。ぼくも、そのあとにしようがなく

従って、一歩二歩そろりそろりと足を踏み出

す。ぼくは、奥歯をぎゅっとかんだ。

『おばあの家じゃない。おばあの家じゃない』

一歩足を前にだすたびに、ぼくは心の中でつ

ぶやいた。

『だまされないぞ』

ぼくは、すたすたと先に歩いていくぎよ

ろのざんばら頭をにらみつけながら、心の中

で怒鳴った。それでも足は、なかなか前に出

なかった。

ぼくは、やっと家の正面につけられた道の

所までたどり着いた。ほんの十歩ばかりが、

なんと長く感じられたことか。ぎよろりとひ

よろりは、ぼくの方を振り返りもせず、ど

んどん入り口の格子の引き戸へ向かっている。

入り口の引き戸の右側に、銅版で字を打ち

出した、金茶色に光る看板がかけてあるのが

目に入った。

夢ものがたり

大庭 柱

⑮

ぎよろりは、満足そうにそう言うと、茶色いチエックの上着のポケットからピースの紙袋をつかみだし、一本取り出すと、銀色のライターで火をつけ、うまそうに吸い出した。

「おとうさん、こういう家作りもあるんですねえ。生活文化同人の仲間といっしょに、古い材を洗ったり、『くめぞう』や『柿洪』を塗ったり、実に楽しかったなあ。そんな

家だから、ぼくと家族の家であると同時に作り上げたみんなの家でもあるんだと思うんですよ。家もそれを承知しているみたいで、勝手に人を招くんです。不思議ですねえ。いやー、お客の来ること、来ること。」

ひよろりは、運転しながら時々ちらりと、ぎよろりの方を見ながらしゃべる。ぎよろりは、たばこをくわえたまま、うんうんとうなづいていた。

車は、山間のカーブばかりの道を走りつづける。ひよろりは、左手を伸ばすとカーステレオのスイッチを押した。途端にジャジャジャジャーんと、学校の音楽の時間に聴いたことのあるメロディーが、車の中に満ちた。ひよろりは、

「おっと、少し音が大き過ぎるな」と言いながら、もう一度左手を伸ばし、スイッチを少し左へ回す。助手席のぎよろりは、右手にたばこを持ち、煙をふうーっとはくと「ベートーベンは、いいな。聴くと元気が出る」とつぶやいた。

ぼくは、ベートーベンを聴いて元気になるなんて、なんてけったいな人間なんだろう。と相交わらず、うまそうにたばこを吸っている。ぎよろりの横顔を、後部座席からそっとうかがった。ぎよろりもひよろりもしゃべらない。

ベートーベンに聴き入っている。車の窓からは、あまり深くない谷と、植林された若い杉ばかりが行儀良く並んだ低い山が見える。ぼくは、眠たくなつた。うしろの窓から

眠ってはいけないと、目を開けようと何度も試みた。けれど、ベートーベンの曲がゆっくりとしたアンダンテの二楽章に入ると、チェロの音に引きずりこまれるように、ランドセルを枕にして眠ってしまった。

「さあ、到着だ」

というひよろりの声我突然聞こえて、車がゆるやかに止まった。

タイヤにブレーキがかかる音で、ぼくは目が覚めて起き上がると、ぎよろきよるあたりを見回した。

いったいどれくらい眠っていたのだろう。

陽の傾き具合と光の弱り具合からの感じでは、車に乗って二時間ほどたったようだ。ぼくは、ランドセルを背負ってジープを降りた。雑木林がある。その向こうに、見慣れない形の山々が見える。雪があるのは、山の頂きだけだ。車を降りたぎよろりが、ぼくの前にやってきた。

「ごらん。那須の山だ。煙をはいている山が

見えるかい？ あれは、茶臼岳。

そして坊や、

■世話人会報告

(99.05.12 於：代官山／無垢里 出席者 14名)

1. 次回定例会予定

第3回定例会内容は今号表紙にて案内。

2. 今後の定例会について

10月予定 小町和義氏(番匠設計)。

小川三夫氏の水戸の現場見学会(予定)。

3. 機関誌について

機関誌スポンサーの件は、益子さんより今号で案内。

機関誌VOL4の内容と執筆者が決定しました。

原稿締切りは6月末とし、今回こそお盆の大平建築宿に間に合わせます!

4. 大平建築宿の準備について

第6回大平建築宿参加申込書を今号に掲載。

■同人活動

- ・吉田桂二『古河文学館』が第12回茨城建築文化賞の最優秀賞を受賞
- ・吉田桂二コミュニティセンターは地域住民が親しみ、自由に使う施設である
一色町佐久島弁天サロン(建築設計資料70)
- ・金田正夫(設計工房・無垢里)一代官山の家、暮らしの工房&ぎやうり無垢里(住宅建築6)
- ・小林一元、宮越善彦、高橋昌巳、松井郁夫『私家版』仕様書仕上げ編(建築知識6)

■会報編集局より

- ・次回世話人会 7月上旬予定 18:30より 場所：飯田橋/もてなし

※世話人会は開かれた会です、興味のある方は誰でも参加してください。

- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月20日

◆ 編集後期

・待ちに待ったリレー連載がはじまりました。連載のテーマを日影さんが「日本」と決めたと聞いたときは、ずいぶん大きなテーマでどうなることかと心配しました。しかし第1回原稿を見て感じたのは、リレー連載の回を重ねるごとに今の日本の風土が見えてくるのではないかということです。この連載個人的に楽しみにしています。指名された方も楽しんで書いてください。(A)

・仲間と一緒に時事通信社にコラムを連載しました。タイトルは「マルチメディア住宅」……。視点はハード面ではなく、家庭に入り込んできたパソコンとどうやって仲良く暮らしていこうかといった切り口です。それにしても、乏しい知識の中で書いてしまった私達もナンですが、頼む方も頼む方だよなあ。(K)

会報編集局：〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-7

連合設計社市谷建築事務所 新井 聡



絵・吉田桂二

99年度事務局：〒169-0072 東京都新宿区大久保3-10-1-606 Tel/Fax 03-3204-9373
生活文化同人事務局 木の建築設計 江原幸彦

生活文化

生活文化同人会報

1999 (平成11) 年08月号 No.38

	表紙・目次	01
⑦	第3回定例会報告／勝見紀子	02
	私の近作／綾部孝司	06
	ミーハー建築探偵V／岡部知子	08
⑧	リレー連載 日本の墓地／田島美沙子	10
	私の山陰紀行／岩上健司	12
	夢屋ものがたり⑩	15
⑨	掲示板	16
	第六回大平建築宿	19
	世話人会報告・事務局より	20



第6回 大平建築宿

テーマ「町づくりの詩」
うた

日程 8月13日(金)～15日(日)

主催 生活文化同人 共催 歴史環境設計会議
後援 (予定) 飯田市役所 建築思潮研究所 建築知識 日本ナショナルトラスト

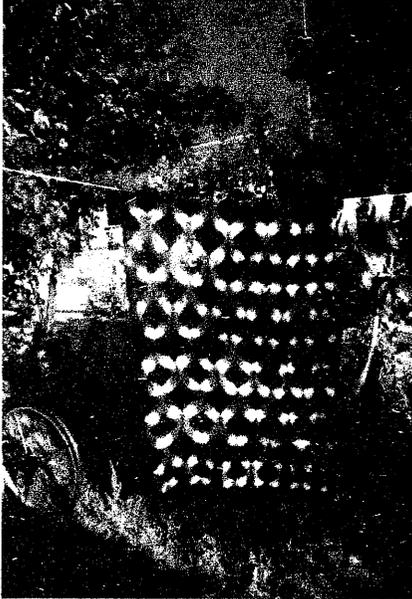
「藍染め」～藍が生き物だと知っていましたか?～

日時: 6月12日(土)

場所: 羽生市/鈴木藍工房

講師: 鈴木道夫氏(藍工房作家) 案内: たらだかずえさん

かご染を施した大きな布。豊崎さんの作品



久しぶりに、ペンやマウスを使ってではなく、自らの手を動かしてものを作るという経験をしました。工程が複雑で時間がかかり、おそろしく根気の要るものだと思います。こんでいた藍染めが、実は親しみやすく、ドキドキワクワク、かつアーティスティックで、とにかく楽しいものであることを教えられたのが今回の企画でした。

藍で柄をつくるにはまず下準備

当日は梅雨の晴れ間、朝からの晴天で、正午に近づくと気温はどんどん上がり、作業を始めた昼過ぎには30℃を超えていたと思います。

工房に一歩足を踏み入ると、ムツとした匂いが鼻をつきました。一瞬、土間の床に寝そべる3匹の犬たちの

臭いかと思いましたが、いえいえこれこそが醗酵した藍の臭いなのです。牛舎に敷かれた藁の匂いと言えれば近いでしょうか。最初強烈だと思えたこの臭いも、作業が進むうちにまったく気にならなくなりました。

着古してシミのついた生成りのコットンセーター、白のハンカチ、リボンのついた子どものシャツ、これらが私の用意した今回の題材です。

まず大きなバケツに汲まれたぬるま湯にそれらを浸します。予め繊維のすみずみまで水分を行き渡らせ、実際に藍甕(あいがめ)に入れて染めるときにちゃんと藍が浸透するようにするためです。しばらく浸したら大きな物は脱水機にかけるなどして、水分を搾ります。

ここからが藍染めの柄づくりです。今回みんながトライしたのは、「絞り」と「板じめ」。それに「かご染め」です。

絞りはご存知のように布をつまんで糸や尻紐で絞り上げる方法で、絞った部分には染料が入らないのでそこだけ白く柄として残るというものです。私は子どものシャツの裾と袖口を数カ所絞り、連続したドーナツ模様をつくりました。



下準備—板じめからの作業

(写真1)

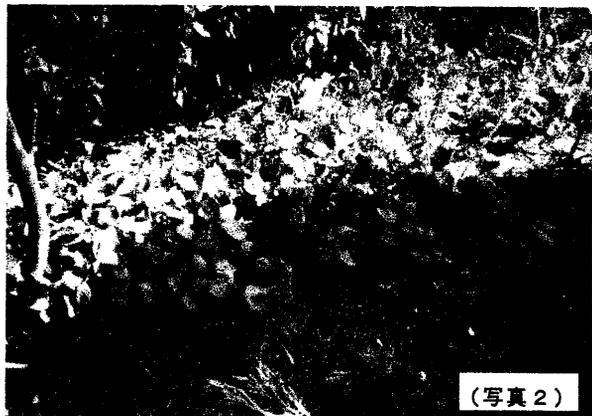
板じめには万力のような道具を使います(写真1)。工房には大小さまざまな板が用意されていて、この板を2枚使い布を裏表からサンドイッチします。このときその万力で強く締め付けるので、絞り同様に挟まれた部分には染料が入らず、白く残るという仕掛けです。布を折りたたんだり重ねたり、板を斜めにかけるなどして柄遊びができます。

藍は生きている

工房には大小の藍竈(あいがま)がありました。小さな方は昔ながらの構成で、4つの甕(かめ)を1セットとした1坪大の竈(かまど)です。コンクリートブロックを積み上げて囲ったなかに4つの甕を置き、隙間を土で埋めてありました。大きな方は、さながら温泉宿の浴槽のようなかんじです。ただし、深さの方は1メートル以上あるそうで、落っこちたら大変です。なぜ竈状につくってあるかという、それは保温のためなのです。藍の菌が一番元気でいられる温度は30℃、染めに適した温度は20～25℃。これを保つためにもみがらを燃して、甕を温める必要があるのです。

藍という染料は、世界中のいろいろな植物から抽出されます。インディゴと呼ばれるインドの藍は有名で、藍の色素成分を指す名称にもなっています。日本の藍は、日本固有の植物である「蓼(れい)ータデ」から取られます。「たで食う虫もすきずき」のあの蓼(れい)です(写真2)。

蓼(れい)が染料になるまでを説明すると…まず、葉を摘んで水をかけ自然醗酵させます。(江戸時代に藍の生産が日本一であった四国の脇町に残る豪壮な蔵は、この蓼(れい)の葉を3ヶ月間かけて醗酵させるための施設で、「藍寝床」と呼ばれていました。)これが染料の直接の原料で「すくも」と呼ばれるものです。ちょっと見には乾燥した土のようです。現在はこのす



(写真2)

蓼(れい).よく見ると生葉にすでに青い斑点が見える

くもの段階で流通しており、今回指導頂いた鈴木先生の工房では、色合いの異なる四国と北海道のものを使い分けているそうです。

このすくもに、麦の「ふすま(米でいうと糠に当たる部分)と木灰・貝灰・消石灰と水を加えて、温めたものが藍の染料です。灰を加えるのは、藍の菌がアルカリ好菌(アルカリ分を好む菌)である

アルカリ性の藍は人の肌には刺激が強すぎる。手袋が必需品



ため、また、ふすまは栄養分として与えます。藍が染料として力を発揮するには、醗酵し続け生きていなければだめなのです。鈴木先生曰く「藍を生かし続けるということは、熱帯魚や金魚を飼うことに似ています。菌が弱ってきたときには、お酒を入れて元気を取り戻させることもあるんですよ(笑い)」とのこと。

染料につけては空気に触れさせる、これを繰り返していい色に

絞りや板じめなどの準備が終われば、いよいよ染の作業に入ります。甕の縁に渡した棒に布をぶら下げ、ザブンとつけます。このあと、すみの方まで染料を行き渡らせるため、甕の中に手を突っ込み布を揉みしだく

ようにします(写真3)。10分ほどつけたら引き上げて、しばらく吊るしておきます。藍の液が空気に触れて酸化し、初めて色素が定着するのだそうです。板じめやかご染で複雑な形状になっているものには、エアークンプレッサーを使い、すみずみまできちんと空気に触れさせねばなりません。

一度浸すと泥の色に黒く染まったように見えるのですが、1回だけでは後で洗い流してみると、淡い水色程度でムラも出やすいとのこと。回数を重ねるほど美しい藍色に染まるので、藍染作家の作品製作などでは何十回も繰り返すのだそうです。何回かつけては板じめの位置を変えたり、甕に浸す面積を変えることで、柄の濃淡やグラデーションをつくることができます。今回の私達の場合は5~6回程度でしたが。

水洗いし、現れた色と柄に感動！

みんなそれぞれに作業をすすめ、後は最後の水洗いを残すのみとなりました。甕から引き上げた布は泥色で柄も何もわからず、お世辞にも美しい色とは言えません。内心「こんなんで大丈夫かなあ」と思いながら、布を水が流れる大きな水槽に移します。

そして泥(みたいに見えるが藍の液)を洗い流して水槽から持ち上げた瞬間、「ウアー！」とか「きれい！」とか「変わった！」などの歓声が上がりました。美しい藍色をそこで初めて目にしたのです。褐色のえびを熱湯に入れて真っ赤に変わるのを初めて見た時の驚きと同じです(たとえが低級で失礼！)。魔法のようです。でもこれが藍染という化学なんですね。思い通りに染まった人も、そうでなかった人もこの感動は同じです。

私達のあのくたびれたセーターは、「イッセイ・ミヤケ」ばりのおしゃれな綿ニットに生まれ変わり、ありふれたデザインの子どものシャツも、世界でただ一枚のオリジナルシャツになり



コットンセーターの染は6回繰り返した。

ました。

日本の藍色は不純物のなせる技

布は、藍で染めることにより繊維が丈夫になり、虫や蛇などを寄せつけないという特性を持ちました。しかし昔ながらの藍染は、藍の持つ色素成分と同じものを人工的に作り出した合成藍に圧されて(ブルージーンズなどはその代表例)、人々の生活からは離れていきました(剣道着などには使われていたそうですが)。

けれど再び、“自然なもの” “伝統的なもの” “手作り” に目を向ける人が増えてきている今、藍染も見直されています。合成藍にない藍染の魅力は「不純物が含まれていること」といいます。蓼の葉の中の藍の成分

はほんの数パーセントですから、殆どの部分が不純物といえます。しかしこれがあることで色の深みや味がでて、日本独特の藍色となるというのです。まさに伝統が培った色なのでしょう。

建築に携わる私達の目は、住まいに関する事にばかり注がれがちですが、もっと身近に生活文化をかんじた一日でした。



作品を前に皆でポーズ。右端が鈴木先生。

「兄貴が島根に山を持っているのだけれども、そこの木を使って家を建て替えてもらえないだろうか？」それが施主である建具屋さんの最初の一言でした。

話によると2年ほど前、実家の兄貴が家を建て替えた際に切り出した丸太やら挽いた正角材、さらに板材や挽きおとしが1軒分くらいはあるそうなのです。材種は桧と杉が半々くらい。(山には赤松も沢山あったのだけれども虫害でほとんど全滅とのことでした。)

そんなわけで、ある材を生かしての家づくりが始まりました。

当初、材料は、製材済みものとして桧4寸角70本と杉4寸角・3.5寸角が数十本、3寸×4寸(島根では、土台に使うらしい)という角材も20本ほど有り、あとは板や丸太です。

施主の家族構成は、50代の夫婦と社会人の息子と娘の4人家族。プランへの希望は数回にわたる打ち合せの結果、

- 1、老後の夫婦への配慮
- 2、2世帯同居の可能性があるので、改造が可能であること
- 3、建具づくりが楽しめる家(建具屋だから)
- 4、息子の世代まで使える家
- 5、生まれ故郷である島根の木が見えるようにしてほしい
- 6、敷地は狭いが、ゆったりした家にしてほしい
- 7、ローコスト

などでした。

結果的に向かった方向は、真壁造、踏み天井の日本的気持ちよさの漂う家でした。しかし、露出させることによる大工手間のアップは否めない事実で、7番のローコストをいかにして実現させるかがテーマとなってしまいました。

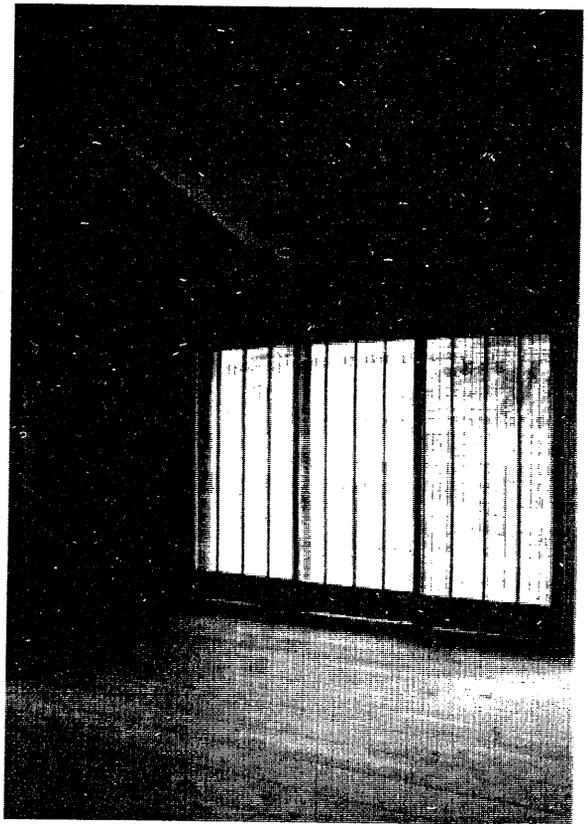
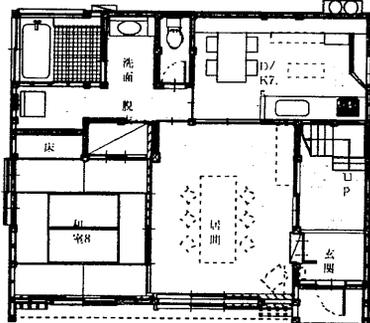
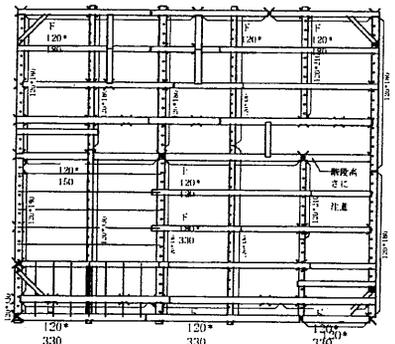
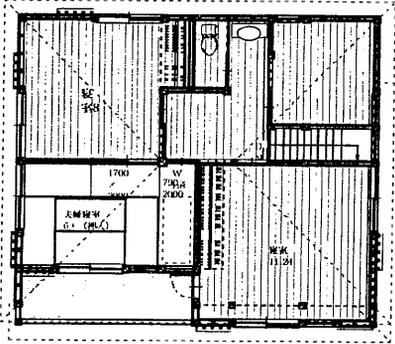
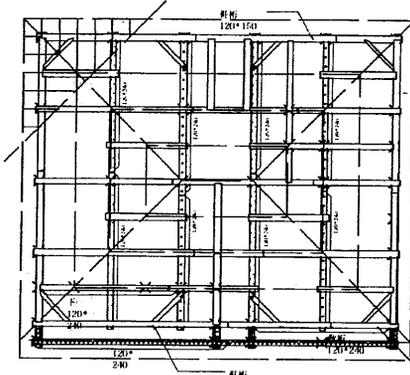
軸組は伝統工法を踏襲したかったため、また、するべきだと考えたため、4寸角の断面欠損に配慮し、8分の通し貫を採用、通柱は場所により6寸角、金物の使用は、一部補助的に使用した以外は使用せず、檜の楔と込み栓、車知で接合、梁の継手は追っかけ大栓継ぎを基本とし、一部金輪継ぎと両目違い腰掛け鎌継ぎ、直行する横架材同士は渡り頭、小屋は折置き組を採用しました。尚、今回送られてきた島根材は目が詰まっけていて堅いのですが、癖がある木が多く、材を使える状態にまでするのはけっこうな時間と労力を要しました。

妥協できない部分は妥協せずにかにコストダウンしたかですが、

- ・ 架構を規則正しく組み立て、梁などの成を統一、単純化することで、墨付けと刻みのスピードアップを図る。
- ・ 2階は将来対応の必要(2世帯)があるため、内部の構造柱と壁は、必要最小限とし、床板(厚板)を張ったあとから間仕切り柱や壁として立てる事にし、造作時の単純化と後の可変性をもたせる。
- ・ 壁の左官は、仕上げず余裕がでてきた段階で仕上げる。
- ・ 塗装は施主自ら行う。
- ・ 内部建具は必要最小限のものだけ最初に入れる。
- ・ 風通しが比較的良い立地なので、エアコンは入れない。(引戸が殆どなので常に開けておける)
- ・ 照明は、スポットライトやボール電球を主とし、器具代を抑える。
- ・ そのほか、キッチンや浴槽、内部家具などは、施主がつくる。 などです。

基礎や、屋根、外壁など後々のメンテが難しいものは、それなりに予算はとりました。

結果的に施主の意見として、安心して後々の家づくり(未完成部分)が楽しめそうだとあってらっしゃいました。



概要

所在地 : 埼玉県川越市
 家族 : 50代夫婦+息子、娘
 敷地面積 : 117.62㎡
 1階面積 : 65.42㎡
 2階面積 : 64.17㎡ 合計 : 129.59㎡
 構造 : 木造軸組貫構造 (8分厚貫+構造用合板)
 外部仕上 : 和瓦葺き、土佐漆喰塗り、一部サイディング張り
 軒天+戸袋は、桧か杉に柿渋+ベンガラ
 内部仕上 : 床サワラ厚板 (岡部材木製)、壁下地プラスター
 天井踏み天井または桧板張り
 竣工時期 : 7月下旬予定

全体カラー : 白と墨色です。
 (川越カラーの蔵の色白黒になじむよう)

最後に

施主が工務店(私のところ)に依頼してこられる仕事の場合、いくらでどこどこさんの家のようなものを建ててほしい、又はいくらで展示場のどこそこのみみたいなものをという依頼が結構あります。外観は洋風、外壁は総サイディング張りでメンテナンスフリーなもの、内装は大壁のシンプルなもの、、、、。そんな場合、機能的、意匠的そして素材的にも日本の風土にあったような方向に徐々に話を進めるのですが、話の過程で施主の方のイメージの中に商業チャルやそれによって建てられた家の残像が多く残っていることに気づかされます。

最近、健康ブームなどで自然素材の話や、環境対策で建築産廃の話が施主との打ち合わせの中で話題にあがるが増えてきたのですが、そのたびに先人の造ってきた伝統的な日本の建物に対し、学ぶべき事の多さを痛感させられます。一棟一棟が連なり街が出来上がることを考えると、大切にその一棟をつくることによって街への波及効果が現れることを期待しています。

「日曜日から五箇山に行くんだけど岡部さん来る?」突然のお誘いの電話があったのが土曜日。6月の月末を控えやっておかなければならない仕事も多く、とりあえず火曜日の朝に合流の約束だけをした。月曜日は何時に出られるか予想も付かないので切符も取れない。時間を調べる暇もなく、



この時期なら電車も空いているはずだと、東飯能から高岡まですべて自由席、上越新幹線で越後湯沢へ、そしてほくほく線で高岡へ、都合五時間と11分。やらなくてはならない内職があったので車窓から景色を眺め左手にビール、右手にボールペンの1人旅。集会や見学会などで遠出をする事は多々あるが、電車は自由席おまけに泊まる場所が決まっていない旅は初めての事。いい年をしてと笑われるかも知れないが、初めての経験にドキドキしながら、結構楽しめることに変な驚きを感じてしまう。

そして火曜日の朝、城端線に乗り込み待ち合わせをした人の元へ向かう。雨の朝、五箇山の葺き替えをしている場所を目指しレンタカーを飛ばす。すでにその人は現場にいた。茅葺きの記録を残すためにきているその人のお陰で、一緒にいる私は現場もフリーパス。早速足場の上に登らせていただき、葺き替えを間近に見ながら、カメラを向ける。その後、その人を車に乗せて白川の合掌を見学に行った。白川といえば随分前に高橋木造建築研究所の高橋氏が合掌の調査をして模型を作ったところ、そのつながりのお陰で未公開のその模型を見せていただき説明までして頂いた。

翌日は五箇山にある相倉の森林組合で、古い萱を肥料としてリサイクルしている工場を見せていただいた。工場といっても古い萱を裁断して積み上げ、時折混ぜているだけの工場だった。簡単な作業のため大した設備もないのだが、時間は掛かる。この萱を3年がかりで腐敗させ、菊専用の肥料として売り出しているという。採算はどうか取れているという事で、各地からも好評だという話。実際にはこのような工場ができる前から、畑の肥料や燃料としてリサイクルはされていたらしい。今の住宅は壊すとゴミだらけ、自然の素材はリサイクルが出来ていた事に改めて感激。

五箇山と白川の茅葺き民家を見て歩いたが、合掌でも少ししか離れていないのにずいぶん違いのある事に驚きを感じた。

構造の名称もかなりの違いがあるらしいが、今回は茅葺きを中心に見学して色々教えていただいた。(聞いてもよく分からないし・・・)

五箇山も白川もどちらも合掌を組んだ上によしずを敷き詰めていく、このよしずは蚕棚に使ったもののリサイクルだ。そしてその後は萱と同じような利用をされる。

次に萱を下から積んでいくのだが、これも積み方がずいぶんと違う。白川は3方から囲む形で積んでいくのに対して、五箇山はまず両脇に萱の柱を立てるようにして下から葺いていく。その萱をヌイボク(縫木?)と呼ばれる粘りのあるマンサクの木で押さえていく。その木と間の萱をその内側の合掌に大きな縫い針で、屋根の中と外の見えない者同士が右、左、もっと上などと言葉を掛け合いながらきれいにワラを刺し縛っていく。

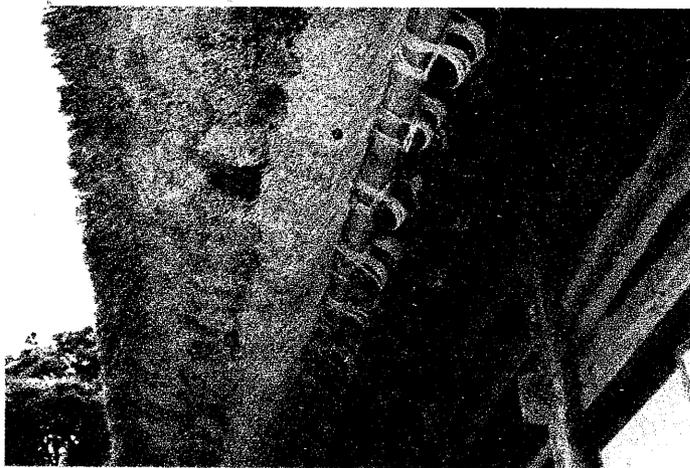
軒下から見ると写真の様に一番内側に見える麻の殻は堅く中が空洞のため乾きやすい、萱は中にフワフワしたものが詰まっている。葺き替えの時降ろした萱でまだ使えそうなものは、もう一度利用する事もあるという。

両地区の葺き方に違いがあるという事は切り込み方も、見た目の印象も違ってくる。白川は三方から葺いて、三方から切り込むボブカット型、男性的な印象だ。五箇山の方は両サイドがフワツとした丸みがあるために、柔らかい女性的(?)な印象を受ける。

今回誘ってくれた方、その方については機関誌で紹介した。その人の事を機関誌に書こうと、色々な話を聴く機会を持って頂いたが、実は肝心の写真を撮り忘れ、追っ掛けて富山、岐阜まで行ってしまったという今回の旅でした。お陰で今まで気にもしていなかった茅葺きが、興味のもてるものの一つになった。

そして今は住宅に使われなくなった茅葺きに、美しさを感じながらも現代に同じ事をする大変さも感じました。よそを見て美しさを語るのは簡単だが、そこに住む人の立場になれば労働力の確保も大変だし、意識がなければ誰でも出来るというものではありません。地味で大変だけど残していこうとしている人は尊敬したくなります。

それともう一つの発見があります。五箇山では囲炉裏で自在鉤が使われているが、白川は五徳が多い。全部を調査したわけではないのでタマタマかも知れないが、見せて頂いた家は全部そうでした。



リレー連載

テーマ

日本の

第2回

日本の墓地

田島 美沙子

日本各地の墓地を調べた訳ではありませんが、わが家の窓をあければそこにある「墓地」を見ながら、感じていることを綴ってみました。

この春、西日暮里に引っ越しました。新居は建物の南側と西側の2面を墓地に囲まれた、窓から見える風景はすべてお墓という区民住宅です。正直なところ最初はこの環境を薄気味悪く感じたのですが、ここで暮らして数ヶ月たった今、これが気味悪いどころか、安らぎを感じるようになってきたのです。

部屋のベランダから見える南側の墓地は、緑豊かで、お墓参りに訪れる人が供える生花が絶えません。園内には様々な花木が植えられ、樹齢数十年の木もあります。そんな木々の緑の間から卒塔婆と、墓石がなんとも芸術的に生えているように見えます。

雨上がり日が差すと、水に濡れた墓石がキラキラと、鮮やかな緑の中で反射する様などは、思わず見入ってしまうほど、美しいものです。



幼くして「ゲゲゲの鬼太郎」を見て洗脳された私にとっては当たり前だった
《 お墓 + 卒塔婆 = 幽霊 + 妖怪 》
という方程式が今、覆されようとしています。

一方、住宅の西側にあるのは比較的新しい墓地です。コンクリートの壁と、鍵が掛けられた鉄の扉で囲まれた敷地の中には一般の人は入れません。墓石と卒塔婆が、健康サンダルやイボイボの如くピシリと突き出ている、見ていっただけで息が詰まりそうになります。

幸いにも、このお墓は部屋から見えない位置にあるのですが、日本の土地問題を象徴するような新興住宅地にも似たお墓や、更にはビルの中が全て納骨ボックスという高級コインロッカー形式のお墓が、これから増えていくのでしょうか。

家から少し歩くと、谷中霊園があります。桜並木や、銀杏、楠の木の大木も沢山あり、さながら森林公園のようです。

霊園の中にある公園では、子どもたちが元気に遊んでいます。木陰で立ち話をする近所のおばさんたちや、ジョギングしているお兄さん、ベビーカーで赤ちゃんと散歩するお母さんに、犬を連れてお父さん。

地図を片手に徳川慶喜や、横山大観等の墓を見つけて喜んでいるアベックもいます。ここでは、どんな歴史上の偉人も、時空を超えて、手を伸ばせば届きそうな距離で感じることができます。

5月下旬にあった『花のフェスティバル』は新鮮な驚きでした「お墓でこんなことやっていいの…!?!」。

霊園の通りには町内会や幼稚園の父母会の屋台がずらりと並び、紙芝居のおじさんの熱弁や、コーラスグループの歌声が響きわたります。お墓の前には「ミニSM」の線路が敷かれ、キヤーキヤーはしゃく子どもたちを乗せて走っています。

海外の墓地のことはあまり知りませんが、こんなに楽しい墓地ってあるのでしょうか。あの世の人と、今を生きる人たちが、共に憩える園。

子どもたちがかくれんぼをしながら墓石を蹴飛ばしたり、散歩の犬や野良猫おしっこをかけられ「安らかに眠る」ということはできなくとも、私は日本の、こんなお墓に葬られたいと、谷中霊園を散歩する度に思うのです。



第3回の筆者は、島田真弓さんです。皆様お楽しみに。



私の山陰紀行

～国宝 三佛寺奥院投入堂を見て～

岩上健司

鳥取の山間にある国宝 三佛寺奥院投入堂を訪ねた。
とにかくすごい迫力であった。久々に背中がぞくぞくした。

私は6月10～13日にかけて、山陰地方に一人旅に出かけた。

かつて桂小五郎が京から長州へ逃げ帰った山陰路をたどり、出石から城崎、松江、津和野、萩といった町並みを見に行くことが主な目的であったが、出発前に大阪の知人の設計事務所に立ち寄ったところ「そっちの方に行くなら、ぜひ投入堂を見てきた方がいい」といわれた。「投入堂ってなに？」と思っていたら、「日本の名建築：西沢文隆著」という本を見せてくれた。その人は若いときに建築家、西沢文隆の薫陶を受けた人で、「西沢先生も死ぬ前に一度は見ておくべき建築の一つ」と言っていたようだ。その本には、かつて見たことのある、断崖絶壁に嵌まり込む様にして建つ古いお堂の写真があった。「これは土門拳の写真集に出ていたあのお堂ではないか！」すっかり忘れていたが、以前に土門拳の写真集を見て「すごいなこれは、一度本物を見てみたいものだ」と思っていた建築がその本にあった。これはぜひ見ておきたいと思い、ちょっと予定を変更しレンタカーを借りて三佛寺に向かった。

三佛寺は倉吉から車で約30分、三朝（みささ）温泉を過ぎると、石造の大鳥居が見え道は山間に入っていく。しばらく行くとやがて三徳山三佛寺である。

このお寺は山岳仏教寺院で、慶雲三年（706）年に役小角（えんのおづぬ）が建立、金剛藏王権現を勧請して草創したのにはじまり、嘉祥二年（849）に慈覚大師が堂宇を建てて弥陀、釈迦、大日の三仏を安置して、浄土院三徳山三佛寺と号したといわれる。度々の兵災に会いながらも、奥の院は創建当時の姿をとどめている。

県道沿いには「投入堂拝観所」と言う場所があり、昔はデパートの屋上で見かけた望遠鏡が置いてあって遥か彼方に小さく投入堂を見ることができる。ここからは豆粒ほどにしか見えず、当然、建築の迫力は伝わってこない。

早速、駐車場に車を止めて参拝へ。奥の院投入堂に行くには三佛寺で入山手続きを得て登山料を払わなければ行くことができない。本堂より700m約40分の道程である。受付で名前を書き、安全祈願の襷をもらい、いざ投入堂へ。

まずは樹齢数百年はあるであろう二本の杉の大木が天高くそびえ参拝者を迎える。荘厳な雰囲気は漂う素晴らしい空間である。しかし、そこからが予想以上に険しい道であった。道らしき道が無い。よく見ると木の根の間にかすかに人が足を乗せられるような場所があるだけである。普通の革靴を履いていた私は少々戸惑いながらも木の根をつたい這い上がる様にして登る。やっとのことで登ると明るい尾根にでた。ほっとしたのもつかの間、今度はロープが下がっていてそれを頼りに登る険しい道が続く。下は谷底で怖くて下を見ることはできない。もう汗だくである。すると耳元で「ブーン」という大きな羽音が聞こえ目の前に大きなスズメバチが！！。ここで刺されたら一巻の終わりである。手を離したら千丈の谷へ落ちて行くしかない。「ここで落ちたら、里にいる妻子はどうなる。お願いだから刺さないで」と物事あまり良い方に考えない癖のある私は恐怖で凍り付いてしまった。しかし、ここまできて投入堂を見ずしては帰れない。



文殊堂

何とかやりすごすと、やっと奥の院最初の建築、文殊堂が見えた。桁行4間、梁間3間、単層入母屋柿葺きである。谷に向かって建つその姿は力強く美しい。次にほぼ同じ意匠、構造の文殊堂、岩の上に建つ鐘楼堂と続く。さらに尾根づたいに進み、馬の背、牛の背といわれる細い道を過ぎると、岩の風化した窪みに祠堂が建ち並ぶ。大きな岩を廻ると突如として、投入堂が現れた。



投入堂

はっと息を失う景色がそこにある。

近づく道すらない断崖に千数百年建ち続けている姿は俄かに人間の行為とは思えない、神懸りのな力を感じる。こんなところには現代の技術をもってしても容易に建てることはできない。本当に昔の人には法力があったのではないかとさえ思えてくる。力強いとか、美しいといった言葉では言い表せない迫力がある。

投入堂は、蔵王権現を安置する身舎と愛染堂からなり、身舎は桁行1間、梁間1間、前面及び、西面に庇及び縁が取り付けられている。東が切妻、西が入母屋の檜皮葺、西沢先生の本によると、もとは身舎と愛染堂だけであったものに庇が後から付加されたたようだ。詳しくは「日本の名建築：西沢文隆著」という本を参照されたい。

生活文化同人の皆様にも訪れた人はいると思いますが、訪れていない人は鳥取の近くに行くことがあったら是非訪れてみてください。

凄まじい迫力の建築です。

ただし、行くにあたっては晴れた日に登山向きの靴をはいてできれば一人ではなく二人でいくことをお勧めします。苦勞しても登る甲斐はあります。

んなにも力強くかみあって家を支えていたことを、ぼくはあらためて知った。黒い木組みは、白い壁に映えて胸がすっとする勇壮さを見せている。おぼあの家の木たちは、前よりも生き生きしている。

ぎよろりはどんな魔法で、この家に新しい命をふきこんだのだろう。それにしてもおぼあが見たら、たまげるだろうなあ。

前は、はだか電球が下がっていただけの、クモの巣だらけの土間だったのだから。

『夢屋は、夢のようだけど、夢じやない。』
ぼくは、心の中で、何遍もくりかえしつつぶやいた。

いつもおぼあが縫い物をしていて、『よこざ』だ『かかざ』だ『ネコ、バカ、坊主』だと騒いだ囲炉裏の部屋は、きれいに磨き上げられた板張りの広間になっていて、掘こたつが見える。その部屋の一角で、つやつやとした黒い髪を後ろで一つに束ねた女の人が、木の椅子に座り、こちらに背を向けて。パタン、カラン、パタン、カランと機を織っていた。女の人の足元では、三つくらい小さな女の

子が、積み木を積み上げて遊んでいる。

「ただいま」

ひよろりが、ほがらかな調子で声をかけると、女の人は、椅子に腰掛けたまま振り向いた。そして、

「おかえりなさい。あら、いらっしやい」と歌うような優しい声で言った。土間に立っているぼくを見て、少し首をかしげ

「ああ、この子なの。この家の坊やね」

女の人はそう言って椅子から腰を上げた。ちよつと身をかがめ、積み木で遊んでいる女の子を抱き上げると、にこにこしながらこちらへやってくる。

ひよろりの奥さんらしい女の人の笑顔は、ぎよろりにそっくりだった。ぼくは、あいさつをすることも忘れて、目ばかりきよろきよろさせて、突っ立っていた。少しばかり照れていて、目のやりばに困っていたのだ。



Yumeya
197. 8. 27
Mitsuo

夢屋

ものがたり ⑩

大庭 桂

看板には、この間学校で覚えたばかりの漢字が、横に二つ並んでいる。アラジンのランプから生まれたような形の字だ。ぼくは、看板の前に立ち止まった。

『ゆ、め、や。』 『夢屋』

ぼくは、心の中でつぶやいた。胸の奥で、なぜか甘酸っぱいものが揺れた。けれど、ここはおばあの家じゃない。ぼくは自分に言い聞かせて、決戦の前のように、心を固くした。ぎよろりは、すでに入り口に立って、ガラスの入った木の格子の引き戸をスルスルと開けて、ぼくに向かって手招きをする。なにがおかしいのか、固くなったぼくを見てにやにやしている。

「さあ、中に入ってごらん。」

ぎよろりに言われて、

ぼくは、あやつり人形のようにぎくしゃくしながら足を運び、息を止めて、敷居をまたい

だ。ほんとうは、目をつぶっていたかったけれど、思い切って目を見開いた。

そして、おったまげた。

『おばあの家だ！』

すっかり見違えたけど、梁も災難よけの火伏せも、赤ん坊だった父さんの泣いたという柱も、見慣れた場所にちゃんとある。

これは、まちがいねえ。

確かにおばあの家だ。

おばあの家は、生まれ変わったんだ。

ぼくのからだは、がくがく震えた。

こみあげてくるものを、歯をくいしばってこらえた。

ぎよろりの前で泣くのは、もう嫌だった。

涙をこらえて天井を見上げると、天窓から明るい光が射し込んで、きらきらとぼくたちの上へ降りてくる。

ぼくの記憶にあるおばあの家の間、じめじめとした暗さが、夢のようだった。

これが、ぎよろりの言う『移築』というもの

なのか。これは、魔法じゃないか。

ぼくは、おそろおそろぎよろりの目を見た。

ぎよろりは、いたずらっ子のような目で、ぼくに、にっと笑いかけた。

ぼくの間でも心も、ふわっと柔らかくなった気がした。ゆつくりと土間を見回すと、カウンターや椅子、テーブルがある。いろいろといろりを囲むベンチが、しつらえられている。喫茶室のようだ。そう言えば、かすかにコーヒーの香りがただよっている。

カウンターや部屋の隅の棚には、みみずくや猫の形をしたカップや皿、ランプなどのいろいろな焼物、布製のコースター、母さんの好きそうな素朴な淡い色合いのランチヨンマトにテーブルセンター、こまごまとしたきれいなものが並んでいる。真っ暗ですすけて、蜘蛛の巣だらけだった屋根裏は、細い竹がびっしりと並べて張ってあり、お月様のようにでかい提灯の淡い光に照らされて、つつましく光っている。黒々とした太い柱や梁が、こ

掲示板

● 「たじみより」 大平建築宿 99」 CD-ROM完成のお知らせ

前号でもお伝えしました通り、岐阜県多治見市在住の横田文孝さんに製作していただきましたCD-ROMが完成しました。横田さんのホームページ「個人新聞“たじみより”」の内容を絞って、私たち同人のメンバーにとっても身近で楽しめる作品になりました。映像も良く、この価格で手にできるのは結構お得ではないかと思えます。

大平建築宿開催中は、現地にてノートパソコンによるデモンストレーションを行う予定です。全部は見せられませんが、興味のある方は覗きに来てください。

販売価格：1000円（限定20枚）

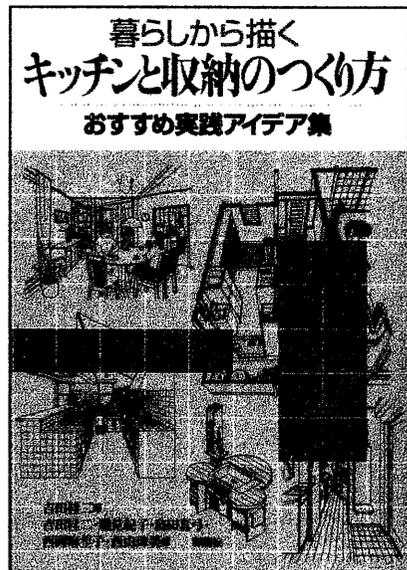


● 同人書籍紹介



『デザイン図鑑』シリーズ第4弾

松本昌義・新井正・木製建具研究会著



『暮らしから描く』シリーズ第3弾

吉田桂二・勝見紀子・島田真弓・
西岡麻里子・西山珠美著

熱帯雨林の集合住宅／原図展

—ボルネオ島、先住民族のロングハウス—

主催：芝浦工業大学建築工学科畑研究室＋栗原宏光（写真家）

日時：1999年9月7日(火)～12日(日)

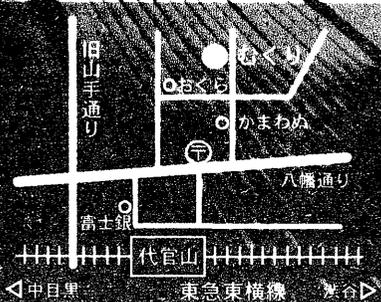
11:00～19:00 (初日 12:00～
最終日 ～17:00)

会場：ギャラリー無垢里

ボルネオ島内陸部に古くから居住してきた先住民族は、その雄大なジャングルの中で生きていくために、一棟に集い住むというかたちをとってきました。

稲作に支えられてきた暮らしや森林に宿ると信じられてきたアニミズム信仰も現在では様相を変えています。今なお人々はルマー・パンジャイ（長い家）に住み続けています。

本展覧会では、現地でのフィールドワークをもとに作成した図面・模型・CGおよび栗原宏光氏による写真などを展示し、社会構造の変化とともに材料や住まい方を変えていきたりながらも現代に生きるロングハウスを紹介すると同時に、集い住むことについて考えてみたいと思います。



問い合わせ：
芝浦工業大学畑研究室 03-5476-3091 (岡田)
090-2247-0407 (藤村)
ギャラリー無垢里 03-5458-6991
渋谷区猿楽町20-4

材木市場の見学会

◆主催

ウッドフェアー
主健 (株)戸田橋木材市場
共健 戸田橋木材市場問屋組合
後援 買方組合親栄会

見学会
主催 初雁木材(有)
生活文化同人

◆内容

戸田橋木材市場の見学・買い付け・意見交換

◆対象

材木店・工務店・設計事務所

◆日時

9月11日(土) 11:00~13:00
集合 11:00

◆場所

見学地 戸田橋木材市場 埼玉県戸田市本町1-23-1
集合場所 JR埼京線戸田公園駅改札

◆プログラム

11:00 戸田公園駅集合
11:10 木材市場注意事項およびプログラム説明
11:10 見学・食事
13:00 解散

◆連絡先

初雁木材(有) 埼玉県朝最市膝折町3-4-40
TEL048-461-0144 FAX048-46-7281
木の建築設計 東京都新宿区大久保3-10-1-606
TEL/FAX03-320-9373

木の建集設計 江原幸彦
〒169-0072 東京都新宿区大久保3-10-1-606
TEL/FAX03-3204-9373

第六回大平建築宿

主催 生活文化同人

共催 歴史環境設計会議

後援 飯田市役所 建築思潮研究所 建築知識 日本ナショナルトラスト

テーマ 『町づくりの詩』

大平では参加者の一人一人が主役です。今年はどうなドラマが展開されることになるのでしょうか。新たな出会いにも期待して、大勢の皆さんの参加をお待ちしております。

8月13日(金)～15日(日) 二泊三日

■プログラムの予定

13日	13:00	現地集合 開宿式 清掃 草刈り
	19:00	ジャズコンサート 懇親会
14日	09:00	基調講演 森まゆみ先生
	11:00	作業 見学会など
	15:00	分科会1
	19:00	懇親会 大人と子供の大平演芸会 ◎飛び入り参加大歓迎
15日	09:00	分科会2
	12:00	閉宿式 解散

●写真展覧会開催

建築宿参加者各自、自信作をお持ちください。作品内容は自由です。投票により優秀作品を決定。豪華表品を用意します。

■分科会

第一分科会 「町づくりと技術者の役割」

レポーター 吉田桂二

サブレポーター 柴田純夫

第二分科会 「模型づくり」

レポーター 寺本雅男

サブレポーター 石引浩子

第三分科会 「母性と建築」

レポーター 豊崎洋子

サブレポーター 高橋愛子

第四分科会 「ピンホール写真」

レポーター 畑 亮

サブレポーター 日影良孝

第五分科会 「自然と遊ぶ」

指導 羽場崎清人

サブレポーター 岡部祐子



■問い合わせ先

〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

岡部材木店 岡部知子

TEL 0429-77-0101 FAX 0429-77-2491

■世話人会報告

(99.07.30 於：飯田橋／もてなし 出席者14名)

1. 大平建築宿の準備について

- ・土砂崩れの為、大平街道が通行止めの可能性があります。参加者は、詳しい状況について各自パンフレットを参照してください。
- ・大平建築宿 CD-ROM 販売、今号にて紹介。
- ・8/7(土) 15:00 より連合設計社にて、大平建築宿プログラム印刷・発送作業。
- ・長野書林に今年も本の販売をお願いする。
- ・写真コンクールを開催。各自自慢の写真を持ちより、投票にて優秀作品を決定。豪華表品を用意します。
- ・第6回大平建築宿プログラムを今号に掲載。

2. 機関誌について

- ・大平建築宿までに発行予定でしたが、間に合いません。できるだけ早く発行します。

3. 『語る会』 9月8日(水) 18:30 より場所：無垢里 予定

■同人活動

- ・吉田桂二『大乘院庭園文化館』が第10回賞賞瓦屋根設計実施例コンクールの景観賞を受賞。
- ・松本昌義・新井正・木製建具研究所—木製建具デザイン図鑑(建築知識別冊)
- ・吉田桂二・勝見紀子・島田真弓・西岡麻里子・西山珠美—暮らしから描くキッチンと収納の作り方(彰国社)
- ・岡部材木—床材ができる現場を見にいこう(confort 建築資料研究社)

■会報編集局より

・次回世話人会 9月24日(金) 18:30 場所：飯田橋／もてなし

*世話人会は開かれた会です、興味のある方は誰でも参加してください。

- ・編集局住所が変わりました。原稿を送ってくださる方は、お間違えのないようお願いします。
- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月20日

◆ 編集後期

- ・グラフィックデザイナーの友人が、わがアトリエの商標デザインをつくってくれました。シンプルなマークの中にいろいろな意味が込められていて、自分たちではなかなか考えつかない提案をしてくれました。施主が私達に求めるのも、こういうことかとふと思いました。大平には家族で参加します。皆さんよろしく。(A)
- ・以前は、甘い感じがして少し敬遠していたいわさきちひろさんの絵。けれど子どもを持ってからは見方が変わりました。先日練馬にある美術館を訪ね、一度にたくさんのちひろさんの絵に出会いました。訴えかけるようなまっすぐな瞳、一生懸命な指の動き、かわいらしい足の仕草、ひとつひとつを我が子に重ねあわせていました。ちひろさんの絵は親にそんな思いを抱かせる絵なのです。(K)

会報編集局：〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

アトリエ・ヌック 新井 聡/勝見 紀子



99年度事務局：〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-10-1-606 Tel/Fax 03-3204-9373
生活文化同人事務局 木の建築設計 江原幸老

生活文化

生活文化同人会報 1999 (平成11) 年10月号 №39

	目次・次回定例会案内	01
Ⓜ	第6回大平建築塾を終えて	02
	木材市場見学会の報告／江原幸杏	09
	夢屋ものがたり 最終回	10
Ⓜ	リレー連載 「日本の」川物語／島田真弓	12
	初秋に訪れても播州／岸未希亜	14
	同人紹介／小川耕太郎・百合子	18
Ⓜ	掲示板	23
	世話人会報告・事務局より	24

10月の定例会

小町和義氏講演

「自分にとっての先生二人」
—山口文象と平松義彦—

日時 10月21日(水) 18:30~
 場所 池袋東京芸術劇場小会議室7
 講師 小町 和義 (番匠設計主宰)
 聞き手 吉田 桂二

「数寄屋民家」を実践されている小町さんが、戦中・戦後の激動する社会で、何を考え、どのような建築を志されたのか。その時代に強い影響を受けた二人の先生についてお話しいたします。



▲昭和8年の高尾山薬王院客殿上棟記念／左端の少年が小町和義氏 写真・小町和義提供

— 第6回大平建築塾を終えて —

今年も、参加された皆さんの感想や思い、又運営上の問題点へのご指摘などをお寄せ頂きました。事務局として次回からの大平建築宿運営の参考とさせていただきます。ご協力ありがとうございました。



第6回大平建築宿に参加して

今回の大平宿は雨でした。行く前に土砂崩れの情報があり、当日倒木により通行止め。初日の午後過ぎに降り始めてから、あとはずっと雨。とはいえそう土砂降りでもなく、走ってごまかせる程度。去年も正体不明だった黄色い花が一面にさきほこり、いい季節には違いありません。

こけら落としはジャズ・コンサート。民家にジャズ。これが実に心地よいのは、演奏を楽しもうとするこの音楽の性格か、木と土が音を柔らかく受け止めるからか、炎と電球の赤い光が心をなごませるのか。全部でしょうか。何か、白い蛍光灯の下で硬い壁に向かう生活は、安らぎと反対向きとしか思えません。

一息ついて飲んだくれ、2日目の朝を迎えます。森先生の基調講演。そして分科会。今年のテーマであるまちづくりのためには、そこに住む人がその町を愛することが大事と再認識します。

たき火での食事や、風呂に入った後、集合時間が近いのにまったりしていると、いつのまにか集合が30分延び、気がつくともう30分延びている。やはり皆まったりしていたいのか時間もおおらかです。

達者な方々の芸の席で再び飲んだくれ。大変失礼しました。

昨年について2度目の参加です。益に田舎に帰らなくなりました。建築宿を企画、運営して下さったスタッフの方々に感謝いたします。ほんとにありがとうございました。

以上

泉市啓一

基調講演の様子



建築宿に参加させていただき、学校では学べない、そして今の生活からは想像できない良くも悪くも違う生活を体験できた事がいい経験になったと思います。

私は「大蔵屋」で泊まらせていただきましたが、とにかく広いと感じたのを覚えています。現在のハウスメーカーによる住宅や現在住んでいる家からは感じられない広さが昔にはあった。では、なぜないのかという問題にぶつかります。なんでも発展ということを考えれば、住宅も室内空間も充実が見られてもいいのではないだろうかと考えさせられました。これも戦後からの欧米型住宅が上手くいかず一般に広がらないのでしょうか。襖や障子の力のスゴさを感じました。

また、道の直線と同じように平入の屋根の家が並んでいる、この美しさに魅かれ美しいと思いました。これが町並みを美しく見せる基本形なのかと思ったのですが安直すぎでしょうか。

武田 和史

大平建築塾への参加は今回が初めてだった。

吉田桂二先生にこの建築塾のことを紹介していただき、私の興味を持った。

ある村の繁栄、衰退、そして復活。時代の影響をじかに受けながらも、そのまま終わらなかったというところがすばらしい。

実際に3日間大平で過ごして一皆さんと清掃をし、薪を割り、風呂を沸かし、囲炉裏を囲んで語り合っていると、本当に大平は復活したのだと確信できた。テレビもなく電灯も最小限。だから同じ火を見ながら皆で語らうことができたのだと思う。

今後も、この囲炉裏の火を絶やしたくないと思った。

菅原 愛夏



木こり体験の様子

初めて参加させて頂きました。現在のほりぼて建築、ゴキブリハウスの多い中で、吉田先生のお話し、又宿で体験する人間生活の基本（食・生・会話）から何か蘇った思いがしました。来年は家族揃って参加させて頂きたいと思います。

人生の後半は伝統的建築、又その精神を学んだ現代建築、又町並み保存、修景の仕事、又NPOにかかわっていかうと思います。

山本 和明

今回はじめて大平建築塾に参加させて頂いて素直な感想は、色々な人と話しが出来、いつもの時間の流れとは全く違った空間の中で、プリミティブな生活を楽しめた事が、自分にとってなつかしさのようなものを感じました。

自然の中という事もあって、雨には少し止んでくれよと思いましたが、帰り際になって雨もよかったと思わせてくれる建築塾に、そして集まって来た人たちの人間の面白さに感動しました。

1日目は、JAZZで最初は先入観からか、民家の中でどんなライブになるのかと興味津々でしたが、はじまってみるとすごく楽しかったです。

2日目に僕は、第4分科会のピンホール写真をやったのですが、手づくりの写真は時間をかけただけあって何か撮り終えた後に自分を写されちゃったかなと思わせられてしまいました。写真の奥深さを少し感じました。

そして、懇親会では、いろいろな人たちの芸達者ぶりに圧倒され、次に来る時には自分も何かやりたいなと思案中です。

最後に、スタッフの皆さんと大平の自然に感謝したいと思います。



向 聡

第1分科会の様子

実際に民家に2日間住んでみると、観光で見るとの違いとても面白かったです。特に床をみがく木目の表情がくっきりみえ年輪や木目もみえるので、この地区の木の育ち方なども想像でき面白かったです。(家具の木目もきれいで表情があり木の良さを改めて感じました。)

また、入るとすぐにいろりや台所があり人と人とのコミュニケーションの近さがわかりおもしろかったです。

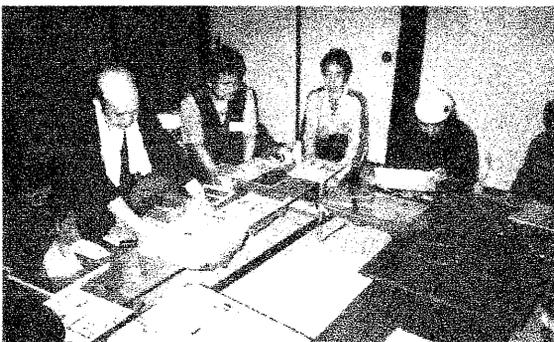
また、火をかこみ座というスペースをもつという時間がある生活にも興味ともしました。家のまわりに生える雑草も私達の住む尾鷲と異なり、あまり伸びていないことにおどろきました。私達の地区は暑く、雨量が多いのですぐに草が伸び家をおおってしまい湿気もすごいので草刈をこまめにしないと…。

川の近くののにあれだけの床高で済むのも湿気が少ないのかなと思いました。ちょっと住んでみると、いろいろな気候がみえて面白かったです。

建築のことは全くわかりませんが、次回は模型をつくる分科会を体験したいです。

小川百合子

第2分科会の様子



建具に蜜蝋を塗る小川さん



◆ 民家での宿泊は快適でしたか？

◆ 水道屋

- ・ こじんまりとしていて良い所でした。
- ・ 快適ではないが、民家なりの良さが少し分かった気がします。
- ・ とても快適でした。(3名)
- ・ 薪で料理をしたり、風呂をたいたりするのは、おもしろい体験でした。
- ・ 快適でしたが、足が虫を踏む事が多かったのが少し嫌でした。
- ・ 快適でも不快でもなかったです。

◆ からまつ屋

- ・ 快適でした。(7名)

◆ 満寿屋

- ・ 快適でした。

◆ 深見荘

- ・ 自然の中の宿泊としては、まあ快適でした。
- ・ 快適でした。(2名)
- ・ 思っていたより快適でした。浴室がタイル貼りで、空間的に今と変わらなく感じ。自然に火炉の廻りに集まって話していると初対面でも、とても居心地の良い空間でした。

◆ おおくら屋

- ・ 楽しかったです。(2名)
- ・ 快適でした。雨の上遷刻をして、掃除・草刈等十分に出来なく残念でした。
- ・ 良かったのですがトイレが不快でした。
- ・ まわりがよく、子供もいて楽しい雰囲気でした。

◆ 大蔵屋

- ・ お手洗の「カキ」がかからずヒヤヒヤしたが木の家はとても暖かで火での生活も快適。
- ・ 心地良かったが長い間住む事になると快適と思えなくなると思いました。
- ・ 気候と家のつくりの団体の為、8月と思えば涼しかった。また火の火電が家の土への伝わりで部屋中がけむりするぐらいの湿度に感じた。
- ・ まあまあでした。

No. 2.

◆ 炊事及び食事はどうでしたか？

◆ 水道屋

- ・ 火やかまどの体験がとても良かったです。
- ・ 意外と早く出来たのではないかと思います。
- ・ 楽しかったです(2名)
- ・ カレーがとてもおいしかったです。家でも作りカレーを作ってみようと思います。
- ・ 楽しかったです。1日ほとんど食事作りと後片付けをしていた気がします。
- ・ 炊事8分 仕事2分でした。

◆ からまつ屋

- ・ 最高点 とても良く出来ました。美味しかったです。(4名)
- ・ 大変良かったです特に白いご飯がおいしかったです。
- ・ 食事担当がしっかりしていたので時間もスムーズにいった良かったです。

◆ 満寿屋

- ・ 火を囲んで楽しい食事が出来ました。

◆ 深見荘

- ・ 火の傍の方が食べる毎に暖かかった感じで順口においしく出来ました。
- ・ メンバーが良く満足。ただ「お茶カシモジ」など用意しておけば良かったと思いました。
- ・ 食材が余ってしまい残念でした。我が家は、夕方のシブ女シブ女に思わぬ充実しました。
- ・ 分担を決めたわけでもないのに自動的に重荷がスムーズに事が進みました。食材の量の夕方にちょうど良かったです。車で来た人が1人いたので全部持って帰ってもらう食事が、電車バス組だけだったらどうだったかと思いました。

◆ おおくら屋

- ・ とてもおいしかったです。一番カレーが良かったです。(3名)
- ・ 作り方などの準備がよくなっていたので手早くおいしく楽しめました。
- ・ 2回目の屋はもの足りなかった、肉は魚がもう少しあっても良かった。

◆ 大蔵尾

- ・量的な問題と火の具合でかなり手間取り付いたが味はどれも文句無しでした。
- ・おいしかった。いつもながら炊事は大変でした。
- ・今の炊事との違い、時間が大変かかる事を感じた。しかし便利にはなった今だが、火をおこす事の楽しさも失った事が残念に思いました。
- ・お茶を討るカマコがなかつたので大失敗しました。

◆ 「炉ばた ジャズライブ」はいかがでしたか。

- ・雰囲気の変ったジャズライブで良かったです。
- ・初めてのジャズライブであったので感重かったです。民家でジャズライブという意外性も良かった。
- ・最高でした。(4名)
- ・民家でジャズがこんな風に合うとは意外で良かったです。
- ・ゼロのジャズ演奏を初めて聞きました。こんな機会でもなければ「聞く事は無かった」と思います。よかったです。分かりますがこれも感動はジャズにはアリでしょう。
- ・生で聴いたのは初めてで感重かったです。
- ・ビに響いたスティールドラムが良かったです。
- ・ソニー・コロンス、セイトマスが盛り上げて楽しかったです。
- ・毎回素晴らしい企画に感激です。
- ・いかがでしたでしょうか？楽しんで頂けたら嬉しいのですが。(VO.奥子様)
- ・すばらしかった。建物と照明と人との雰囲気、音楽にとっても良く溶け合っていました。
- ・臨場感、ある感じで楽しかったです。
- ・もう一回聴きたい。
- ・お楽しみしました。
- ・とても贅沢な時間でした。(2名) ・みんなすごいと思った。
- ・音楽好きなので最高でした。 ・いみが分からなかった。
- ・非常に良かったです。関係者の皆さんありがとうございます。
- ・予想外の下りな演奏で、もう一曲ぐらい聴きたかったです。
- ・民家の中での演奏は素敵でした。

No.4

- ・子供がいたので途中で失礼してしまいました。良かったです。
- ・ジャズの大人さに感重かったです。すばらしい音楽だと思っただけに、よかったです。
- ・最高でした。もっと聴きたかった。特に内藤さんがリクエストした「ア・マリア」が良かった。
- ・音の響きが良い感じがしたのは、気のせいでしょうか？

◆ 参加してあもしろかった企画は？

- ・森さんの話が良かったです。もと時間をとって頂ければ「良かったです」。(2名)
- ・「炉ばた ジャズライブ」 (7名)
- ・全体 (3名)
- ・センポールカラを作った。短い時間で写真を作ったので感重かったです。
- ・センポールカラ及び懇新会のパフォーマンス。
- ・大平に参加している自分自身。
- ・すみよし温泉に行っていました。本当はセンポール写真に参加したかったのですが子供に負けました。
- ・ジャズライブと、和太鼓
- ・ジャズライブと 2日目の演奏会
- ・都庁でやったクイズ大会とジャズライブ
- ・模様の分科会で分かりやすく楽しい。また御土産が出来て感激でした。
- ・ジャズライブ、懇心会、森さんの講演、原生林見学。
- ・ジャズライブ、原生林見学。
- ・きりり体験、雨で残念でした、もとやりました (2名)
- ・劇です。(2名)
- ・ジャズライブ → 大人の世界に一步踏み込む。
- ・お酒を飲んでみんなと話が出来る時が一番良い!!

◆ 次回さかう企画をやってほしいというのがあれば書いて下さい。

- 火おぼた ショーンソン。
- オーケストラ。
- ぜひ、又 ライブを!!
- 昔の生活に見る循環型の社会を知りたいと思います。縄文時代などからめて土器づくり火おこし体験等。
- あまり民家ではやらないような事をやってほしい。
- 分科会の一つに大工グループを中心に直し方教室。道具を使えなくてもワギを推したりして見てもらうだけでも良いような。
- また、ライブ企画して楽しんで下さいね。(V.O. 奥子さん)
- 分科会の一つに建築に携わる基本的な職人さんのグループがあって1つの建物を造りあげて話しや実演を修復を兼ねて作業をしてみたい。
- 難しいかもいれませんが「大工の見習い」
- 他の家の方との交流、もう少しそれぞれの人となりを知りたい。
- 雨が降ったので残念でしたが建物とふれ合う機会がほしかったです。建物の説明、どのようにして保存に至って、どのような保存活動、方法等次前にヤルバウトでもあれば散歩しながらゆっくり見る事が出来たと思います。
- 竹をいきて、明月りやおたき等をつくる。
- 今回、大平塾ツアーが出来なかつたので次回はいろいろ歩きたいです。
- 大平の夜に音楽はかかせたいと思います。リズムを楽しむ企画は来年もぜひ。
- 雨が降った時の企画を予定した方が良いと思います。
- 分科会の後ミーティングがあると良いと思います。

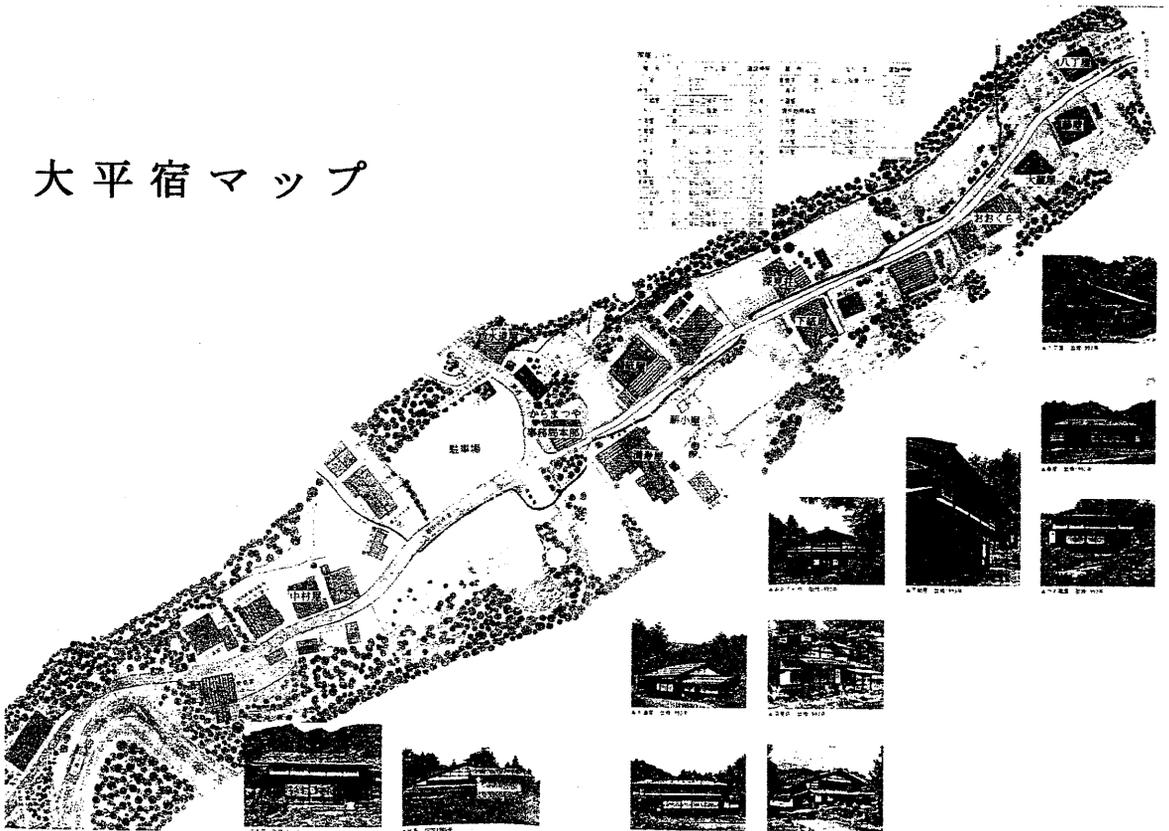
No. 6.

◆ 参加して感じたこと、反省点、次回への要望等何でも書いて下さい。

- 今度の企画が出来ようになるときます。熊川のスライドを見たかったです。
- 食糧の量が多すぎたりリリリなすぎたりした食事を考えた方がいいと思います。
- 出来る限り参加し続けていきたい。
- 次の日の事を考えすぎて、なかなか総心会では抜けられなかった。
- もっと積極的に、だれものなどやりました。(2名)
- 自分がもっと建築について知識があったらもう少し違った楽しみ方が出来たと思う。
- 3日間雨が降ったのが残念でしたが、いろいろな人と話をする事が大きな財産でした。
- 大平の建築塾は全員村寄に参加だと思えます。炊事、食事の得意な人そうでもない人もいます。大平な仕事の一つ、普般台所に立たない人も人子かせではなく、一緒にやってみようと思えました。
- とにかく、ほかなな泊まれない所に泊まれて大変おもしろい経験させて頂きました。ちびと子供が少なくて色々出来ない事が多かったのですが、その辺をあおむに見て下さいば又、参加したいと思えます。
- 今回はライブスタッフというだけの参加でしたがおねえさんの楽しい経験をさせて頂き感謝しています。
- 車3台が遅くおとししい御迷惑かけましたので、交通は余裕をもって来たいと思えました。
- 体調が悪く分科会に参加出来なかつた事が残念でした。
- 初めて参加した方にも分かりやすく、対等に作業しやすい大平での生活づくりのテーマを考えたいと思えました。
- 次回は全出席したいです。
- 障子の張りかえや、草刈、手直しが、天候のせいでありませんか出来なかつた事が残念です。
- 食料の量を減らす。プログラムだと3日目の午前中も分科会になっていたので話し合いをもう少し話し合いたいと思えました。せっかくの三日なので少し分科会最後のまとめ等を充実させてほしいです。
- トイレが二つあった(2名)
- 雨が降ったのでその分違ったものを味わえた気がします。
- オタマやミヤモジが多く不便しました。

- 建築関係のフロアがたぐさぐさいっしょって、それぞれがんばって、各事に驚かされた。利益は別ではなく、お食の家づくりを目指して、なんとかがまじりました。
- 雨天時の企画を予定しておいた方が、良いと思える。
- 初めの参加者にいろいろと説明が、まじった。
- コンフレットが無かったのが残念でした。

大平宿マップ



□木材市場見学会の報告

報告 江原 幸壱

前回の会報で告知した「木材市場見学会」が、天気にも恵まれ、予定通り行われました。同人の会報による呼びかけにも関わらず、いつもの面々とは違い初対面の方々ばかり約30名に参加していただきました。

今回見学した戸田橋市場は、木材市売市場または木材製品市場と呼ばれ、町場の材木屋や工務店が買い付けにくるところです。ある程度まとまった量を買付けます。この他に木材センターというのがあり、少量の仕入れや急いでいる場合に利用するそうです。

どの木材市場も記念市が定期的に関われ、普段より品揃えが豊富で、価格も低めで取引しているそうです。今回の「ウッドフェア」は半年に1回の大きな市でした。大断面の構造材から、滅多に見ることのない床柱や天然杉の天井板までが揃っていました。予め、見学の趣旨も説明していたこともあり、それぞれの売場で製品の特徴や流通の話丁寧説明してもらいました。

今回の見学会は木材市場関係者からのお誘いがあり実現しました。かつては、木材価格の卸値がわかってしまうので、材木屋以外の立ち入りを制限していました。しかし、昨今の国産材需要低迷が木材流通関係者にとって死活問題になり、木材市場のあり方の方向転換が迫られ、徐々に開放されるようになってきています。他の木材市場では既にエンドユーザーにも開放しているので、戸田橋市場でもエンドユーザーを招くための準備を検討しています。また、性能規定化を視野に入れた戦略についても詳しく伺ってきました。

見学を終え、軽く打ち上げをして、設計事務所、役所関係、学生のそれぞれの立場からの意見を伺いました。やはり、性能規定化におけるいえづくりや林業の行く末に関心が集まりました。性能表示の内容はまだ確定していませんが、多くの設計者が指摘するように性能はいえづくりの一部の要素であり、それがいえづくりにとってのマイナス要因にならないように警戒する必要があるという意見がありました。林業の面では、性能規定化になると集成材が圧倒的に有利になり、また、町場工務店の減少に拍車がかかり、国産材の需要はさらに衰退するだろうという見方もあります。

アンケートでは木材市場関係者との意見交換会の参加希望者が多かったので、今後そのような場を設けようと考えております。その時はより多くの参加者を期待しています。国産材需要拡大のアイデアがありましたら、いつでもご提案ください。

夢屋

ものがたり 最終回

大庭 桂

そして、いましがたまで女の人が座って、パツタン、カラン、パツタン、カランと織りものをしていた、珍しい高機たかばたに目をやった。その瞬間、ぼくは息をのんだ。その機にかけられている糸の色。それはおばあがいつも座っていたざぶとんと同じ、あの青だった。ぼくは、思わず「おばあ。」と呼んだ。がまんしていた涙が、一粒、ぼろんと目からこぼれた。

いつの間にか、さつきまで抱かれていた小さな女の子がぼくの前に来て

「さつきちゃん」

と言って、ちいさなちいさな白い手をさした。ぼくはあわてて手を出すと、女の子のさしだした手を握りかえた。

「さあ、どうぞお上がりなさいな。」

あなたも、父さんも」

すめられるまま、ぎよろりとひよろりとぼくは、あわただしく板張りの部屋に上がり込んで掘りこたつのまわりに座った。

「おなかですいてるでしょ。すぐに『夢屋』特製のカレーとピタサンドをもってきますからね」

「ああ、いいねえ。おまえのカレーはインド仕込みだからなあ」

ぎよろりが、にこにこしながらうれしそうに言った。そして、ひよろりに向かって

「きみらがインドで出会わなかったら、この夢屋もないわけだ」

と言いながら、たぼこに火をつけた。ぼくは胸に満ちた何かにせき立てられるように、思いついて声を出した。声がかすれそうだ。

「おじさん」

「なんだい？坊や」

ぼくは、ぎよろりの目をまっすぐに見つめた。「夢屋は、おじさんの魔法だね。」

ぼる屋を移築して、生まれ変わらせる魔法言葉は、おなかの底から一気にあふれてきた。

「そうか」

一瞬だけ、ぎよろりの目が満足そうに光った。「ぼくも魔法が使えるような人になれるかな」

「なりたいか？」

ぎよろりは、じつとぼくを見つめた。

ぼくは、『ん』と深くうなづいた。

「じゃ、なれるさ」

ぎよろりはそう言うと、またうまそうにたばこを吸い始めた。

(了)

「もし、あの時に・・・」

私は、「もし」ということばを、後悔しながら使うことのないよう、心がけている気がします。「もし」ということばは、過去のある瞬間の評価を自分に問うものだからです。

けれど、よくよく考えてみると、人生というものは「もし」という瞬間の積み重ねである、と言えるかもしれません。

もし、私の友だちが、吉田桂二先生に自宅とお店の設計をお願いしなかったら・・・もし、その家の上棟祭に行かなかったら・・・桂二先生にお目にかかることもなかったでしょう。そして、御著書をひもとくことも、講演を拝聴することもなく、住宅建築に載せられた益子さんの『夢屋』の原稿を拝見することもなかったでしょう。

これらの「もし、あの時に・・・」が無かったなら、『夢屋』と桂二先生や生活文化の方々のことを書いてみたい」という私が生まれて初めて味わった衝動は、起こらなかった、と断言することができます。

それはつまり、「もし」生活文化のことを知らなければ、『夢屋ものがたり』は生まれることなく、私は、「書く」という喜びを一生知らずにいたということです。

私の胸に、今までめぐり会ったおびただしい「もし」への感謝が、あとからあとから湧いてまいります。その感謝が知らず知らず「今」を見つめる私のまなざしとして実感される時、ほんとうに私は幸福だと思えるのです。

最後になりましたが、見ず知らずの私に『夢屋』や生活文化同人のことを書くことをお許しいただいたこと、また生活文化の会報にまで連載していただいたこと、佐藤さまが美しい挿絵を描いて下さいましたこと、すべて、私には分に過ぎたことと、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。振り返れば、たくさんの幸せな「もし」が重なって、初めて書かせていただいた『夢屋ものがたり』。

つたないものではありませんが、このものがたりを、自然を愛し、皆と生きてゆくことを愛しておられる桂二先生と、生活文化の皆さま、そして『夢屋』を愛する皆さまに捧げたいと思います。

風にゆれる曼珠沙華を見ながら

日本の・・・

島田真弓

相模鉄道

川物語

横浜 帷子川の支流たち

陣ヶ下溪谷

99年 夏 暑く、雨がよく降りました。

蛭もよく舞いました。

吹き出る汗に茹だりつつ、時折抜ける風で目の奥がスキッと、ぼやけてた風景が濃い緑陰をともなって見えてきます。

「明け方は冷えるから、寝るときには窓を閉めようね」と交わされる挨拶も、川のほとりの暮らしを映し出します。

川への想いが集まり、“風致公園”として結ばれることになりました。

昔、この川でウナギを捕まえたという、草笛を吹き鳴らす爺さまがいます。

こどもたちも競って草笛を手にし、頬を膨らませますが、曲になるのはもう少しのようです。

遊びつきない森の宝物を披露する姿に、いつか森が広がっていく期待を重ねています。

今年、暴れ川になってしまった川があります。

いつもは水たまりが連なっているような小さな川に、雨水があふれました。

これを見越して巨額な税金を投入し、巨大な分水路を作ったはずなのに、なぜ水浸し？

これまで暴れ川だった支川にも、その地下に巨大な遊水池が工事中。

ここに地震が起きたら、『十戒』のあの場面が出現・・・なんて映画の中だけのこと？

都市洪水への大がかりな対策が、災害の拡大を招かないことを願います。

緑豊かな街に暮らしたいと願う人が増えてきました。森と川はあります。

森に手を入れてさらに広げ、地下水の涵養をはかりわずかでも自分たちの街づくりが進んでいます。

私も、ただ今“山仕事”見習い中です。

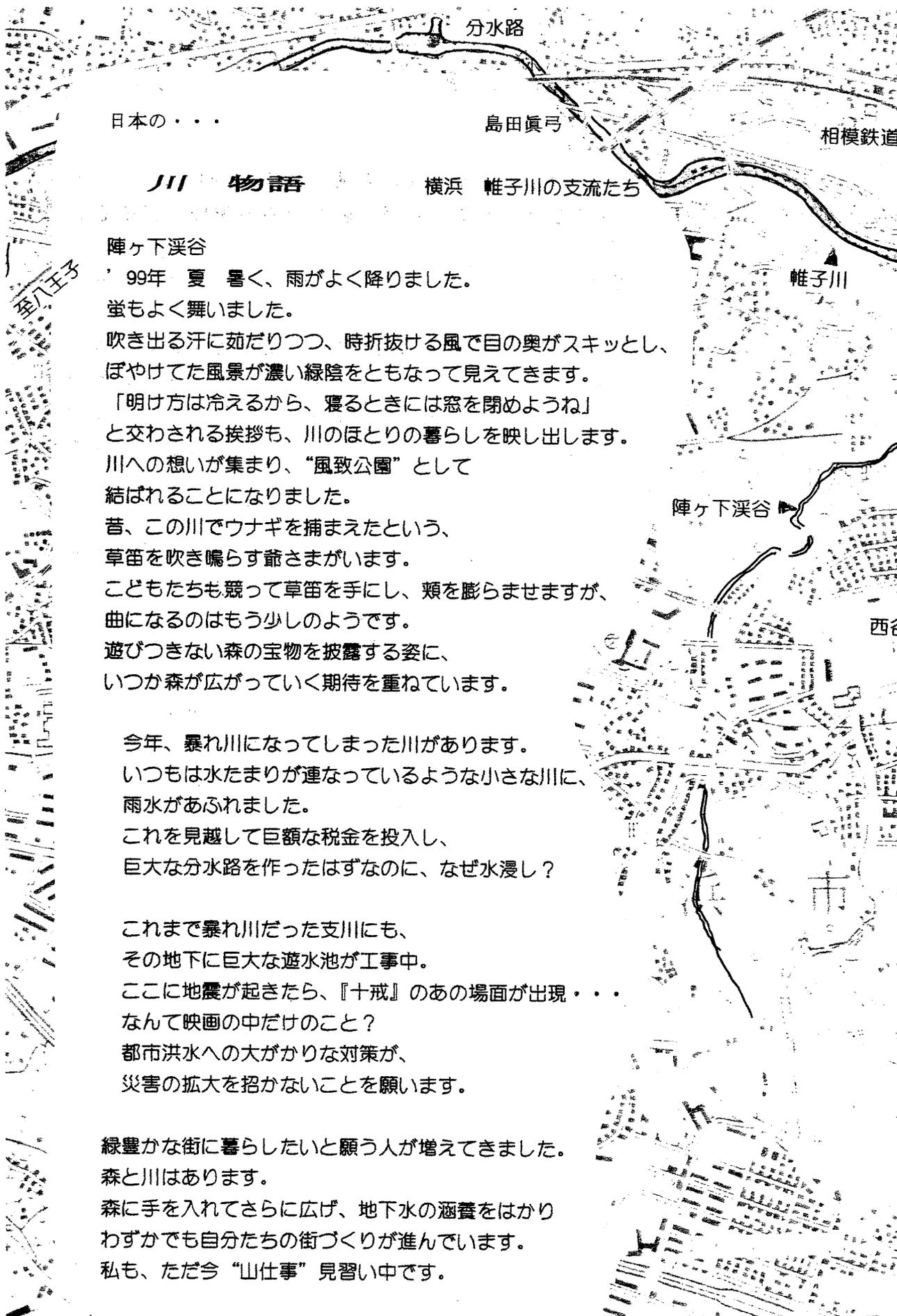
至八王子

分水路

帷子川

陣ヶ下溪谷

西谷



R16号線



陣ヶ下溪谷を縁取る住宅地

帷子川は都市河川



陣ヶ下溪谷



地層—大地からのメッセージ



五横浜



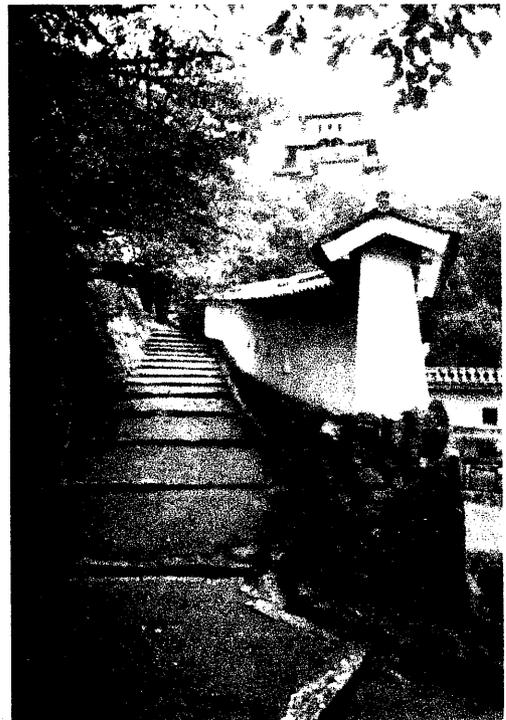
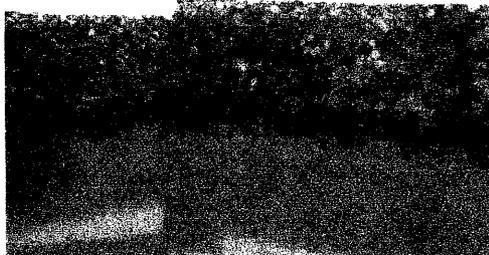
急速に崩れ始めている植林地

次回は綾部孝司さんです。
お楽しみに

独り旅をするのは久しぶりのことですが、今回は厳しい日程の中で播州の民家・町並みを見て来ましたので、紹介させていただきます。

新幹線で姫路駅を通過する時に車窓から見える「お城」に、私の目はいつも惹きつけられます。小学校6年生の時に初めて訪れてから3度目となった今回は、撮影を主な目的に勝手知ったる城郭を自在に歩きました。姫路城は幾つかの別称をもち、白鷺城としても有名です。国内に残る11の現存天守閣の1つで、4つしかない国宝天守閣（他は松本城、犬山城、彦根城）の1つでもあり、今では世界文化遺産として国内外の多くの人々が訪れています。

姫路城は家臣の屋敷跡（三の丸）こそ広場になっていますが、西の丸、二の丸から天守のある本丸へと向かう道程は、往時を偲ばせるような佇まいを残しています。化粧櫓などの櫓27棟、門15棟、土塀1000mが重要文化財に指定されており、連立式天守を構成する大天守と3つの小天守は国宝です。こうした遺構の多さに加えて城の縄張りが原形を良く留めていることが、姫路城を日本一たらしめているのでしょう。大天守へ攻め入るような感覚を味わいながら、急な石段を登ったり背丈ほどの門を潜るのはとても楽しいものです。

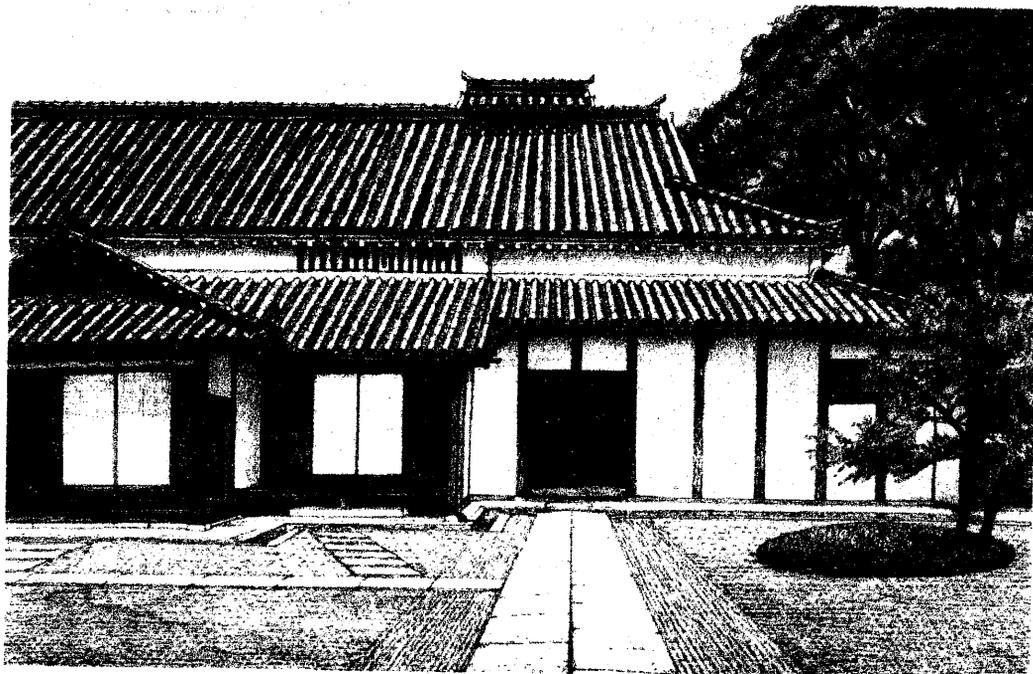


揖保川のほとりに広がる穀倉地帯に、永富家という重要文化財民家があります。周辺には今では住宅も建っていますが、水田の残る静かな環境が保たれていました。永富家は大地主で庄屋を兼ねており、藩にお金を融通したり年貢積み出しを請け負うなどして龍野藩から在郷家臣という破格の厚遇を受けたため、桁行 13 間、梁間 9 間、建物の面積 152 坪という主屋があり、当初の敷地 963 坪という壮大な屋敷構えをしていたそうです。

長屋門を潜って先ず目に入るのは、入母屋造本瓦葺の屋根と漆喰壁の美しいコントラストと、主屋正面にある三つの入り口です。左から玄関、中玄関、大戸口と並んだこの玄関構えは格式の表れで、式台のある玄関からは殿様（龍野藩主）、中玄関からは主人と身分ある客、家族や使用人などは大戸口を利用しました。近世上流住宅においてはこうした書院造りの要素が支配的で、似た形式の住宅も多く見られますが、江戸時代後期に完成した永富家は、規模も大きく玄関構えも秀逸です。また鹿島建設（鹿島）前会長の鹿島守之助の生家であることから系列会社が所有・管理しており、一般に公開しています。

所在地：兵庫県揖保郡揖保川町新在家（山陽本線竜野駅より約 2 km）

【見学 10：00～16：00 月曜休（祝日の場合は翌日）、年末年始】



画：吉田桂二

室津という場所はガイドブックに全くと言って良いほど載っておらず、交通の便も極めて悪い場所です。現在の室津を訪れてみると、小ぢんまりとした港に多くの漁船が所狭しと係留されています。この光景を目の当たりにすると、「室津」の歴史は漁村としての歴史かと勘違いしてしまいそうなのですが、この良港はかつて海の宿場として大いに繁栄しました。

瀬戸内海は古代より海上輸送が盛んで陸路（山陽路）よりもこちらがメインルートでした。江戸時代の参勤交替制に伴い、西国の大名たちは瀬戸内海航路で往復したのですが、航行の難所である明石海峡や鳴門海峡を避けて陸路に切替える場所がこの室津だったのです。したがってほとんどの西国の大名が室津に立ち寄ったため、狭い町の中に本陣が6軒もあったそうですが、今は全て取り壊されてしまいました。本陣に限らず、旧態を留めている民家は僅かしかないのですが、港町らしい非常に狭い道が馬蹄形に湾の周囲を巡り、海側の家では裏側（海側）が港に面して開放的なスペースになっていて好ましい印象を受けました。また、崖の上からは狭い町全体が一望でき、遠く瀬戸内海に浮かぶ島々も見られて絶景でした。



室津の町並み

因幡（鳥取県東部）と播磨（兵庫県西部）を結ぶ道を因幡街道と呼びます。平福は城下町としてつくられながら僅か 30 年で城下町としての用を終え、その後因幡街道随一の宿場として発展しました。街道沿いには旧態をよく残した民家も多く、南北 1.2 キロにわたって比較的まとまった町並みを形成しています。

一方でこの地は物資輸送の中継点としても賑わい、その痕跡が町並みの裏側である佐用川に面して見られます。川を背にした側の家々と川の間には、一段低くなった歩くことのできる護岸があり、各家から直に降りられるような石段と川の中へ降りられる石段が残っているのです。その中でも特に絵になる一角は、川岸のゴロタ石を積んだ石垣の上に建ち並ぶ土蔵群です。下塗りである黄土色の土壁と、妻側・平側が混在した変化に富んだスカイラインが風情のある景観をつくっていました。水面に姿を映した風景がまた美しいそうなのですが、前日までの大雨で流れの早くなった川面はそれを許してくれませんでした。

以上、東京から一日半で回った
慌ただしい旅でした。



平福の土蔵群



100%天然素材
 ＊＊＊＊＊＊
 材木屋と
 ハチミツ職人が
 作った
 未晒し蜜ロウワックス

和歌山産未晒し蜜ロウワックスと国産純正一番絞り
 荳ゴマ油だけで作った木材用蜜ロウワックス。

ワックスの濃度を3タイプ揃えました。

用途やお好みの仕上がりが選べます。

また、塗りむら等出来ませんので

施主様でも簡単にメンテナンスが出来ます。

製造過程にも化学薬品等使っておりませんので

環境に負担をかけません。

小川耕太郎∞百合子

● 蜜ロウワックスに興味を持ったきっかけ ●

私 に、7年前に三重県尾鷲市にUターンをして家業の製材所を手伝っておりました。
 3年前に、妻の父の関係で“日本環境地方議員の会”の視察で、三重県の紀和町で内装が木で作った小学校の校舎にいきました。この地区はヒノキの産地なので、内装はヒノキを使い、玄関に入ると太い丸太がドーンと立っておりまして。ところが、塗装が化学物質を使っているため、新築独特の木の香りが全くなく、ツツンした臭いが強烈で、見学者の中の京都の市議員の方は頭が痛くなり外へ出てしまいました。せっかく公共事業で木を使っているのに、木本来の良さを殺しているように思え残念に思いました。

吉 田先生の書かれた本の中で“床は蜜ロウ仕上げで”というコメントがあり、その本を読んだ事がきっかけで蜜ロウという素材に興味を持ち始めました。しかし、そのころの私は家業の製材の仕事で手一杯で現実的に仕事として自然塗料仕上げをどのように取り入れるかという行動までは発展していませんでした。

● 市販の蜜ロウワックスを使って 出た問題点 ●

- 安全性** 赤ちゃんがハイハイしても、なめて大丈夫と書いてあるのに「手荒れが酷い方は手袋をして下さい。」と書かれておりました。(自然塗料でも荒れる方はいます)万が一、口の中にいれても良い原料の選択が必要では？と思いました。
- 原料** 蜜ロウワックスに含まれる原料のについての説明を、素人でも理解できる説明が必要ではないかと思いました。
- 作業効率** 内装材工場で使いたいと思っておりましたので、塗り安さや伸びの良さが重要でした。いくら良いものでも塗りにくかったりすると作業工賃が高くなってしまい結果的に高価になってしまうのでは・・・と思いました。
- メンテナンス** 施主様が簡単にメンテナンスできる使いやすさや塗りむらが出来ないという点。

○ 尾鷲ヒノキ
○ 内装材加工協同組合の設立
 内装材加工工場を作ろう！という動きがありまして。早速、組合を設立し、私はアドバイザーという役職につきました。そのときに尾鷲材のプロローグは自然塗料仕上げのモノを販売したい！と提案しました。そして柿渋やドイツ製の蜜ロウワックスを取り寄せ、木片に塗り試していました。
 試していくなかでいくつかの問題点が浮上してきました。

自分達で蜜ロウワックスを試作してみた。

左記に挙げた4つの問題点が出てきました。特に自然塗料仕上げをお求めになる消費者は“安全性についてのわかりやすい説明”が必要になるかと思えます。

話しは変わりますが、食品業界では90年代になって遺伝子組み替え食品の需要が伸びておりました。しかし、ここ半年でEUを初め、日本でも需要が伸びていないそうです。スーパージャスコの自社ブランド商品でも豆腐や味噌に対し遺伝子組み替え商品に対する表示が明確になっております。



それに比べ塗料部門は、自然素材というだけでどういった行程で製造されたか明確なコメントがありません。現在、国産材の需要は落ちる一方です。しかし、シックハウス症候群が話題になってから住宅にもそういった安全性に対する興味が高まっております。尾鷲材のフローリングを販売する時に「どのように製造された蜜ロウワックスでフローリング仕上げをしたのか」というコメントが販売にあたってのセールストークになります。また、コストの面でも一般の施主様が手に届く価格でないと一部の方だけの商品になってしまいます。その為には、作業効率という点も重要なポイントとです。

「だったら“材木屋が作った”という視点でワックスを試作してみよう！」と思い、養蜂家の方に相談しました。養蜂家の中村氏はとても研究熱心な方で、独学でいろいろな研究をしている方です。中村氏と一緒にワックスに関しての書籍や大工さんや工芸職人にお話を聞きにいらしていろいろ調べました。

蜜ロウを乳化するために使う乾燥油は

“純正一番絞り荏ゴマ油”を！

乳 化状態のワックスを作るためには、蜜ロウと乾性油を混ぜなくてはなりません。ワックスの場合、一般に亜麻仁油と混合させることが多いのですが、亜麻仁油は化学合成で作れますし、また木片に塗った仕上がりは今ひとつ納得出来ませんでした。他にもいろいろな乾性油がありますが、搾油方法がはつきりしていないので、現在は搾油するときに化学物質を使うケースが多いパスしました。国産のモノでなにか良いモノがないかと探していたところ工芸職人の間で、荏ゴマ油を木に艶や防水性を高める為に使うという事を聞ききました。

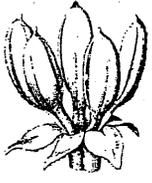
祖 父は、番傘職人でしたので、和紙に強度を持たせる為に柿渋や荏ゴマ油を塗り防水性を高めていた話しを聞いていました。日本で一番雨量が多い尾鷲で、使っていたくらいなので優れた防水性を持つ事は知っておりました。木に塗ったところ艶もキレイにできません。また、木に浸透する性質を持つので、蜜ロウで木に皮膜を作り、荏ゴマ油で木の中に浸透するワックスができます。また搾油方法も昔からの製法ですので安心です。

ワックスに使う蜜ロウは、未晒しのモノを！

蜜 ロウは、薬品による漂白をしているモノが多いという問題がありました。市場に出荷される蜜ロウは、口紅や軟膏に使われることが多いので、色を乗せる目的と、成分を一定にする目的があるため、塩素系の薬品で漂白するそうです。(蜜ロウは取れる場所によっても、果によっても成分が微妙に異なる)ワックスの場合、床に皮膜をつくる為に使うので漂白する必要がないので、果に含まれるゴミだけを取った未晒し蜜ロウを養蜂家から直接仕入れることにしました。

防

湿・防霉・防水性に優れた蜜ロウは、古代エジプトでは、壁面やミイラの保存に使われておりました。また、蜜蜂は巣の中に雑菌や細菌などが侵入しないように、樹木や葉草のエキスを集めたモノを、唾液で発酵させた液体(これをプロポリスと言います。)を巣に塗ります。蜜ロウを漂白しないことで、ロウ成分だけでなくこういった副産物も利用することが出来ます。



KEY ☆ POINT

1 肌についても安心・安全素材

「確かな原料を使う。原料の産地の記載。生産過程で化学薬品を使わない製造方法。」
 を基本に肌についても安全な商品を心がけております。
 化学物質でアレルギー反応がある方、小さなお子様がいらっしゃる方も安心して使えるワックスです。

2 常に職人とディスカッション出来る体制を作り、お客様の御希望に合った

「オーダーメイド*未晒し蜜ロウワックス」を妥当な価格で、御提供出来るように努めます。

流通コストを抑え“良いモノを妥当な価格”で御提供出来るように努めております。手作りによる生産なので常にディスカッションしながら作ることが出来ます。大工・材木屋・木材市場・建築家・工務店・家具職人などそれぞれの専門分野の方々、また一般主婦の方々にモニターになって頂き、品質の調査をし出来るだけお客様の用途に合ったワックスを目指しております。

- ◇ワックスの濃度を4タイプ (A,B,F,E) を用意しております。
- ◇18%に限り、濃度のオーダーも出来ますので、微妙な濃度の調整も致します。

3 一回塗りで仕上がり、伸びが良く、作業効率が良い。

従来の自然塗料に比べ、作業効率が良いので、一般の方及び業者の方でも気軽に使えます。また、塗りむらがないので、使用頻度が激しい水回りや台所など部分的なメンテナンスが出来ます。

4 木目に自然な艶を与え、木に防水・防腐効果をもたせ、木を保護します。

ワックスの本来の目的は、木を保護することかと考えております。木の持つ風合いを生かした自然な艶のほうが木目に表情を与えるように思えます。

5 生産することで、日本の雑木林を生かし、雑木林を存続することに貢献できる商品開発を目指しております。

リアス式海岸の地形を持つ紀州は、雑木林の花々を探蜜した“山の蜜”という特産品があります。その蜂の巣を生かした商品を流通させることにより、雑木林に循環経済活動を持たすことが出来ます。環境に負担をかけず、焼却後も有害なモノを出しません。現在、林業は大変厳しい状況です。山主が税金すら払えない状態で、山を手放す人が増えてきました。(夢の段階の話ですが) 植林システムは林業だけでなく水産業他いろいろな業種と共同で山を守っていくネットワークで活動をしていけるように努めています。

ツバチの世界は
 分業により、生きる為の仕事を務め
 ます。花粉を集める係。ハチミツを作る
 口作りセリを作る係。音見係他
 たくさん係がいます。
 その為 働きは
 たくさん 作業場が
 六角形からつな
 ぎも 随分と風
 障りの距離を測
 定の向きを変えな
 ければ
 行けません。

巣をつくる為には
 蜂の巣を
 作る為には
 フタの隙の間に
 約24時間
 暖かから
 この口の重さ
 巣作りを
 いう組立住宅
 土や岩を
 りたり
 つかえ
 最高の巣(蜂の)

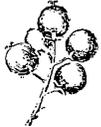
原料について



和歌山産未晒し蜜ロウ **無漂白**

- ♪蜜ロウとは、蜜蜂が体内からロウ成分を分泌してモノで、蜜蜂の巣に使います。
- ♪未晒しとは、薬品による漂白をしてない蜜ロウという意味です。
- ♪蜜ロウは、木の表面に皮膜を作ることで、防水・防腐効果を高めます。

8字型ダンス
花が 100m よりも 遠い ところにある
ことを教える「言葉」で 花の方向も 距離も
教えます。丁度 8の字をつづらした形で 〇〇



国産純正一番紋り荳ゴマ油 **無添加・無農薬**

- ♪荳ゴマ油の原料荳ゴマ(紫蘇科)は、中国産無農薬荳ゴマより国内で搾油した一番紋りの純正油です。で100%天然のモノです。手についても安全です。
- ♪荳ゴマは、木の中に浸透することによって、防水・防腐効果を発揮する乾燥油です。

- 用途や仕上がりの好みによって、濃度が選べる4タイプ。
- お好みによって微妙な調整が出来るオーダーメイドもあります。
※ 18%のみワックスのオーダーが出来ます。

■ 使用参考例

濃度について

木目が濃くなる。
作業効率が早い
乾きが遅い

木目が自然
皮膜が多い
乾きが早い

荳ゴマ油が
多い

▲
E

▲
F

▲
B

▲ 蜜ロウが
多い

合板

乾燥が激しい木材

無垢材

すでに塗装しているフローリング

竹製品・籐製品向き

無垢材・皮製品

業務用木製品

家庭用木製品

(柱・フローリング等)

(ダイニングテーブル・木の椅子・フローリング・木彫等)

価格について

容量	価格	濃度
100ml	1,200	Aのみ
1%	7,000	ABFE
4%	25,000	ABFE
18%	100000 送料込み	ABFE オーダー 有り

尾鷲ヒノキ内装材加工協同組合工場で
蜜ロウワックス仕上げのフローリングを販売します。

ヒノキのフローリングを普通の価格で納めています。

ヒノキは、高級品ではありません。尾鷲では一般的な材です。ヒノキが高いイメージがあるのもヒノキ御殿、ヒノキ風呂などという言葉からくるイメージからくるのでしょうか？一般の施主様から敬遠される材木となってしまい大変残念に思えます。

ヒノキのフローリングを工場から現場へ宅急便などで直送して納めるシステムを取り入れることによって大工さんが倉庫からトラックで運ぶ手間もなくなるかと思えます。

現在は、ヒノキと集成材・合板と比べてもさほど変わらない価格になっております。にもかかわらず住宅で無垢材が使われなくなっている傾向になっております。工場から直送することによってヒノキが妥当な価格で納められます。こういった販売によって、少しでも施主様に国産材を見直していただくきっかけになっていければと思っております。

蜜ロウワックス仕上げのフローリングもはじめます。

100%自然塗料は、有機溶剤を入れていないため乾燥までに半日から一日がかかります。天候によってはもっとかかる場合もあります。業者さんのスケジュールによっては、時間がネックになることもあるかと思えます。

蜜ロウワックス仕上げのフローリングを販売することによってこういった問題にも対応していけるかと思えます。価格につきましても、現地で蜜ロウワックス仕上げする為、妥当な価格で納められるかと思えます。

無垢材も自然塗料も、家を建てる時施主様が考慮に入れられる価格を目指しております。こういった材が普通に使われると住宅処分の時にでる、有害物質の問題に対しても、かなり前進した答えがでてくるように思えます。昔から使われていた普通の原料を普通の価格で提供していきます。



こんにちは。私は今年の大平宿でパンヂイ同盟秘伝のパンヂイ三唱を披露させて頂いた三重県尾鷲市の小川耕太郎です。

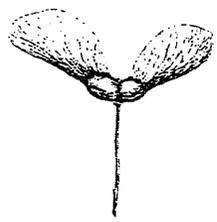
約1年前に、精進料理「月心居」の主人の棚橋さんに吉田先生を御紹介頂き、先生に尾鷲市まで講演に来て頂いたのがきっかけで、昨年大平宿に参加させて頂いております。

ところで、尾鷲市はヒノキの産地として有名ですが役物の低迷から経営が厳しく、私の父と私が経営していた製材所も講演の半年前に倒産してしまいました。

尾鷲市では、住宅を建てるころまで、自分たちで手がけなければとの考えから、その一年前にプレカット共同組合を作り、そのときには内装材加工工場組合の設立の準備をしていました。(将来は、尾鷲ヒノキの家販売会社設立する予定で、私は密かに吉田先生設計の住宅にしたいと思っています。)

さて！吉田先生の講演後の食事会の席で「内装材協同組合の商品を宅急便で建築現場に届けるシステムを作りなさい。」とのアドバイスを頂きました。あれから一年、十月1日に竣工式を迎えることになりました。宅急便で、私共の蜜ロウワックス仕上げの製品をお届け出来るよう準備を初めています。年内には販売開始可能にするつもりです。新宿リビン グデザインセンターオゾンでも、すでに展示されている蜜ロウワックスと共にフローリング・壁板のカットサンプルも展示していただく予定です。吉田先生を紹介して頂いたことから縁がどんどん広がりがり倒産もこのワックスを作り広める為にあったのではないかとさえ思っております。私達一人では、何も出来ませんが強く信じ前進しようとする、いろいろな方々から助言を頂いております。これからも宜しくお願い致します

三重県尾鷲市 小川耕太郎、百合子



お問い合わせ先

小川耕太郎 ∞ 百合子

三重県尾鷲市真田町105番地

TEL 05972-7-3361 FAX 7-3360

掲示板

藍染めパート 2 のお誘い

好評につき藍染め体験企画の第2弾を行ないます。シミができたシャツなども見違えるように蘇ります。前回参加できなかった方も是非どうぞ。

日時：11月3日(祝) 10:00～

(昼食持参)

於：すずき藍工房

埼玉県羽生市東7-3-4

TEL/0485-62-1718

染めるもの(シャツ、ズボン、糸など)の種類によって染め代がかかります。

初めて参加される方は、鈴木先生の講師料として3000円を用意してください。

参加ご希望の方は、10月28日までにご連絡ください。

申し込み先： たらだかずえ Tel 0422-53-3594

Fax 0422-53-3597

案内図等は申し込まれた方にお送りします。

////////////////////////////////////

次回の 語る会

語りべ：吉田桂二氏

お題：木造架構－軸組大架構

日時：10月6日(水) 19:00～

場所：無垢里

渋谷区猿樂町20-4 TEL 03-5458-6991

参加は自由。酒、つまみ持ち込み歓迎。

■世話人会報告

(99.09.24 於：飯田橋／もてなし 出席者 21名)

1. 大平建築塾の反省会

- ・アンケート結果は今号にて報告。
- ・大平建築塾 CD-ROM について一好評で大半が販売できました。
- ・来年度大平建築塾日程予定

第7回大平建築塾 8/19(土)～21(月)に開催

- ・事務局担当者及びテーマについては次回世話人会にて検討。

2. 機関誌について

- ・10月末に発行予定。
- ・機関紙広告・スポンサーのメ切りは10/15まで、御協力お願いいたします。

3. 総会・忘年会 12月10日(金) 幹事：連合設計社市谷建築事務所(岸)

場所及び時間については次回会報でお知らせいたします。

4. 次回定例会は今号表紙にて案内

■同人活動

- ・吉田桂二 「池部陽」が現代に投げかけるもの(住宅建築8)
- ・長谷川順持-M邸/庭と住まいの関係を深める、佐藤邸/ローコスト住宅で何を守るか、前橋の家/成長と創意を育む家(住まいの設計/11,12月号)

■会報編集局より

・**次回世話人会 11月11日(木) 18:30 場所：飯田橋／もてなし**

*世話人会は開かれた会です、興味のある方は誰でも参加してください。

- ・編集局住所が変わりました。原稿を送ってくださる方は、お間違えのないようお願いいたします。
- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月 20日

◆ 編集後期

- ・今年のプロ野球は、ダイエーホークスが優勝しました。去年の横浜ベイスターズと同じように十数年ぶりの優勝です。こんな時だけ沸いて出てくるファンがいるんですね。去年の横浜ファンは今何処？。それにくらべ阪神ファンは、勝っても負けても負けても……ファンでい続けることに感心いたします、ねえ、益子さん。(A)
- ・新会員で尾鷲の小川夫妻から、力の入った同人紹介文が届きました。今年の大平宿で、おおくらやの真っ黒になった柱や建具に、せっせと蜜蝋を塗りこんで、「来年、どんな風に変化してるか楽しみです」と語っていた夫妻の姿が目に残っています。(K)
- ・2年以上に渡った『夢屋ものがたり』の連載も今回で終わり。作者の大庭桂さんからメの言葉を頂きました。挿絵を担当してくれた連合設計社の佐藤君も、大変ご苦労様でした。(A/K)

会報編集局：〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

アトリエ・ヌック 新井 聡/勝見 紀子



99年度事務局：〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-10-1-606 Tel/Fax 03-3204-9373
生活文化同人事務局 木の建築設計 江原幸壹

生活文化

生活文化同人会報 1999 (平成11) 年12月号 No.40

総会・忘年会案内	01
① 10月定例会報告／石引浩子	02
ミーハー建築探偵VI／岡部知子	09
熊本県玉名市高瀬商店街における地域密着型街づくりの試み／坂井信彦	12
② 「八千代座」一暮る芝居小屋一／石橋和幸	14
まちづくり企画展 民家・町屋の風景から／石橋和幸	19
リレー連載 「日本の」家庭菜園／綾部孝司	22
③ 掲示板	24
世話人会報告・事務局より	26

生活文化同人総会・忘年会

茶藝館
標

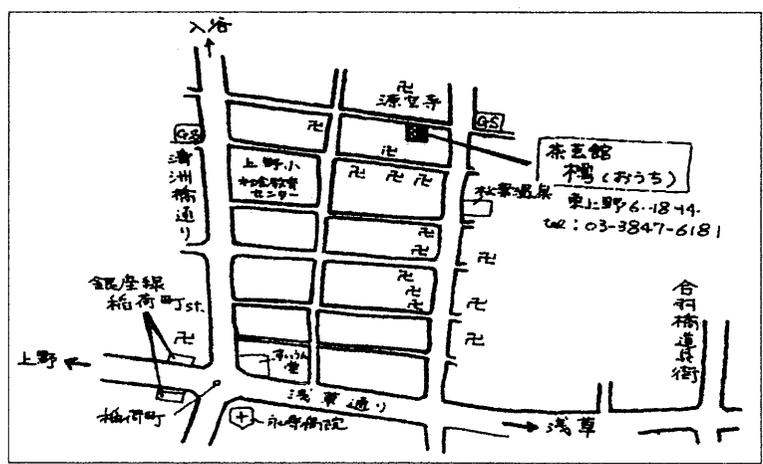
おうち
TEA HOUSE
AND
CRAFT SHOP

日時：12月10日(金) 18:30~

場所：京上野6-18-14
(最寄駅 銀座線稲荷町駅)
03-3847-6181

会費：6,000円

申込み：連合設計社(洋)
03-3261-8286
12/3までにお願ひします



戦中・戦後と、激動の時代を通して建築設計のお仕事をされてこられた小町和義氏を講師に迎えて、同時代を生きる吉田桂二氏が聞き手となり、途中、立松久昌氏の解説などを盛り込みながら、思想、体験やエピソードなどたいへん貴重なお話を伺える事が出来ました。

吉田氏 「お生まれは、・・・・・・」

といったかんじで、お話は和やかに始まっていきました。

小町さんは、昭和二年、八王子・宮大工の棟梁の家で9人兄弟の6番目、御長男としてお生まれになり、将来は大工を継いでほしいと思う父親の元より離れ、新宿にある工学院に行かれています中、義兄の友人を通じて、昭和十七年、山口文象建築事務所に書生として入所。その頃、日本はまさに戦時中追い風の中で、前年十二月には真珠湾に奇襲攻撃を仕掛け、アメリカとの全面戦争に入っていた頃です。その頃山口先生は事務所を銀座一丁目に構え、丸の内には書齋を設けていた。所員8人、書生が3人という大きな事務所であった。

吉田氏 「・・・・凄いですね、設計事務所でそんなに出来ませんよね、
・・・・資産がお有りになったのかな。」

小町氏 「いや、山口先生は独学で、ドイツのグロピウスに行って勉強して帰ってきた人で、資産があった訳ではないんですよ、その頃は仕事があったんですね。」

(中略)

小町氏 「その頃やっていた仕事というのは、軍関係の仕事で、山口先生は戦後あまり言いたくなかったようですが、工場の宿舍等の仕事がありましたね。」

山口文象建築事務所に入って

書生となった頃は、昼間は先生の書齋の隣の控え室にいて、スケッチを銀座の事務所に届けたりしており、夜は工学院で勉強していた。それ以外の時間は、子守りなどをしていた。

小町氏 「軍関係の仕事で、工員宿舍の設計を主にしていたんです。」

吉田氏 「その時代の仕事は全部木造ですよ。」

小町氏 「ええ、最初は基礎伏等から書いていて、大判で200分の1でも入らないんですよ。」

吉田氏 「それはでかいなあ・・・そんなもん木造で作っていいのかなあ、まあその頃、建築基準法は無かったしね。」

小町氏 「200分の1ですから、土台が例え五寸でも五里ですよ。」

吉田氏 「そんなの200分の1では分からないよ。それはすごいね。」

小町氏 「忙しいんで学校に行けないんですよ、いやかえって仕事していた方が面白かった。」

吉田氏 「親から離れて良かったですね。」

小町氏 (笑い) 「良かった、良かった。」 (会場に笑い)

吉田氏 「やっぱり家にいたら棟梁になっていたかもしれんけど、今は無いよな。」

小町氏 「いやあ、そうなんですけど、最近はちょっと失敗だったかな？なんて・・・。(笑い)」

戦争が激しくなるにつれ、所員も徐々に兵隊となっていき、ついには3人になってしまい、昭和十九年頃まであった仕事もその頃には無くなっていた。空襲があった夜に、先生の家屋根で防災頭巾をかぶって独り空を眺めていたこともあった。

大森ギャング事件

小町氏 「・・・ぼつんと一人丸坊主の人が事務所に訪ねてきたんですよ、山口先生はいないかってね、・・・。」

中略

小町氏 「先生に伝えると、『善ちゃん、帰ってきたか。』・・・。」

十三年の刑を終えて出所してきた建築家の今泉善一氏であった。戦前、日本共産党が非合法になり、スパイが入ってきて資金が無いから大森の銀行に押し入れ！言われ彼は行くのである。それはまったくのカラクリであった。たいへん真面目で、人が良い彼は、全て話してしまい捕まってしまうのである。その後、今泉善一氏は、前川国男建築事務所に入いった。

未来が開けた先生の言葉

小町氏 「・・・威勢のいいやつは、悲願して行くんですよ。私も山口先生に『いつまでも仕事が無いから、悲願をして予科練に行きたいんだ。』と話したんですよ。そうしたら、ものすごく怒られたんですよ。正座させられて、『おまえね、嫌でも赤

紙が来れば行かねばならないんだから、家で勉強していればいいんだ。命を大切にしろ。』そのとき、先生は、おかしいんじゃないかなと思ったと同時に、俺は行ったら命は無いと思っていたし、先生に怒られてなんだかポツと明るくなって、開けた気がしたんですよ。」

吉田氏 「山口さんは、創宇社での活動をやってきた人だから、日本がどんどん侵略的なことをやっていく事に対して、ものすごく疑問を持っていた人ですよ。まあ、創宇社というのは、そういう意味での運動としてはね、評価しなくてはいけないですよ。中略・・・創宇社の創ったものが、表現的なものが多いからそういうふうに見てるけど、そういうもんじゃない思想的背景というのがあったんですよ。そのへんをちゃんと見ないとだめだと思いますよ。そうでないと、戦後の活動が出て来ませんよ。」

親父同然な人

小町氏 「・・・16、7歳と40幾つですから、神様みたいなもんですよ、まともな話しを聞きたいと思っても、話が出来ない。隔たりがあるんですよ。（中略）・・・早稲田の工学校に行っている先輩の卒業設計を手伝って、先生の家書生部屋でやってた訳ですよ、それで遅くまで電気つけて何かやっているとき親父（山口先生）が夜中に下駄はいて見回りに来るんで、それで机に向かってやっているとき、ガラス越しに親父の顔があったんですよ。『何やっているんだ。』って入って来て、『まずい見つかった』てなこと、もうほとんど出来ているですよ、1週間前ですから。すると、親父が見るなり、『こんなもの出せるか。』とって破かれちゃったんです。」

吉田氏 「こりゃきついね。」

小町氏 「先輩なんかは泣くばかりですよ・・・。そしたら山口先生その日から泊まり込みですよ、僕らと一緒に。」（笑い）

吉田氏 「責任とってくれたんだ。」

小町氏 「自分でやってんだから、それを僕らが、図面にしてインキングして、なんといっても一週間で間に合したんだから。そういう人ですねえ。」

吉田氏 「それはなかなか、いい話ですねえ。」

中略

小町氏 「その後の話しなんですけどね、先輩が卒業して卒業証書を持って来たその時に、先生が『おまえ、建築やめろ。』って言うんですよ。それから兵隊にいったんですけどね、帰って来てから建築辞めちゃったんですよ。ホントにショックだったでしょうね。中略・・・またずっと後の話しなんですけどね彼は山梨県の山の方の出身なんですよ。それで、村長さんになったんです・・・。」

山口文象氏の仕事

吉田氏 「山口文象さんの仕事を最初に見たのは、戦後3年に新製作協会というのが出来て、絵とか彫刻の団体なんですけど、建築部というのがあったんですよ。山口さん、清家さん、池辺さん丹下さん、谷口さん、だいたい居ましたね。新製作展があって、そこで図面とか写真を飾っていたんですけど、本物を出さなきゃならないとなって、山口さんが出しましたよね。最小限住宅みたいなのをね。ローコストで、たしか六坪ぐらいで、柱が二寸五分位で、その中でキッチンと住めるということになっていたんだけど、僕はあれを見た時にね、バラックだという気がしなかったんですよ。というのは、戦後みんなバラックだったからね。やっぱり、ちゃんとした住宅というのかな、建築家がキッチンと造った家だと思ったんですよ。・・・あの図面もひいたんですか？」

小町氏 「ええ、それでその頃プレハブの研究もしていたんですよ。それで、前川さんは、`プレモス` っていうので、山口先生は `ロジコン` という名前ですね研究していたんですよ。」

吉田氏 「まあ、かなりプレモスは有名だけどね、・・・。その頃プレハブはパネル工法でね。戦後住宅が無くて・・・。炭鉱住宅、つまり戦後、日本が何も無い、炭鉱を掘らなきゃエネルギーが取れ無い、だから炭鉱に力を入れたんですよ。常磐の炭鉱の跡、まだプレモスがあるんですよ。これだとおもってね、物置きのようになっていたけど。プレハブというのはヨーロッパでもそうですけど、応急需要に造られて来たんですよ。しかし、山口さんの二寸五分角の住宅はそれでは無いですよ。・・・我々もそうだけれどその頃、日本人はみんな家の性能なんて考えませんでしたね。」

昭和二十年の五月頃先生は、小海に疎開され小町さんは、疎開先から通っ

ていた。だが、八月に空襲で八王子の家が焼けてしまい、お爺様が翌日亡くなられ、小町さんは八王子に帰ることになり、一年間主に、焼跡のバラック造りを手伝っていたそうです。そして一年後、小町さんは山口先生の元に戻られて、その後終戦を迎えたが、仕事は、無かったようだ。

そして、山口先生が親しくしていた田園調布の新製作の猪熊弦一郎さんの家は、焼けなくて済んだため、新製作の人たちが皆集まって来ていた。山口先生の家に居た小町さんは近所でもあったため、そこでデッサン等をし、夜は、モデルさんを書きその後はダンスパーティーに移行していったそうです。それをトワエモアといったそうです。

その頃、進駐軍の仕事をしていた設計事務所は忙しく、ディペンデントハウスが沢山建てられ、それが経営を支えていたようです。進駐軍の仕事をしていた事務所は、一般の事務所の10倍のお給料だったそうです。

東京建築事務所（平松建築設計事務所）

昭和二十四年、山口文象建築事務所ではいよいよ仕事が無くなり、山口先生の紹介で、後輩の平松さんの事務所、東京建築設計事務所に行く事となります。東京建築設計事務所は、木村得三郎、平松義彦、今泉善一、道明栄二の4人で共同経営という新しい形をとっていたそうです。そこはたいへん忙しかったようで、主に進駐軍の仕事と、一方では労働組合の全日本造船労働組合会館などの仕事をしていた。小町氏は、山口先生の家を出て住む所が無く工事中は、そこの飯場にいたそうです。職人が居るそんな所に入ってみたかったとおっしゃっていました。全造船は、今でも原宿にプティックとして姿を変え残っているそうです。その頃建築家たちは、立体最小限住宅を競って建てていた時代でした。

小町氏 「デザインは、今泉さんが主で、・・・。」

吉田氏 「今泉さんは、手が早い人でねえ、・・・。」

小町氏 「吉田さんも早いよね。」 (笑い)

吉田氏 「いや、T定規でねえ、三角定規使わないんだよ。縦の線もT定規で書くんだよ。(笑い)・・・彼のスピードで事務所が支えられていたんじゃないかな、なんて思うんだよ。」

(笑)

その頃は、バタフライが流行っていて紀ノ国屋、慶應などがそれであり、学生の卒業製作は、みなバタフライだったそうです。

後に、東京建築設計事務所が社名を平松建築設計事務所と変え、事務所は銀座の三越裏のビルの屋上のプレハブにあったそうです。空調なんて無い時代だったから、夏は上着を脱いで図面を書いていたそうです。

新日本技術者集団〔NAU〕が出来た頃、皆仕事が無く、民主化運動をしたという時期があったようだ。六十年アンポの時、民主化運動が銀座で盛んに行われていた。そこで小町さんと立松さんが、出会ったそうです。お二人とも声が大きく、お互いに印象に残ったとのこと。

対談中、小町さんに民主化運動の5月26日～7月7日までの記録をとった資料を見せていただきました。昼間事務所でプラカードを作り、デモから帰って夜仕事をしていたそうです。吉田氏の先生にあたる中村登一さんの事務所でもプラカード作りをしたとの事です。中村登一さんは、吉田五十八さんの親戚だそうです。

平松建築設計事務所を辞める理由

吉田氏 「何故、平松建築設計事務所を辞める事になったんですか？」

小町氏 「平松建築設計事務所を辞めるつもりは全く無かったんですよ。・・・。平松建築設計事務所は、共産党よりの仕事が多かったんです。ちょっと言いにくいんですけど、考えが変わって来たんですよ。」

小町氏 「・・・大学紛争なんかあったりして、参加して学生と話すこともあり、そんなことをしているなか、考えが変わって。そうすると事務所には、仕事にもさしつかえる人間になってきた。それじゃあ、私が辞めたほうがいだろう、ということ。・・・。

平松さんも私の考えを解っていたしね。それで辞めよう。

という事になったんですよ。まあ、設計事務所では思想的な考えが変わるといのは、その頃特殊だったんですよ。

吉田氏 「ただ、今はそれがなさすぎる。逆にいうとねえ。・・・そんな話は、建築を造る事とは、無縁である。それは、僕は、おかしいと思うんだよねえ。・・・なんであれ、一つの思想を持たないとな。今、無さ過ぎるんだよ。その頃まででしたよね。きちんとした思想の形態をとっていたのは。建築設計も個人が消えて、みんなで作れば良いものが出るなんて。」

番匠設計を開設して

小町さんは、平松建築設計事務所を突然辞めてしまったので、仕事を取りに親戚中駆け回ったとの事でした。

建築を表現するなかにおいて、小町さんが大事にしている事は、その街の背景や、安心感、耐久性、色気等。さらには、接点の納まりが全体のデザイ

ンを決めていき、良いものになっていくという気がする。やはり、美しいという事が最終的な事ではないか、とおっしゃっていました。

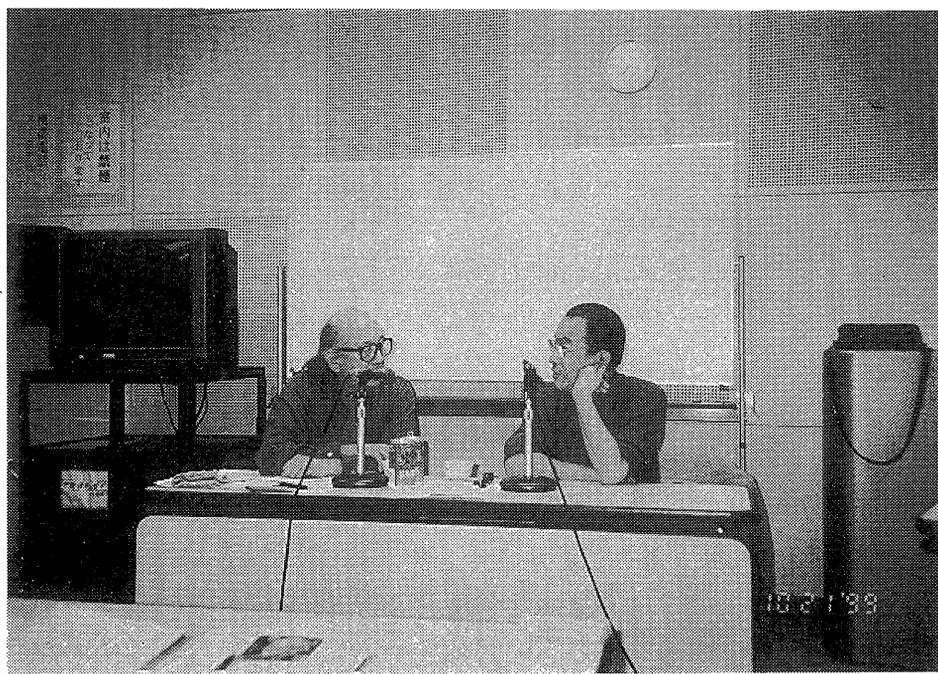
小町さんの建築に対する思いは、住宅建築の作品集によくでています。

このような、貴重なお話を伺えたこの会に参加出来た事は、たいへん幸せなことであり、和やかな雰囲気の中出席された皆さんも、自分を振り返りいろいろと思想を巡らした、たいへん充実した時間でした。

この機会にお話しをしていただいた、小町義和さん、吉田桂二さん、立松久昌さんに感謝いたします。

最後に、たいへん至らない文章ではありますが少しでもこの会の様子が伝える事が出来れば幸いに思います。

報告者 石引浩子



英彦山はとても不便で遠いところなので行くのは無理だと思っていましたが、ずっと行きたかったところでした。というのは縁があってその英彦山の材木を使う機会がありましたが、名前を知っただけなので英彦山神社はどんなところなのかそこへ行きたかったのです。そしてそこに引かれてしまった理由がもう一つありました。それは福岡県の玄界灘の東側に響灘というのがあります。そこに流れ込んでいる遠賀川の河口は私の生まれたところなのですが、その川をさかのぼって福岡と大分の県境の近くまで行くと英彦山があるのです。そこは古来より神の山として信仰されていた英彦山神社のある霊山です。

その英彦山に周囲13m、高さ55m、樹齢1200年といわれている天然記念物に指定されている鬼杉があります。それを見たいとレンタカーを走らせ険しい山へ入りました。長い石段を登って神社まではやっとの思いで行きましたが、鬼杉まではそこから、どう頑張っても3時間半は要するようです。しかし私の用意した時間ではその鬼杉までに辿り着く事は無理でした。飛行機の時間があるからです。そんなわけで鬼杉は諦めました。私の気持ちを満足させてくれた木がありました。その木は後家杉といわれている幹の下の方にウロ(穴があいている)



英彦山神社より

が出来ている木で、樹齢は5、6百年ではすまないように思われました。山を下へ降り木のウロの部分に入ってびっくりです。中はかなり広く5人は入れそうです。

針葉樹は人の気持ちを落ち着かせる力があると言われていますが、そこへ入ったとき人を包み込む不思議な何かが感じられました。

英彦山に行くといったら、知り合いの人から「もう神社に行っても、すごい木はあんまりないよ」と言われました。ウチに入ってきたものは樹齢400年位の杉でしたが、平成3年だったでしょうか、台風によって倒れた木が市場に出てきたものでした。実際山に入ってみると確かに400年と思われるような木は少なく、ましてや鬼杉のような木は見つけれませんでした。

今でも神社に続く石段の脇には坊跡の門柱や石段がその昔を想像させてくれます。数は少ないのですが幾つか建物も残っていて、財蔵坊は留守番しているボランティアのおじさんが説明をしてくれました。建て直しをして住んでいる家、出ていってしまって住人のいない家、中には定年を迎えたからでしょうか、時どき出かけて来られ、夫婦で庭いじりをしながら趣味の焼き物の販売している家もありました。このお宅のお庭も立派でしたが、坊にはそれぞれお庭があったはずらしいのです。しかし案内所によると、室町時代から江戸初期に築庭されたらしいものが、幾つかしか残されてはいないということでした。その一つに、今は九州大学の生物研究所として使用され、立ち入りは禁止されているのですが、休みのため誰もいないだろうと、そこにある旧座主院跡の庭園へ忍び込みました。さすが座主のいたところですよ。折れ曲がった石段は気が遠くなるほど上まで続いていました。予想していたとおり、誰ひとりいませんでしたが、庭もあまり手を入れられておらず草が生い茂り、石の間を流れ落ちるはずの水はタンクに溜められパイプを通され落ちていました。せつかくのお庭の雰囲気が消されていて少しがっかりものでした。

又石段を汗を拭きながら登っていると、両脇を抱えられるように降りてくるお婆ちゃんに会いました。帰りには、同行者がいるとはいえ、杖だけを頼りに自分を励ますようかけ声を掛けながら自力で登ってくる全盲者に会いました。歩くにも人の手を借りなくてはならない人たちが、極端な言い方をすれば命がけで訪れているのです。私は無宗教ですが、信仰心はすごいものだとこの時思いました。

霊山は昔、信仰をあつくしても女性は入山できませんでした。しかし現在は体力と、その気があれば入ることができますが、山頂を目指す事は健常者でも大変な事です。

こんな山の中で修行した昔の人たち(山伏)は大変だったと思います。10月に訪れた時でさえ湿気っぽく冷とした所でしたから、冬の寒い時期の修行の辛さは想像を超えるものだったでしょう。そして、今は汗を流しながら登る石段ですが、その高さは30cmもあるように感じられました。昔の人は背の高さはかなり低かったはずなのに体力の違いもあったのでしょうか。今の人間の軟弱さを感じました。

私は寒いのは苦手な暖房大好き人間です。しかし、最近室内で飼われている犬の毛が本来なら夏毛と冬毛と抜け変わるものが、エアコンの部屋に一年中いるため抜け変わりをしなくなっているということを知ると、条件の良い事に慣れてくる体に少し恐ろしさを感じます。

古い民家に住む人たちの中には暖房が効かないからと建て替えたり、リフォームをしたりしている人も多いと思います。確かに暖かさに慣れてしまった私達の体には寒さに耐えるのは辛い事です。囲炉裏にカマド・・・そして火鉢くらいで暖を取っていた時代の人には強靱な身体だったんだろうと思います。もっとも病弱な人はその時代に生まれても生きていけなかったのでしょうか・・・。出生死亡率が低くなっている現代、かなり身体的問題を抱えていても生きて入られるけれど全体的にみると皆んな軟弱になっているんでしょうね・・・。そんな時代だったら私生きていられたかな～なんて、思いながら石段を降りていきました。



後家杉のウロにて

熊本県玉名市高瀬商店街における地域密着型街づくりの試み

高瀬町組 坂井信彦

(連合設計社市谷建築事務所 熊本支所 生活文化同人会報会員)

都落ちしてはや四年。同人会員の方々に置かれましてはご健勝のことと存じます。福岡ダイエーホークスの日本シリーズ優勝にわく ここ熱き九州は福岡……の南に位置し、バーゲンにわく熊本より、熱烈投稿させていただきます。

高瀬町組結成

熊本での生活も落ち着き始めると、次はやはり仕事以外の、横方向のネットワーク活動がしたい、という思いにかられるようになりました。

「なんかせんといかん…。東京の生活文化同人のごたるなんかばあ…。」その頃、たまたま吉田桂二氏の講演会が熊本であり、そこでまた、たまたま出会った永井修文氏（玉名市在住 建築事務所アトリエN主宰）をナンパし、話を持ちかけたのです。

「東京の生活文化同人の如き組織をたちあげましょうよ。」と…

すると後日、氏より「玉名市に高瀬という古い町並みが残っている地区があるが、そこを題材に何かやってみないか」というオファーがあり、「フッ、…しめしめ…」と思いつつメンバーを募り（8人）発足したのが「高瀬町組」です。（97年8月）最近では我々のことを知っている人は「まちぐみさん」と呼びます。

街づくりに関する活動が殆どですが、過去の活動内容を簡単に紹介しますと以下のようなカンジです。

・街づくり事例視察

滋賀県長浜市の第3セクター「黒壁」を視察、高瀬地区内のお寺で長浜のスライドを交え住民集会開催

・商店街の祭りのイベント企画提案

らくがきオンザロード

商店街の通りをホコ天にし、子供たちはチョークで路上に自由に落書きできる。それを写真に撮り、写ってる子にプレゼント。



・談議処（だんぎどころ）の設置

商店街の空き店舗を自らの手（町組+商店主有志）で改修しコミュニティ施設として各種イベントや会議に利用
談議処のおく（住所が168番地なので通称いろは庵と呼んでいる。）に町組メンバーである岡本真司氏が常駐し、タウンマネージャーとして活躍中
あと吉田桂二氏来熊時にはちよくち

よく酒を交わしつつ談議させてもらってます。この同人誌の発行には間に合いませんが、11月22日には桂二さんに「茨城県古河市の町づくり紹介と高瀬の将来像」について住民とのバトルトークを予定しています。

「なあんーさま くまもとにきなあったら だんぎどころによってはいよ。まあーごつさけばのんじ えいくらうばいた…。まっとるけんね。」

（注釈）とにかく熊本にこられた折は、談議処にお立ち寄りください。お酒でも酌み交わし、心地よく酔いましょう。お待ちしております。

「八千代座」―蘇る芝居小屋―

熊本県山鹿市

山鹿八千代座棧敷会 石橋和幸

明治 43 年に建設された芝居小屋「八千代座」は国の重要文化財に指定された日本で 3 番目に古い芝居小屋です。一時は廃屋と成り果てていましたが、住民による復興活動が実り、平成 9 年から平成 13 年春の落成を目指して現在「平成の大修理」が進められ



ています。修理の様子は現場に設置された展望ステージで見学ができ、また、修理を監理している文化財建造物保存技術協会により広く一般を対象に月一回のペースで報告会が行われています。報告会では普段立ち入りできない現場内での見学や、参加者による柿葺き・塗り壁体験が行われ、文化財としての八千代座を人々の身近なものにするべく様々な努力がなされています。復興へ至る住民の活動や、修理の過程など語るべき興味ある事柄は多岐にわたりますので、許されれば次回以降に譲ることにして、少し長くなりますが、今回は八千代座復興活動を象徴する復興第一回公演裏話をお送りします。（私はその当時復興活動には参加していませんでしたが、この話が現在の私の活動のよりどころにもなっています。）

八千代座復興裏話 「昭和の終わりに」

昭和 63 年 春

地元老人会による「瓦一枚運動」（当時雨漏りが激しかった八千代座の、せめて瓦を葺き替えようと老人達が立ち上がり、地道に募金活動を行った活動）、青年会議所が主催した八千代座での「永六輔公演会」での永氏の「老人達がんばっているのに若い者は何をしているのだ！」との発言に触発された J 氏とその仲間は、ほとんど廃屋と化した八千代座での芝居公

演を企画する。彼らが子供のころに行われていた様に旅芝居の一座を呼べば良いという軽い気持ちからのスタートであった。

早速彼らは近隣市町村へ来ていた旅公演の一座に打診する。「11月にもう一度熊本へくるからそのころなら大丈夫だ。うちの座長が変わるから襲名披露公演でやりたい。」との答え。もう話は決まったようなもの。そこで当時から八千代座を管理していた市教育委員会の教育長に話を持っていくと、「それはいい事だ。がんばってやってくれ」との快諾を得た。彼らは11月公演へ向けて準備をはじめることになる。

昭和63年 夏

突然、彼らが準備している八千代座公演が市議会において問題となる。

「現在の建築基準法、消防法に違反している八千代座での公演はまかりならぬ、中止させろ」という意見である。実は当時の市議会議長と公演を許可した教育長とは周知の犬猿の仲。議会では感情移入としかとらえられない議論が続き、議員達も反対へと動いていく。(こうしたことは日常茶飯事といって良いくらい多い。地域で活動していると社会には驚くほど子供が多いと感じる。) J氏たちは驚き、市役所に行き公演を快諾した教育長に面会を求める。しかし、「教育長は出勤していない、自宅にいる」との事。仕方なく教育長自宅へと向かうと、教育長は自宅前の畑を耕している最中。その場で問答が始まる。

J氏—「今になって中止とはどういうことだ。すでに一座とは仮契約が済んでいるのに。」

教育長—「そのことはもう私には関係ない。後任に相談してくれ」

とにかく教育長はそう言うばかり。一同は分けわからぬままに引き上げる。実は今回の経緯を受けて教育長は辞表を提出し、退職していたのであった。さあ困った。だが、あきらめない。ならばと強行に反対している市議会議長に面会を求める。しかし、どこに問い合わせても議長の居所がわからない。議長は事を予見してか、極秘で人間ドックに入院中であった。地域の情報網を持つ彼らは入院先を突き止め、病室に押しかけた。八千代座復興への熱意をどんなに語っても、消防法違反を盾に議長は良しとしない。八千代座は明らかに現行消防法に違反している。「とにかく消防法だ！」彼

らはあきらめない。彼らは市の消防所長の元へ押しかける。所長を説得するべく公演中の防火十か条を持参して。

J氏「八千代座はたしかに消防法に違反している。しかし、八千代座復興は地域のためにも必要なことだと思っている。公演中我々はいつでも火元に向けられるように、水をいれたバケツを手を持った状態で小屋中に立っているつもりだ。もし、火災になって逃げ送れたおばあさんがいたら、我々が背負ってでも必ず助け出して見せる。」

彼らの熱意に動かされた消防所長は

「わかった。公演時間の間は消防車を八千代座に横付けしておいてやろう。」

新しい教育長や議会への消防所長の働きかけや、J氏たちの市民への訴えかけが功を奏して議会も公演容認へと変わっていく。J氏達も安心して一座と本契約を取り交わし、チラシ・ポスターの手配、チケットの販売を本格的にはじめるのであった。

昭和 63 年 秋

J氏達は公演準備に帆走していた。そんな矢先またも悪い知らせが舞い込んでくる。—————「昭和天皇病に倒れる」—————

社会には驚くほど自粛ムードが広がった。文化祭・学園祭、とにかく祭りと名のつくものは自粛・中止になった。大衆演劇の芝居公演などもってのほか。当然チケットは買ってもらえない。しかし、公演を中止すれば多額の違約金を払わなければならない。それよりも度重なる困難のたびにJ氏達の胸に浮かんだのは「今回八千代座での公演を中止したら、八千代座では公演はできないという前例を作ることになる。そうなったら二度と公演が行われることはなくなるだろう。これからの山鹿の為に中止はできない」という思いだった。彼らは自前の車、軽トラックにポスターを貼りつけ、ハンドマイクを手に市中を走り回った。個々人で知り合いを頼ってチケットの購入をお願いした。実はそのころ市中では、商店がシャッターを全開にして商売していると右翼が怒鳴り込んでくるという噂が飛び交い、商売するにもシャッターは半開にするといった状況であった。派手な街頭

宣伝は命がけといってもいいような雰囲気だったのである。しかし意外なことに人々の反応は好意的だった。「八千代座復興はいい事だ。ぜひがんばってください」。ところが、チケットとなると買ってくれない。複雑な社会状況であった。J氏達は最後の手段と、地元のテレビ・新聞に宣伝を頼み込んだ。新座長の襲名披露も売り物にして、出させてくれるマスコミにはすべて出演しチケットの購入を呼びかけた。こうして公演を目前にした10月の終わり、売れ残り分は当日券に願いをかけて、何とか公演を行えるめどがあったのであった。

昭和63年 11月 公演3日前

準備は整い、後は当日を待つばかり。

ところが、はたまた悪報。

今回襲名披露を行うはずの新座長が急性の病に倒れた。とても公演には間に合わない。襲名披露をうたった宣伝を行った以上、新座長抜きでは詐欺のようなものである。度重なる困難に立ち向かい疲れきったJ氏達には、あまりにも酷な知らせであった。もはやこれまで。あきらめのムードが漂う。しかし、キャンセルも視野に入れた打ち合わせを行う電話口で、一座の女優でもある新座長の母親は涙ながらに訴える。「お客様には私から誠心誠意お話しします。お願いですから公演だけはやらせてください」。今度はJ氏達が母親の気持ちに動かされた。代理の座長を迎えることにして、不安ながらも公演を決行する事になる。(ちなみに代理座長は当時落ち込んでいたハザマカンペイだった)

そして 公演当日

眠れぬ夜を過ごしたJ氏は午後の公演にも関わらず、午前中に八千代座を訪れた。そこには芝居を心待ちにした老人達が早くも入場の列を作っていた。手に手に芝居小屋では欠かせない自分の座布団を持って。芝居を待つ老人達の顔には笑顔があった。J氏はその笑顔を見たときこれまでの苦労がすべて報われたと感じたと言う。彼は、一人涙したと言う。

複雑な社会状況の中、多くの人が芝居を見に来てくれた。客席はほぼ満員になり、朽ち果てそうだった芝居小屋は開演前のざわめきに満たされていた。場内が暗転し、静かに幕が開き始める。中央には新座長の母親が舞台

にこすりつけんばかりに頭を下げて座っている。そして彼女は切々と観客に語り始める。これまでの成り行き。八千代座への人々の思い。芝居小屋では観客は彼女の目を見て話を聞くことができる。やがて舞台と客席とは一体となった。共鳴し合う空間が生まれた。

この日、八千代座は大いにうたった。

芝居がはねて帰る観客の、一人一人にJ氏達は頭を下げていた。共に笑顔だった。こうして復興第一回の公演は終わった。

いかがでしたでしょうか。昭和の終わりと共に復興への活動は始まりました。J氏達はその後「栈敷会」という組織をつくり、平成に入っても地道な公演活動は続けられました。さまざまな活動が功を奏し、八千代座は国の重文指定を受け、現在大修理中です。これからが、八千代座復興の意義が問われてくる事になります。八千代座の重文指定は単に保存するのではなく、使いつづける事を前提に行われています。吉田桂二氏が語る「保存と創造をむすぶ」考え方は、建築を超えてこうした活動にも示唆を含むものだと考えています。八千代座への、そして地域への人々の思いと、「創造」の大切さを胸に今後も活動を続けていこうと考えています。(今は八千代座活用運営団体の問題に取り組んでいる最中です。)

(ちなみにこの裏話は、当時の議員達が現役で活躍中でもあり、時効となっていない事柄も含まれるため禁転載。関係者の許可も得ていないのでなにとぞ内密に。)

まちづくり企画展 民家・町屋の風景から 顛末記

企画展実行委員会事務局 石橋和幸

企画展内容

期間 平成 11 年 9 月 23 日～11 月 28 日

会場 熊本県内 4 箇所（予算は各地区 3 万円）

山鹿市 ミシン博物館

商店街内の空家をミシン販売店が下取りした古いミシンを展示して、博物館として開放。空き店舗対策。

玉名市 談議処

商店街内の空家を住民の手で情報発信の場として修景。まちづくり集団「高瀬町組」の拠点でもある。

松合 松合ビジターセンター

台風被害で有名となってしまった港町。かつては米の集積地として繁栄。地区内に白壁土蔵が多く残る。地域の老人達が古民家を生かしたまちづくりを進めている。ビジターセンターはその拠点。来年度から建設省の補助を受け、地域内の民家の修景をはじめ。熊本での町並み修景の先進的な地域。

阿蘇 談屋鬼八

商店街の空家を小物販売の店として再生。阿蘇町のイベントを手がけるオーナーにより、様々な情報発信を行っている。

趣旨 民家・町屋の魅力の再発見と民家・町屋の再生事例を多くの人々に知ってもらい、それが特殊例ではなくこれからのまちづくりにおいて重要な要件のひとつであることに気づいてもらうこと。

展示内容

画家・向井潤吉氏が絵の題材を求めて訪れた地域で撮影した民家の写真を展示。初公開である。

吉田桂二氏が手がけた民家再生の事例をパネル展示。

開催各地のまちづくり活動をパネル展示。

その他 小国町の坂本善三美術館で行われている「向井潤吉展」の特別関連展である。

顛末記

平成 11 年 春

吉田桂二氏が設計した阿蘇郡小国町の坂本善三美術館。監理を担当した縁で今も交流を続けている学芸員の益田氏から、秋に予定している「向井潤吉展」の話聞いた。「従来の美術館内での絵画の展示にとどまらず、向井氏も題材にした民家の魅力を広く訴えるため、小国町内の空家を利用して企画展を行いたい。向井氏の写真の展示と大平のパネル展示、吉田氏の講演を考えている。」との事。「それは面白い。私も参加させて欲しい。」ということで、関連企画という形をとり同時期にまちづくり企画展を計画する事になった。

このとき考えていたのは趣旨に賛同したのはもちろんだが、1) 例えば山鹿でこうした企画を単独で行っても話題性・動員力に乏しい。有名な美術館との合同企画となればある程度の動員を図れるのではないか。2) 美術館、開催地の双方の宣伝効果があるのではないか。3) まちづくり活動には、これからは地域内だけでない「様々な連携」が重要であり、ひとつのケーススタディとなりうるのではないか。と言ったことであった。まず、玉名「高瀬町組」に打診。開催の快諾を得る。

平成 11 年 初夏

「高瀬町組」から開催地として松合地区にも呼びかけたいとの申し出。早速松合に出かけた。趣旨への賛同を得、開催を快諾していただく。同時に松合と共に県の協力を得て活動している菊地、蘇陽、阿蘇の3地区にも呼びかけてみてはどうかとの提案を受ける。あまりにも広がる（距離的にも遠い）事に不安を覚えるが、とにかくあたってみることに。結果阿蘇だけが参加できることになり4地区が確定した。

平成 11 年 夏から秋へ

玉名に関しては「高瀬町組」に委託。他の3地区の連絡と、全体のパネル製作、写真の手配を行う。パネル製作に関してはコンピュータソフトの習

得からはじめる始末。また、おりしも熊本は国体開催年。（最近の国体は競技だけでなく開催地においてスポーツ芸術と称して、様々な催しを行うため、地元の時間的・金銭的な労力は多大なものがある）準備は遅々として進まない。美術館との打ち合わせや、企画展を国体プログラムや同時期に進んでいた中心市街地活性化プログラムに乗せるための打ち合わせなど、うちの事務所は比較的自由にやらせてくれるとしても、時間的にかなり無理があった。とはいえ開催初日には写真の展示だけは間に合わせる事ができた。しかし、こちらが本当に訴えたいところである民家再生に関するパネルは1ヶ月遅れの展示となり、開催各地には多大な迷惑をかけることになった。

平成11年 秋

開催したものの、こちらの宣伝の遅れもあり、期待したほどに動員はない。毎週土曜日、山鹿展の当番として会場を開けても、一部関係者の励ましを受けるにとどまっている。現状打破を目指して地元TVの告知コーナーへ出演。連合坂井氏、玉名有志と共に30秒の告知を行った。（身近な人は「見ましたよー」と声をかけてくれるが…）宣伝の面では地元新聞社へのアプローチを行ったが不発に終わったことが悔やまれる。ともあれ、原稿を書いている現在（11月16日）から、残された期間には、企画展最大の目玉でもある吉田桂二氏の講演が玉名「高瀬町組」の企画で行われる予定でもあり、最後まで努力を続ける次第である。

ここまでで思うこと

当初の目標としての、広く多くの人々への呼びかけに関しては、十分な効果を得たとは言いがたい。しかし、開催各地において、日ごろ古い建物に興味を感じていた人々や、これまでのまちづくり活動のなかで関係した人々へはある程度アピールできたのではないかと思う。こちらの決意表明を行えたという程度の位置付けだろうとは思いますが、また、十分とは言えないまでも「様々な連携」の可能性は感じる事ができたように思う。次にやるべきことは継続することだろう。また何か考えながらやっっていこうと思う。全体として思うことは、「まあ、こんなもんだろう」

リレー連載

テーマ
日本の

第4回

日本の家庭菜園

綾部孝司



キッチン菜園で
人気のあるミニトマト

朝食をつくりにキッチンへと向かう途中、ふと立ち止まり味噌汁の具のことを考えてみると、昨日手元にあった野菜を使い切ってしまったことに気付く。

窓の外を眺めるとそこには青々と育っている我が菜園の野菜が目にとまる。みずみずしさを備えた野菜達はまるで手招きをしているかのごとく私の意識を誘う。

採れたての青菜でつくる味噌汁と塩揉みの浅漬けは眠気を吹き飛ばし、一日のはじまりに相応しい活力を与えてくれる。何よりもその食感「おいしい」の一言である。

家庭菜園。こう書くと趣味的な要素も含まれてしまうような気がしないでもないが、ここで言う家庭菜園とは食べるための菜園——収穫をとる菜園としてみたい。日本の風景をイメージしてみると何故か私の脳裏には菜園が登場してしまうのである。それもそのはずで、私の家の周辺では家庭菜園がない家は少ないくらいでいわゆる不動産系の建て売り住宅を除くと必ずと言っていいくらい菜園を備えている。では、みんな農家なのかと言うとそういうわけではなく、それなりに庭のスペースを利用したりしながら工夫して野菜や果樹をつくっているのである。当然、日々の世話はしなければならぬが、農薬の使用不使用は自分で判断すれば良く（使っても微農薬程度の様子。使わない人は増えているらしい。）、出所がはっきりしている分、食卓でも安心して食べることができる。例にもれず私の菜園でも多少の栽培は手掛けており、出来不出来はあれど収穫の時期が待ち遠しい。

以前仕事の関係で、格式張った日本庭園を持つお宅を訪問した際、敷地の一部に大根が生えている菜園を見つけた。その話で場は和み、食事の様子や家族の役割分担など話が私生活にまで及んだことがあった。

生活をするに食は欠かせないものであり、その食材がその場で調達できる自給自足の暮らし方がある意味理想的ではあるものの、特に都市部では用地を確保するのに四苦八苦されていることがある。



民家の庭先で当たり前のように見かける柿（自宅にて）

コンテナ菜園とも呼ぶのだろうか、ベランダ菜園やキッチン菜園は、地面が無くとも栽培できるとのことでコンテナガーデニングと共に人気があるらしい。先日Web上でベランダ菜園の栽培日記を見つけた。野菜を育てることが生活の一部になり、その成育過程がなんとも楽し気につづられている。また、屋根で菜園を始めた人もいるらしい。屋根断熱も兼ねているらしいが、収穫は地下足袋を履いた方が良いのでは、、、などと心配してしまった。

土地事情を反映してだろうが、それぞれに皆頑張っている様である。



家庭菜園が持てない人のために市が窓口となり貸し出している菜園
休日にはたくさんの方が集う

世界規模の食糧難が予想される21世紀まであと少し。そう、何ごとも工夫次第なのかもしれない。



菜園とは呼ばないと思うが、昔から良く見かけた日本の収穫の風景（川越にて）

第5回の筆者は、外岡生帆さんです。お楽しみに。

掲示板

～大平建築塾が、助成を受けることになりました～

大成建設が出資し、環境庁・文化庁を主務官庁とする《大成建設自然・歴史環境基金》の平成11年度助成対象事業の一つに、大平建築塾が見事選ばれました。この基金の主旨は、「国内外の自然環境、歴史的建造物等の保存及び活用に関する事業に対して助成することにより、これらを次代に継承し、もって人類の健康で文化的な生活の確保に資することを目的とする。」というものです。

この助成金の使途については、来年の大平建築塾に向け、今後世話人会等で話し合い決定いたします。アイデアのある方は、事務局までお寄せください。

平成11年10月19日

生活文化同人
隈 吉田 穂二 殿

公益信託大成建設自然・歴史環境基金
受託者 安田信託銀行株式会社
コンサルティング部 福祉信託グループ
(TEL) 03-3274-9210
(FAX) 03-3274-9504

公益信託大成建設自然・歴史環境基金 平成11年度助成金交付決定通知書

公益信託大成建設自然・歴史環境基金平成11年度助成金について、運営委員会において慎重に検討した結果、貴団体に対し、下記のとおり贈呈することに決定しましたのでご通知申し上げます。

記

1. 事業のテーマ

従前移住で無くなった大平宿の保存・活用
和歌山県構築に関する技術の伝承

2. 助成金額

金 800,000 円

3. 助成手続きについて

別添の「活動・研究助成に関する諸事項について」をご参照の上、同封の「助成金振込口座指定書」を、10月29日(金)までにご返送下さい。

4. 助成金贈呈日

贈呈式当日(11月下旬予定)、ご指定の口座にご送金致します。
尚、日程等詳細につきましては、決定次第、別途ご案内申し上げます。

以 上

■ 2000 年度会費について

1. 年会員 (会費 8000 円/年)
定例会聴講 (5 回/年)、機関誌 (1 回/年予定)、会報 (6 回/年発行)
すべての同人の活動情報を会報以外にも提供する。
2. 会報購読会員 (会費 3000 円/年)
会報 (6 回/年発行)
定例会聴講はそのつど聴講費を支払っていただきます。
3. 定例会聴講 (聴講費 2000 円/回)
年会員以外はそのつど聴講費を支払っていただきます。

☆年会員・会報購読会員の会費は 1 月から 12 月まで 1 年分とし、中途入会も上記の会費でお願いします。

☆定例会等で特別に資料などがある場合は別途実費となります。

☆新規入会、会員更新及び各種変更をなさる方は以下の表に必要事項を記入の上、

新事務局まで FAX するか郵送してください。★**事務局が変わります**★

☆会費納入は郵便局にて以下の口座にお振込み願います (手数料は各自負担)。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人 代表吉田桂二

☆不明な点は**新事務局**までお問い合わせください。

〒357-0128 埼玉県飯能市赤沢 238

生活文化同人事務局 岡部知子 TEL/FAX 0429-77-0101/2491

◎生活文化同人はボランティアにて運営されている会です。滞りない会の運営のために、会費の納入は 1 月末日までをお願いします。期日までにご入金のない方には会報の発行を停止しますのでご了承ください。

生活文化同人事務局 岡部 知子 行

■2000 年度生活文化同人新規入会申し込み、及び会員更新・変更届け
会員数等の把握、名簿整理のため 99 年度会員の方もお送りください。

新規会員 1. 年会員 2. 会報購読会員 (どちらかに○をつけてください)

会員更新 1. 継続 2. 年会員に変更 3. 会報購読会員に変更 4. 退会

フリガナ 氏名 : _____

勤務先 : _____

勤務先住所 : 〒 _____

TEL _____

FAX _____ E-mail _____

自宅住所 : 〒 _____

TEL _____

FAX _____ E-mail _____

会報送り先: 勤務先 ・ 自宅 (どちらかに○をつけてください)

■世話人会報告

(99.11.11 於：飯田橋／もてなし 出席者 12 名)

1. 総会・忘年会については今号表紙にて案内。
 2. 大平建築塾について
 - ・大平建築塾実行委員長：斎藤彰（長谷川順持建築デザインオフィス）
- 日程：第7回大平建築塾 8 / 19 (土) ~ 21 (月)
3. 機関誌について
 - ・総会にいらした方には直接お渡しいたします。その他の年会員の方には後日郵送いたします。
 4. 来年度世話人担当
事務局：岡部知子，会報：松本昌義，内藤敬介，会計：岸未希亜，
機関誌：益子昇，日影良孝

■同人活動

- ・高橋昌巳一（住まいの設計／12月号）

■会報編集局より

- ・来年より会報担当も変わります。原稿を送ってくださる方は、お間違えのないようお願いいたします。
- ・次回世話人会 1 月末（木）18:30 場所：飯田橋／もてなし
*世話人会は開かれた会です、興味のある方は誰でも参加してください。
- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月 20 日

◆ 編集後期

- ・3年間の会報担当も今回が最後の号となりました。おかげさまで、なんとか発行回数ノルマだけはこなすことができました。皆さん、ご協力本当にありがとうございました。
最近人から薦められた本の中で、目から鱗の言葉に出会いました。わかっているようで、わかっていたことがなかったことです。それは昨年亡くなった白洲正子さんの随筆の一節です。編集後記の最後にここに紹介したいと思います。
「現代は独創ばやりの世の中だが、現在を支えるのが過去ならば、先ず古く美しいものをつかまねば、新しいものが見える道理はない。こんな自明なことを皆忘れてる。忘れてるのではなく、ふり返るのが恐ろしいらしい。が、伝統を背負って生きて行く勇気のないものに、何で新しいものを生み出す力が与えられよう。」（『器つれづれ』より）（A）
- ・11月1日に高速道路の上越新道が全線開通しました。私の郷里の金沢への所要時間も、今までより30分ほど短縮されます。さっそく先日出かけてみました。紅葉真っ盛りの中、休憩した横川サービスエリアの辺りは、澄んだ空気とすばらしい景色に囲まれ、とても気持ちのよいところでした。気持ちのよい理由が名物の釜飯にもあったことは言うまでもありませんよね。

会報編集局：〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

アトリエ・ヌック 新井 聡／勝見 紀子

99 年度事務局：〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-10-1-606 Tel/Fax 03-3204-9373
生活文化同人事務局 木の建築設計 江原幸彦